博士論文

ジャック・ロンドンと鹿児島――その相互の影響関係――

鹿児島国際大学大学院国際文化研究科教授

森　　孝晴

2013 年 9 月

目　　次

まえがき

第１部
1.　鹿児島とカリフォルニア、
　　ジャック・ロンドンと日本・・・・・・・・・・・1
2.　ジャック・ロンドンに対する薩摩武士の影響
　　――黒木為楨（ためもと）の場合・・・・・・・・・・・・・・・7
3.　長沢鼎の武士道精神について
　　――手紙の下書きに触れて・・・・・・・・・・　22
4.　ジャック・ロンドンに対する薩摩武士の影響
　　――長沢鼎の場合・・・・・・・・・・・・・・・　34

第２部
1.　椋鳩十と鹿児島
　　――ジャック・ロンドンから松風まで・・・・　45
2.　ジャック・ロンドンと薩摩文人
　　――椋鳩十の動物小説へのロンドンの影響・・　54
3.　椋の山窩小説群と猟師物語『野性の谷間』への
　　ロンドンの影響・・・・・・・・・・・・・・・・　61
4.　椋の視点でロンドンを読む
　　――『白い牙』と共生の論理・・・・・・・・・　71
5. ジャック・ロンドンと椋鳩十
　　――椋はロンドンの「戦争」も読んだ・・・・・84
6. ジャック・ロンドンと椋鳩十
　　――「戦争」と『マヤの一生』・・・・・・・・・　93
7. ジャック・ロンドンと薩摩文人
　　――宮原晃一郎と山本実彦（さねひこ）の場合・・・・・・　97
文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　105

結語・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　113

参考資料（年表、他）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　114

まえがき

ジャック・ロンドンは、いわゆる〈日本もの〉と呼ばれる作品をいくつも書いているが、彼がそれほど深く日本に関心を持った理由の方はほとんど知られていない。またロンドンは無宗教を自任していたが、彼の周りの多くのアメリカ人がキリスト教から生きる指針を獲得しそれに従って生きている中で、本当に無宗教論者であったのか、彼が何を生きる指針とし、人生観としていたのかは、意外にわかっていない。ある研究者はそれを社会主義だと決めつけたりするが、彼は生涯自己の個人主義とも闘っていたわけであるし、一方で、またある者が、ロンドンは社会主義者ではないと決めつけたりするというありさまなのである。

ジャック・ロンドンの人生観や思想はそう単純ではないが、どこか常に人間味が付きまとう。彼は、真面目に人生に立ち向かい、生涯勤勉に働いたし、几帳面に生き、常に弱い者に寄り添う姿勢を示し続けた。それは単にそういう性格だったと考えることもできようが、それだけでは、もうひとつ、ロンドンの生き方の秘密が解明できないのだ。そういう感覚は筆者にとって長い年月の間つきまとってきた。

しかし、筆者がたまたま鹿児島の地に赴任して椋鳩十や長沢鼎といった地元の歴史に残る名士について知るに至った時、上記の謎を解くカギが見えてきたのだった。これはとても運のいいことだったが、鹿児島が幕末から明治初めにかけて日本の中心的存在だったことを考えると、筆者の来鹿が、必然的にロンドンの人生観の大きな一端を解明することにつながったとも言えるかもしれない。

本論文は、このようなロンドンの指針や人生観を鹿児島とのかかわりにおいて明らかにしようとする論考であり、彼の生き方や考え方の意外に多くの部分が、武士道精神、とりわけ薩摩武士道の精神によって形作られているのではないかと推論し、これを実証しようとするものであるが、さらにこうした鹿児島発のロンドンへの影響が逆輸入されて、あるいは里帰りをして、鹿児島の文学を中心とする文化に影響を与えるという循環になっていることをも実証していこうとするものである。

第１部

1.　鹿児島とカリフォルニア、ジャック・ロンドンと日本

1.1.　アメリカ移民とカリフォルニア

筆者はこれから鹿児島の武士長沢鼎(1852-1934)や作家椋鳩十(1905-87)とカリフォルニアの作家ジャック・ロンドン(1876-1916)がどうつながるのか追究しようとしているのだが、多くの人にとってそれは唐突に聞こえるかもしれない。ロンドンは『野性の呼び声』や『白い牙』などの作品で世界的に知られるアメリカ作家で、もちろん鹿児島に来たことはない。しかし、鹿児島と米国カリフォルニア州のつながりを考えてみるならば、これらの人物の関わりはさほど不思議ではないことが感じられるだろう。鹿児島とカリフォルニアの縁とは主に移民が結んだ縁である。そこでこれを理解するためにまず日本のアメリカ移民史をひもといてみたい。日本人のアメリカ移民は、遠く明治維新の前、いやペリー来航以前にも存在する。それは、いわば〈漂流移民〉とでも言うべき人々である。もっとも古い例では、1835年に音吉という漁師とその仲間３人がオレゴン州のコロンビア河口に流れ着いたというものがあるが、これは彼らがどのようにアメリカに暮らしたかがわかっていないようだ。

その点かなり詳しくアメリカでの暮らしがわかっており、その後の日本の近代史に功績のあったことが明白な初めての〈漂流移民〉が、かの中浜万次郎（ジョン万）である。万次郎は土佐の漁師の子で、1841年（天保12年）に釣りに出て漂流しアメリカの捕鯨船に救助されてアメリカに至った。万次郎は米国で学校を卒業し、大工修行をしたりして1851年（嘉永4年）に帰国している。

万次郎に続く注目すべき〈漂流移民〉は、播磨の浜田彦造（ジョゼフ彦）である。彦造は船旅の途中漂流し、やはりアメリカの船に救助されてサンフランシスコに上陸している。彼はアメリカの会社に就職したり日本人として初めてアメリカの市民権を取ったりした後1860年（万延元年）に帰国し、日本人として初めて新聞を発行した。

日本初のアメリカ移民はふつう、――1853年（嘉永6年）と1854年のペリー来航による日米和親条約締結や、これに続く日米修好通商条約（1858年）の批准のための咸臨丸による幕府使節の渡米（この際万次郎が通訳をした）の後に――時あたかも明治維新の年（1868年）に明治政府の認めない不法出国の形で行われたハワイ（当時はまだアメリカ領ではなかった）への移民153名（〈元年者〉と呼ばれている）のことだとされている。しかし、移民とは定住し永住することだと定義すれば、初めてアメリカに定住し永住した〈留学生移民〉の元祖である薩摩の長沢鼎(1852-1934)こそが日本人初のアメリカ移民と言えるのではないだろうか。

薩摩藩英国留学生とイギリスの縁は深いけれど、アメリカとの縁も見逃すことはできない。留学生たち19名は1865年（慶応元年）4月17日に羽島（いちき串木野市）を出航し、6

月21日に英国に到着しているが、留学生中最年少の長沢（鹿児島市出身）は、2年後の1867年の8月頃、ほかの5人の仲間とともにアメリカに渡った。彼らは、ニューヨーク州アミニアのコミューンに入り、さらに12月にはブロンクトンの新農園に移るが、1968年（明治元年）には留学生間で分裂が起こり、その結果他の5人が帰国の途について、結局長沢一人が残ることとなった。

長沢は、1871年（明治4年）にアメリカ永住を宣言し、1875年（明治8年）にはカリフォルニア州サンタローザ市に移ってブドウ酒製造の仕事を始め、1911年（明治44年）になると、農園全体が事実上長沢の所有となった。その後彼は〈カリフォルニアのぶどう王〉と呼ばれるまでになり、1934年（昭和9年）に亡くなっているが、現在長沢の縁で鹿児島とサンタローザの双方に友好協会ができており、30年以上にわたって草の根の交流を確実に続けているし、鹿児島の山形屋デパートではカリフォルニア直送の「長沢ワイン」が販売されている。また、1983年（昭和58年）に、来日中のロナルド・レーガン大統領（当時）が、国会演説の中で長沢の功績をたたえたため、無名だったその名が話題になったこともあった。

さて、日本からアメリカ本土への集団移民の最初は、会津藩からの20数名の農業移民団である。1869年（明治2年）5月初めに日本を発った彼らは白人のヘンリー・シュネールを団長として、ゴールドラッシュで知られる村、カリフォルニア州エルドラド郡コロマのゴールド・ヒルに入植し若松コロニーを建設したが、これは失敗して崩壊し移民たちは散り散りになるという悲劇に終わった。二人残った移民のうち、伊藤おけいという女性は、19歳の若さで1871年にこの地に眠った。筆者は1991年にコロマを訪れて、日本風の建築物を見かけたり遙か丘の上におけいの墓を望んだりしたが、こんな遠くのへんぴな田舎まで120年も昔にやってきたのかと感慨深かった。また、幕末に激突した鹿児島（薩摩）と福島（会津）がカリフォルニア移民のパイオニアであることは、因縁めいている。

1870年（明治3年）7月1日の国勢調査で登録されたアメリカ在住の日本人は55人であった（うち33人が加州、22人がゴールド・ヒルに住んでいた）が、1873年にはカリフォルニア州だけで80人となり（この年にサンフランシスコに日本領事館が開設されて調査された）、1881年（明治14年）には148人、――1885年にハワイ王国へ初の「官民移民」944人が送り出される（これ以後ハワイを基盤にしてアメリカ本土への進出が増える）と――1887年（明治20年）には2000人弱、90年には2039人（その半分以上が加州）、91年には西海岸だけで4066人、1900年（明治33年）には約25000人、1908年（明治41年）には103000人を越えた。現在アメリカの日系人及び永住者の総数は60数万と言われ、ロスアンジェルス圏内の日系人の数は19万人を越えるし、移民については古い歴史を持つサン・ノゼに、2万人以上の日系人及び永住者がいるそうである。

ちなみに、カリフォルニア州への移民の傾向の一端を紹介すると、1891年（明治24年）当時太平洋岸には日本人が4000人ほどいたわけだが、その内の約1500人はサンフランシスコにいたのである。この当時は、カリフォルニア州の日本人は北部（主にサンフランシスコ）に多く、南部（ロスアンジェルス付近）は数も少なく独立経営も遅れていた。実際、ロスの日本人は1884年（明治17年）当時には24～25人しかいなかったが、翌年夏には70人を越え、1897年（明治30年）に500人以上、そして1919年（大正8年）には南カリフォルニ

ア全体では13万人に達して、ロスは日系人の一大拠点となるに至ったのである。しかし、今見てきたような日本人の増加に伴って、1887年（明治20年）頃から日本人への排斥運動が始まり、入国制限が強められ、「日米紳士協定」（1908）や「外国人土地法」（1913）を経て、排日機運がますます強まっていくのだった。

1.2.　鹿児島からのカリフォルニア移民

鹿児島に関わるところを紹介しよう。鹿児島からの移民は、国分や串木野などから多数が渡米しているが、鹿児島県は、広島、和歌山と並んで全国有数の移民県だったのである（鹿児島の農民が貧しかったということかもしれない）。また、カリフォルニア州は日本人移民の特に多かった州であることを考えると、鹿児島とカリフォルニアは移民の人数の点から言っても縁が深いといえるだろう。『鹿児島県史　別巻』の統計表によれば、明治末から大正の初めにかけての鹿児島県人の海外渡航先の1位はアメリカ(その多くはカリフォルニア)であるし、昭和2年(1927年）から10年(1935年）までの海外在留者数でも、毎年2000人ほどが常時アメリカに滞在していて、鹿児島からの海外移住者の最大勢力はアメリカ（特にカリフォルニア）在住者たちだったと言える。大正2年(1913年）の鹿児島県警察部調べでも、大正元年度の海外から鹿児島への送金額約30万円のうち、約17万円が米国からだったし、大正5年(1916年）の警察部調べでは、鹿児島県からの移住者の最多移住先国は、2位から4位までの中国（494人）、カナダ（419人）、ブラジル（381人）を大きく離して、1411人のアメリカであった。なお、出身地域で言うと、姶良郡、揖宿郡、鹿児島郡の順であった。

『国分郷土史』によれば、日本人移民のピークであった1900年代には、すでに100人以上の国分出身者がアメリカ本土にいたし、1919年（大正8年）の時点では、南カリフォルニア在住の国分出身者とその家族だけではるかに100人を越えていたそうだ。昭和40年(1965年)でも、国分出身者とその家族は91人いて、昭和30年（1955年）以降の国分からの戦後移住者も13人いるそうである。また、『1996串木野市勢要覧』によれば、串木野からは戦後多くの人々がカリフォルニア州に渡り、そのうち30世帯がサリーナス市に居住しているそうである。さらに、1955年（昭和30年）から翌年までに、難民救済法に基づくアメリカへの契約移民制度により、頴娃町から実に109人が海を渡ったそうである（1998年4月27日付『南日本新聞』第1面）。

ところで、南加鹿児島県人会は遠く1899年（明治32年）に創立され、現在も400人ほどの会員がいて、1999年には100周年記念事業が展開されたし、カリフォルニア全体をカバーする鹿児島ヘリテージクラブも活動を続けている。また、鹿児島にはアメリカに姉妹都市を持つ市町村がいくつかあるが、上に述べた移民の縁で、串木野市はカリフォルニア州サリーナス市（ノーベル賞作家スタインベックのふるさと）と姉妹関係を持っているし、すでに述べたとおり、鹿児島市の姉妹都市の候補になったこともあるサンタローザと鹿児島は長年深い友好関係を保っている。これらは、まさに移民の縁で鹿児島とカリフォルニアがつながっているよい例である。

1.3.　ジャック・ロンドンの人と作品

アメリカの自然主義作家で世界的にその名を知られるジャック・ロンドンは、1876年（明治9年）1月12日、カリフォルニア州サンフランシスコに非嫡出子として生まれた。ロンドンは、貧しい少年時代を過ごす一方で、オークランド市立図書館に通って読書に励んだ。13歳から家計を助けるため工場で働くが、酒を飲んだり、暴れたりもしていたらしい。1893年（明治26年）にアザラシ漁船のソフィア・サザランド号に乗り込んで、小笠原諸島の父島、さらに横浜に着いたロンドンは、ここに２週間滞在したが、後にこれが作品の題材となった。

1895年（明治28年）に19歳でオークランド高校に入学したロンドンは、読書を深めながら、一方で作品も書き始める。翌年20歳の時、社会主義に接近して高校を中退するが、猛勉強の末カリフォルニア大学に入学した。しかしこれも翌1897年（明治30年）に中退して、今度は作家になろうと作品を書いて出版社に送るが受け入れられず、こちらもあえなく頓挫してしまった。そのあげくロンドンが選んだのがアラスカ行きだった。

1897年（明治30年）7月、21歳のロンドンは義兄とともにゴールドラッシュにわくクロンダイク地方に向かったが、翌年病気にかかり収穫もなく帰還した。しかし金こそ得られなかったものの、このときの体験が、後に代表作『野性の呼び声』をはじめとするいわゆる〈アラスカもの〉の長短編の題材となって、ロンドンの人生を一変することになるのだ。

1900年（明治33年）に結婚したロンドンは、選挙に出馬したりイギリスのロンドンの貧民街であるイーストエンドに潜入したりした後、1903年（明治36年）7月に、飼い犬が野性化して狼のリーダーになっていく物語である『野性の呼び声』を出版し、あっという間に人気作家の仲間入りをしてしまった。さらに翌1904年（明治37年）に日露戦争が起こると、新聞の特派員として日本を再訪し、横浜に上陸したのち、神戸、長崎を経て門司に至り、ここで逮捕され小倉で拘置所入りするというハプニングに遭いながらも、その後は最前線まで出かけて取材を敢行した。主にこのときの経験がロンドンの日本への関心を深め、また日本への脅威も植え付けたと思われる。

すでに触れたようにこの年、ロンドンは妻と不仲になる中でカリフォルニア州ソノマ郡のグレン・エレンに移って別居生活にはいり、10月にロマンティックで闘争的な海洋小説『海の狼』を出版した。さらに翌1905年（明治38年）にはグレン・エレン山中に広大な土地を購入して定住することになった上、妻と別れて別な女性と再婚したのである。翌年、野生の狼が飼い犬になっていく話であるもう一つの代表作『白い牙』を出版したロンドンは、1907年（明治40年）から1909年（明治42年）にかけてスナーク号で太平洋航海に出かけている間にも、政治小説『鉄の踵』や階層対立にあえぐ現代青年を描いた『マーティン・イーデン』を書き続け、農場経営にも熱が入っていった。

1911年（明治44年）に『南海物語』を出版し、1913年（大正2年）に巨費を投じたウルフハウスが完成直後に焼失した後、次第に体をこわしたロンドンは、1916年（大正5年）11月22日に40歳の短い生涯を閉じた。しかし、彼が生涯に出版した著書は50冊にのぼり、書いた短編は200編以上、エッセイも200編以上におよぶほか、戯曲や詩から評論まで書き、小説も政治小説、冒険小説、未来小説、探偵小説と様々に書き続け、自身も、水夫であり、冒険家であり、作家であり、農民であり、時には政治家でもあるという多才な人間であった。

1.4.　知日家ロンドンと日本人への影響

すでに述べたとおり、ロンドンは1893年（明治26年）と1904年（明治37年）の2度来日しており、実現しなかったが3回目の来日計画もあったという。日本に対する関心の高い作家であるロンドンは、短編「おはる」や遺作『チェリー』をはじめとするいわゆる〈日本もの〉の作品をいくつも書き――一方では黄禍論を唱えたりもしたものの――日本人使用人を何人も雇うなど、一生涯日本への強い関心を抱き続けた人であった。

そんな〈知日家〉のロンドンが日本の読者に受け入れられていった過程は、ざっと４期に分けることができる。それは、明治末期から大正初期にかけての第1期、大正初期から昭和初期にかけての第2期（敗戦までの戦争の時代を便宜上「空白期」と呼ぶ）、戦後1970年代までの第3期、ロンドン生誕100年の1976年（昭和51年）以降現在までの第4期である。受容の形態は翻訳、論文から映画、テレビまで様々であるが、その中心となる翻訳と論文に関しては次のような傾向が見られる。すなわち、翻訳に関しては、現在までに長編が13作あまり、ノンフィクションが3作ほど、短編は2集と（主なものだけで）30編あまりが訳出されている。

その最多のものは、言うまでもなく、23種以上の訳があり37回以上発表・出版されている『野性の呼び声』と、22種以上の訳があり25回以上発表・出版されている『白い牙』である。その時代的な傾向を見ると、もっとも盛んに（ただし、『野性の呼び声』『白い牙』中心だが）訳出が行われたのは第3期（それぞれ15回と10回）であるが、第2期も、20年弱の間に多数の短編を含む様々な作品が何度も繰り返し訳出されている点は見逃せないし、空白期にも『野性の呼び声』が2度出版され、『白い牙』が3回にわたって新しく訳されていることや、第4期もこれまでを上回る勢いであることなども注目される。

論文については、現在までに130本以上が書かれており、その大半は戦後のものである。しかし、1・2期にも論文に類するものや解説文や紹介文はたくさん発表されていて、かなりの数に上る。戦後の特徴としては、第3期の約30年間に26本が書かれるという顕著な動きが見られたが、第4期はロンドン再評価の波を受けて、驚くべきことに、現在までにすでに100本を越える論文が発表されてきており、この中には単行本のロンドン研究書も8冊含まれている。なお、1968年（昭和43年）にアービング・ストーンの書いた伝記の橋本福夫訳が出版され、1989年（平成元年）にはラス・キングマンの書いた伝記の辻井栄滋訳が出版されていることも特筆されるべきだろう。

第1期は片山潜の「社会主義の小説家ジヤク・ロンドン」（1903年［明治36年］）に始まる――本国アメリカで代表作の『野性の呼び声』が出版された年だから、かなり早い時期である――社会主義者あるいは社会主義指導者としてのロンドン受け入れの時代である。日本の多くの社会主義者（幸徳秋水や堺利彦）や社会運動家が、様々にロンドンに触れ、彼のダーウィニズムと指導力を高く評価した。しかしロンドンの死去した1916年前後になると、厨川白村や花園兼定らのエッセイや評論や翻訳による紹介の努力もあり、作家ロンドンやロンドン文学への人々の関心も次第に深まるようになってくるのである。

第2期にはいると、堺利彦が『野性の呼び声』の初の完全訳（叢文閣、1919年［大正8年］5月）を出して以来、『野性の呼び声』『白い牙』といういわゆる二大作品の著者――動物作家――としてのロンドン評価が定着していき、彼の様々な作品が日本の読者に紹介される一方で、力の論理を説く社会主義作家としての評価も揺るぎないものとなって、日本の労働文学やプロレタリア文学の作家たち（前田河広一郎（まえだこうひろいちろう）など）にも大きな影響を与えた。前田河（1888-1957）はロンドンに心酔し〈日本のロンドン〉と呼ばれたこともあるほどだし、ロンドンの進化論的思考や社会主義作家の側面にひかれて翻案作品まで書いたプロレタリア劇作家も何人かいた。

作家有島武郎は堺の『野性の呼び声』に5ページにわたる「あとがき」を書いていて、その内容は有島のロンドンに対する強い関心と確かな知識を示している。さらに、この時期にロンドンは、「海の作家」「短編小説作家」としても高い評価を受け、単なる「社会主義作家」「動物作家」として以上のロンドン像が日本人に知られるようになった上に、大正末期には作家としての高い評価により、アメリカ文学を語るときには欠かせない一人となった。大学の卒論や学校のテキストにロンドンが頻繁に現れるようになるのもこの頃からである。

敗戦後の第3期には、アメリカ文学への関心の増大に伴って復活したロンドンとその文学についての研究も急速に発展していく。まず米文学者の山本政喜が、1950年（昭和25年）の『野性の呼び声』に始まって『白い牙』（1950年）、『奈落の人々』（1950年）、『鉄の踵』（1951年）、『海の狼』（1955年）と次々にロンドンの作品を翻訳していったことが注目される。こうした努力の結果、ロンドン作品は、『野性の呼び声』や『白い牙』のような評価の定まった古典、あるいは少年少女文学として生きていくこととなった。

1955年（昭和30年）には戦後初めて、ロンドンに関する論文が須山静夫によって書かれ、伝記の翻訳書も初めて1968年（昭和43年）に出版されたが、その後も、『野性の呼び声』と『白い牙』が繰り返し訳され出版される中で、ロンドンと日本、自然との関わり、悲劇、自然主義の二元性、といった様々な視点が新たに提出され考慮されるようになる。

この時期の作家への影響としては、日本を代表する動物作家として知られる二人の作家――椋鳩十と戸川幸夫――へのそれが特筆されよう。二人はどちらもロンドンとその作品に強く惹かれ、特に、進化論的思考の点で強い影響を受けて作品を書いている。戸川は、ロンドンに惹かれて実際にクロンダイク地方を訪れたほどで、この時のことを「ジャック・ロンドンと私」というエッセイ（学研版『世界文学全集』所収）や、「ジャック・ロンドンの道」と題した小説に書き表している。なお、作家の新田次郎も、ロンドンに関心を持ちユーコン川を見に行っているほか、詩人の堀口大學はロンドン作品を丁寧に読んでいたし、司馬遼太郎もロンドンを評価する文章を書いている。なお筆者も、1991年にクロンダイク地方を旅してロンドンのフィールドワークを敢行して調査した。

1976年（昭和51年）以降の第4期に入って、欧米におけるロンドンの再評価と本国アメリカでの自然主義作家たちの再評価に伴い、日本でのロンドン再評価も着実に進行している。翻訳も量・種類ともに順調に増え――アメリカ自然主義作家の作品の邦訳の場合、ロンドンのものがもっとも手に入りやすい状況である――若い研究者が次々に現れて論文を量産しつつあるとともに、愛読者の輪もじわじわと広がりつつある。そしてこの流れは、1993

年（平成5年）6月に日本ジャック・ロンドン協会の誕生という形で結実することになった。なお、第4期すなわち現在の日本におけるロンドン受容の中心人物、あるいは功労者としては、前ロンドン協会会長辻井栄滋、中田幸子、大浦暁生などがあげられよう。

ジャック・ロンドンはこれまで社会主義作家、動物作家、海の作家、自然主義作家などと様々に受け入れられ、短編の力量や活力、冒険心などの評価も続けられてきて、古典の作家としての評価はすでに定まったかの観がある。しかし今後は、世界の価値観がますます多様化・複雑化し文明の行き詰まりが近づいてくる中で、これまでのような決めつけ的な評価、一面的な評価ではなく、〈面白い〉ロンドン作品に対するもっと自由で多様な読みが可能になり、また多様に読まれることが常識になっていくのではないだろうか。実際、すでに新歴史主義的な読み方やエコクリティシズム的な読み方が行われつつあり、米国には、研究者の学会としてのジャック・ロンドン協会と愛読者の会としてのジャック・ロンドン財団があって、それぞれ活発に活動している。また、本国以外では、日本のほかにもフランスにジャック・ロンドン協会がある。本国アメリカのみならず日本国内でも、文学研究を専門としない市民たちが現実社会や人生と関わらせてロンドンを読む読書活動が京都、鹿児島、名古屋、中国・四国と全国的に広がりつつあり、日本ジャック・ロンドン協会鹿児島支部も着実に活動を進めている。

2.　ジャック・ロンドンに対する薩摩武士の影響―黒木為楨（ためもと）の場合

2.1.　ジャック・ロンドンと日本、そして鹿児島

ジャック・ロンドン（1876-1916）は、2度にわたって来日している。1度目は1893年のことで、無名の17歳の青年ロンドンがアザラシ漁船に乗り組み、日本近海まで来て小笠原諸島や横浜に上陸している。2度目の来日は1904年で、人気作家ロンドンがハースト系新聞の特派員として日露戦争の取材を目的として日本を再訪している。このときは横浜に上陸し、神戸、長崎を経て門司に至り、逮捕されて一時小倉の刑務所で足止めを食った後、中朝国境近くの最前線まで出かけて取材を敢行した。

この2度目の来日がロンドンに与えた影響は大きかった。彼はこの4カ月余りの滞在で日本や日本人に対する関心を飛躍的に高め、一方で偏見も手伝って日本や日本人を脅威とする考えを強め、また一方で、日本人とその生き方に強く惹かれていったのである。このことは従来ロンドンの人生観や価値観の成立過程を見る時にあまり重視されてきたとは言えないだろうが、文学的な影響とも関わってもっと焦点を当ててもいいように思われる。

ロンドンは日本の各地を通過しており、特に門司で逮捕された時や朝鮮で足止めを食らった時に日本の軍人からかなり悪い印象を受け取っているが、一方で不思議なことに足を踏み入れてもいない鹿児島の人物に強い影響を受けているのである。最近の筆者の研究でこの影響が思った以上に大きく、深いものであることがわかってきた。さらに、後述する

ことだが、ロンドンは日本を代表する動物文学者にして著名な児童文学作家でもある椋鳩十に大きな影響を与えている。椋は鹿児島を本拠とする作家なのだ。

こうした鹿児島とロンドンの縁は単なる偶然なのだろうか。そうとばかりは言えない側面もあるのではないか。ともあれ、ロンドンに大きな影響を与えた鹿児島人とはだれかと言えば、それはまず、二人の薩摩武士である。一人は幕末の薩摩藩英国留学生である長沢鼎だ。そしてもう一人は、日露戦争の英雄のひとりである黒木為楨陸軍大将である。この二人の共通点はどちらも鹿児島市内の下級武士の子であり、ほぼ同じ地区に住んでいたことである。また二人に共通する精神は、武士道と薩摩の自顕流だと思われる。ロンドンは少なくとも二人の薩摩武士に直接会っているわけで、この二人からの影響を見ていくことは、案外ロンドンの本質を見るための一つの大きなヒントになるかもしれないのだ。

本章では、このうちの黒木大将、つまりゼネラル・クロキに絞って見ていくことにしたい。

2.2.　ロンドンの日露戦争従軍の経過

ロンドンは実に 125 ページにも及ぶ日露戦争従軍記を残している。

1904 年（明治 37 年）1 月 22 日にサイベリア号で横浜に到着したロンドンはすぐに東京に達し、28 日には神戸に向かっている。30 日には長崎にいたが、翌 31 日には門司に向かい、2 月 1 日に町の写真を取っていて逮捕される。2 日には小倉にあって、3 日にカメラを取り返すと下関に向かった。6 日に釜山（プサン）に向けて出港したロンドンは、9 日にはさらに仁川（インチョン）に向かい、木浦（モクポ）を経て 10 日に群山（クンサン）に着き、15 日には仁川に到達した。一方、黒木大将率いる第一軍はすでに 2 月 12 日に仁川に上陸を開始していた。ロンドンは、日本軍当局からこの黒木軍に同行するよう割り当てられ、このあとは鴨緑江（おうりょくこう）戦の現場まで行動を共にすることになる。

2 月 26 日には平壌（ピョンヤン）に向けて立つ準備が完了し、3 月 4 日には京城（ソウル）、5 日までには平壌に達していた。ロンドンはさらに北上し、8 日にポヴァル・コリ、10 日には順安（スナン）に達した。しかし、ここで彼は、軍の命によりしばらく足止めを食うことになる。軍は記者の安全のためなどと言っていたようだが、むしろ軍事上の秘密が漏れることを懸念していたようである。

ロンドンは 3 月 13 日になってもまだ順安にいたが、16 日に京城（ソウル）への退去命令が出て、18 日には京城（ソウル）に戻りまた足止めを食らった。彼はむかついた状態で過ごし、28 日になってもそして 4 月に入っても京城（ソウル）にいた。4 月中旬に至ってついにロンドンは北への移動を強行し、17 日には安州（アンジュ）に、21 日には最前線に近い町である義州（イジュ）に達していた。一方、この日、第一軍主力（近衛、第二、第十二の三個師団）は鎮南浦に上陸していた。ロンドンは 30 日になっても義州にいて戦況を確かめていたが、5 月 1 日には、ここからほど近い満州側の安東（アンドン）から報告を書いている。

黒木第一軍は、4 月 21 日までに全部隊が鴨緑江（おうりょくこう）（ヤルー川）右岸（朝鮮側）の義州一帯に展開を終了していた。ロンドンは安東にあって、（軍事当局や検閲取締官によって最前線に出て取材することを制限されたので）やや遠目にではあるが、日露戦争で初の大きな陸

上戦であった鴨緑江決戦とその中での黒木軍の戦いぶりを目撃することになったのである。第一軍の任務は、川を渡って対岸の九連城に布陣するロシア軍主力を撃破しその先に控える鳳凰城を目指して進軍することであった。第一軍の作戦行動は 4 月 25 日に開始され、29 日には架橋作業に入り 30 日に渡河を始めた。31 日から 5 月 1 日にかけて激しい戦闘が繰り広げられたが、1 日の戦闘でロシア軍は敗走し鳳凰城に逃げ込み、九連城を占領した第 1 軍は 5 月 6 日に、ロシア軍がさらに総退却した鳳凰城にほぼ無抵抗のまま入城した。これにて第一軍の緒戦は大勝利に終わったのである。

ロンドンは 5 月 2 日、5 日、10 日とこの戦闘の模様を報告したが、この戦いの印象は特別に鮮烈だったようである。17 日の段階で鳳凰城の第一軍本部にまで達したものの、彼は、これほどまでに規制が強いとまともな取材にはならないと失望して踏ん切りをつけ、6 月 30 日に帰国した。しかし執念で最前線近くまで行きついてその眼で日本軍の戦い方や戦争の実態を見たロンドンは、自分の人生観に大きな影響を受けないではいられなかっただろう。

2.3.　ゼネラル・クロキとは何者か

ジャック・ロンドンが最前線まで同行し、その戦いぶりをつぶさに見てきた第一軍の司令官は、ゼネラル・クロキこと黒木為禎（ためもと）陸軍大将である。黒木は、鹿児島市加治屋町生まれの下級武士の出身で、1844 年（弘化元年）に生まれ、1923 年（大正 12 年）に 79 歳で亡くなっている。同じ下級武士出身の西郷隆盛の訓育を受けて戊辰の役（1868 年、明治元年）には城下四番隊長として転戦した。西南の役（1877 年、明治 10 年）では政府軍の別動第 1 旅団の先鋒として活躍、明治 26 年には中将（第 6 師団長）となった。

軍人として大きく飛躍するのは日清戦争（1894 年、明治 27 年）からである。この戦争で第 6 師団長として武功を立てた黒木は、栄えある近衛師団長に抜擢され（1986 年、明治 29 年）、1903 年（明治 36 年）11 月にはついに陸軍大将となった。この後も彼は 1904 年（明治 37 年）1 月に軍事参事官になって司令官の地位が約束され、日露戦争が 1904 年（明治 37 年）に始まると、2 月に、先鋒である第一軍の司令官となったのである。

日露戦争における第一軍の鳳凰城までの進軍についてはすでに述べたが、このあと黒木軍は遼陽（りょうよう）目ざして西北進し、6 月から 8 月にかけて各地を攻略した末に 8 月下旬に遼陽を目ざす総攻撃を開始した。この戦いは鴨緑江と同様に激戦であったが、9 月 4 日ついに第一、二、四連合軍が遼陽を占領した。第一軍のこれらの戦果は、韓国防衛の任務を果たしただけでなく、ロシア兵の旅順集結とその南下を牽制する重要な意味を持っていたのだ。

ところで、黒木はなぜ〈ゼネラル・クロキ〉とも呼ばれるのか。もちろんこれは〈黒木大将〉の英語訳で、外国特派員の間ではどの将軍も〈ゼネラル〉をつけて呼ばれていたわけだ。しかし黒木の場合はほかの日本人将軍とは違う意味でこの名で知られていたようだ。『三代軍人列伝　薩摩の武人たち』にはこう記されている。

> 日露戦争の名将といえば、わが国では「海の東郷、陸の乃木」というのが普通である。しかし、どうも海外では、「海の東郷」は同じだが、「陸は黒木」だったのではないか、と推測される。鴨緑江の初戦を皮切りに、遼陽会戦、奉天会戦に勇名を揚げた黒木の名

は、海外でもよく知られているようだ。(南日本 1975：134)

さらに同書のこの後の記述には、当時海外では、英語で〈ゼネラル・クロキ〉として通っていたようで、ロシアでは「黒木はロシアの血を引いているから強いのだ、という珍説が飛び出した」(南日本 1975：134) そうだ。また、メキシコやカナダでも銀山や鉄道の駅に〈クロキ〉の名をつけたということだ。つまり、もしかすると黒木は日本でよりも海外での方が有名であったかもしれないのだ。

では黒木はどういう人物として伝えられてきているだろうか。上掲書には、

> 黒木はもっとも武人らしい武人で、戦闘ともなればつねに陣頭にたって指揮したから、将兵の信頼は絶大なものがあった。
>
> ――(中略)――
>
> 大正十二年二月四日死去。ゼネラル・クロキ死亡の報に、ニューヨーク・タイムズは長文の社説をかかげ「つねに細心の注意をもって部下の軍隊を操縦し、敵陣薄きを発見するや正面攻撃をなすにちゅうちょしなかった」と、武人黒木のおもかげを評した。(南日本 1975：134-135)

とあり、海外でも「武人」の代表として知られていたようだ。また、The Standard の従軍記者 William Maxwell は、鴨緑江戦の後で捕虜たちと同席した黒木の様子について“a strong, clear-cut face—European rather than Oriental”(Perry 1981：171) の持ち主で、リラックスして座りいつも煙草をくわえている口元は“the firm-set lips”(Perry 1981：171) だったと回想している。つまりこれはいかにも武士然とした姿である。

司馬遼太郎は、『坂の上の雲』において黒木にずいぶん言及している。[1] 司馬は薩摩武士黒木の人格と信念についてこう述べている。

> ･･･日本側の黒木は、クロパトキンの半分ほどの軍事的知識もなく、その十分の一ほどの西欧的教養もない。その面では単に一個の薩摩武士であった。
>
> が、数万の軍隊を統べるだけの人格と、戦いに対する不退転の信念をもっている点では、クロパトキンははるかにおよばなかった。(司馬 1999：156)

また、そのロシア軍の極東軍総司令官であったクロパトキンから見た黒木の印象について、司馬は、

> クロパトキンは、あとで知った。かれは自軍に対して、激怒した。
>
> 「クロキは手ごわい」
>
> とかねてかれは言い、黒木軍に対しては過大なほどの大軍を対峙させてあったのである。･･･黒木はその敵の目をぬすみ、夜陰こっそりと大軍を陣地からぬけださせて･･･黒木軍は敵城の外濠をわたったといっていい。(司馬 1999：142)

と、紹介している。黒木が一筋縄ではいかない男であったことがよくわかる。
黒木の戦い方がまた驚くようなものであり、それは黒木そのものの性格や武士道が感じられるものである。たとえば、司馬は、クロパトキンが報告書に書いた言葉として「その攻撃は、狂暴を極めた」(司馬 1999：142) という表現を紹介しているし、次のようにその戦い方について説明している。

> 黒木軍が･･･信じられぬほどの勇猛さであった。
> あとは･･･仙台師団が師団ぐるみの夜襲を敢行して、…敵陣地をことごとくうばってしまったことは、世界史の奇蹟とされた。…
> それにしても黒木軍全般の比類を絶した強さは、どのように理由づければいいの…(司馬 1999：131)

> 東部戦線の黒木軍がやった巧妙さは、敵の第二戦防御陣地にせまりつつ、じつはその意図はまったく方角ちがいの太子河を渡河しようとするところにあった。
> ――(中略)――
> …ドイツ参謀本部から派遣されてきているホフマンという若い将校･･･よりぬきの秀才であった。かれはのちにこの黒木がやった壮大な戦術について終生語り、語るだけではなくそれについての著書まで書いた。(司馬 1999：136-137)

また、ロンドンとともに黒木軍に従軍した The Times の特派員 David Fraser は、1904 年 5 月 3 日付の「黒木軍の進軍 (General Kuroki’s Advance)」と題した安東 (アントン) からの報告記事の中で、

> In morale the Japanese soldiers are equal, possibly superior, to European troops. Their tactics are superior to those of the Russians. They outwitted their enemy, who did not contemplate any serious defence. The loss of the guns was due to the slaughter of the horses and to the quick movements of the Japanese and the utter disregard of life which they displayed.(Slattery 2004：93)

と述べている。日本軍、すなわちこの場合黒木軍の戦い方は速くて誠に激しく、巧みで、士気も高い、ということがわかる。[2)]

2.4.　日本人への反感と実感としての脅威

ロンドンが生きた時代は世紀転換期であったが、この時代はまた、アメリカにおいて白人以外の人種への偏見が強まった時代でもあったのである。このことについて巽孝之はこう説明している。

> 十九世紀から二十世紀への橋渡しがなされるアメリカの世紀転換期は、日清戦争 (一八九四―九五年)・日露戦争 (一九〇四―五年) の影響により、典型的なアジア系差別

すなわち「黄禍（イエロー・ペリル）」(yellow peril) が叫ばれた時代である。もともと南北戦争後には、一八六八年以降、中国人労働者を太平洋鉄道建設のため積極的に採用するバーリンゲーム条約が適用されながらも、とうとう彼らには合衆国市民権が与えられることがないという事情があった。･･･やがて在米中国人の数が増大するのに加え一八七〇年代には経済不況が起こり、白人たちはこれら新参者が自分たちの飯の食い上げに追い込んでいるという被害妄想を強めるに至ったのだ。とりわけ世紀末には中国人恐怖が強まり、･･･折も折、ロシアのほうも一八九五年、日清戦争で勝利をおさめた日本に対し、ドイツやフランスとともに三国干渉のかたちで圧力をかけ、そこにいわゆる黄禍論（イエロー・ペリル）が決定的に浸透する素地が生まれる。(巽 2003：121-122)

また、歴史家のエリック・フォーナーは『アメリカ　自由の物語』の中で、この時代について、

世紀転換期には、「人種」という言葉――人種対立、人種感情、人種問題――はアメリカの公的言説の中で中心的位置を占めていた。それぞれの「人種」の先天的能力なるものがよく引き合いに出されて、様々な労働者集団の生活水準から、様々な民族のアメリカ民主主義に参加できる能力の有無にいたる、あらゆることが説明された。･･･移民排斥論者たちは、人種や民族が競い合い、それぞれが世界的な階層秩序の中である位置を占めるという昔のヴィジョンを復活させた。移民流入によって、国内的にも世界的にも覇権を握るのにもっとも適しているアングロ・サクソン系を「劣等な」人種が数の上で上回ることが可能となるため、アメリカ社会の性質が弱体化すると主張された。

――（中略）――

再建の理想からの後退はアングロ・サクソン主義の復活を供った。アングロ・サクソン主義は人種的排除の新しいレトリックを用いて、愛国心と外国人嫌いと国民の民族文化的定義と結びつけた。黒人や他の「劣った」グループを野蛮人や犯罪人同然に描いた侮辱的な図像が大衆雑誌に掲載され、新しい政治的・経済的不平等を正当化し、「定着させた」。(フォーナー2008：192-193)

と、解説している。このようなムードの時代の中ではロンドンも例外ではいられなかったのは不思議ではない。

このような時代のムードも手伝って、前述したように日本軍にたびたび足止めを食らったり、彼らが命を軽々しく扱う様を見たりしたことで日本人に悪い印象を持ったロンドンは、帰国後すぐに“The Yellow Peril”という長文の論文を書いて激しく日本を攻撃した。しかし、その内容は個別の事象や個人に対する批判ではなく、日本（人）が支配力をもち戦闘的な人種になることを恐れ、日本が世界征服に乗り出すようなことになれば大変であることを警告し、日本の脅威を伝えようとしたものだ。この５年後にもロンドンは“If Japan Wakens China”という短い論文を書いて、日本が中国と組むことの脅威を訴えているが、帰国直後の激しさは消え、むしろ、日本人や中国人は質素で勤勉であると評価し、だからこそ彼らが競争相手になれば白人たちの夢とアジアの夢がぶつかって、経済的な衝突から

軍事的衝突にまで発展するかもしれないと、まさに予言的なことを言っている。

もちろんロンドンは日露戦争への従軍中に、日本人への偏見と思われるようなことや日本人への警戒心や不満を何度も書き記している。‘Japs’という言葉も何度も繰り返されるし、Yellow Peril という言葉も何度か出てくる。“If Japan Wakens China”でのちに展開される警告も“In the past I have preached the Economic Yellow Peril; henceforth I shall preach the Militant Yellow Peril”(Hendricks and Shepard 1970：24) という文ですでに書かれている。また、鴨緑江での黒木軍の激しい正面攻撃を目の当たりにした時には、“But the Japanese are Asiatics, and the Asiatic does not value life as we do. ・・・・All these factors tends to justify the Japanese in accepting the slaughter of a needless frontal attack”(Hendricks and Shepard 1970：105-6) と言って非難している。

特にこの決戦では、日本側が戦いの情報を知らせない上に配信も許さず、最前線にも行かせなかったため、ロンドンの我慢も限界に達し、

> The Japanese resembles a precocious child who talks philosophy one moment, and the next moment is making mud pies. One moment he is acting with the wisdom of the West and the next moment with the childishness of the East. (Hendricks and Shepard 1970：124)

と、揶揄したり、

> The Japanese does not in the least understand the correspondent or the mental processes of a correspondent, which are a white man’s mental processes. The Japanese is of a military race.・・・・
>
> The Japanese cannot understand straight talk, white man’s talk.(Hendricks and Shepard 1970：125)

と、突き放すような言い方をしたりしている。

こうして見てみると、ロンドンの日本人への偏見はこの従軍でかなり強化されたように見える。確かに、*Jack London American Rebel* の中で Philip S. Foner は、人種的に身びいきすることを非難されたロンドンが“I am first of all a white man and only then a Socialist”(Foner 1947：59)と言って開き直った話を紹介しているし、ロンドンと親交のあった Oliver Madox Hueffer も“Jack London was, above all things, a worshiper of the Anglo-Saxon”(Hueffer 1983:33)と断定している。Jonah Raskin が“his deep-seated racism”(Raskin 2008：134)と呼ぶロンドンの人種主義は否定しようもないが、ロンドンは果たしてただ日本人を嫌っていただけなのだろうか。

2.5.　日本的な生き方と黒木為楨(ためもと)

2.5.1.　武士道と黒木

武士道とはなんだろう。黒木の戦い方のどこに武士道があり、ロンドンは彼のそういう部分に惹かれていたのだろうか？

後の章で詳しく述べるが、ロンドンは、1900 年（明治 33 年）に出版された新渡戸稲造の『武士道、日本の魂』を読んでいた。この書によれば、武士道は「壮大な倫理体系」（新渡戸 2009：25）でその掟の中で最も厳格なのは〈義〉である。義と並んで重要な基本原理は〈勇〉で、これは義を決断する力のことだ。そして、「義は、もうひとつの勇という徳行と並ぶ、武道の双生児である」（新渡戸 2009：39）、すなわち、「勇は義の相手にて裁断の事也。道理に任せて決定して猶予せざる心をいふ也。死すべき場にて死し、討つべき場にて討つこと也」（新渡戸 2009：37）ということになる。〈やる時はやる、そして迷わない〉というところだろうか。

勇（気）とは落ち着きのことで、心の平静さであり余裕である。〈仁〉とは愛・寛容・他者への同情・憐憫の情のことで、〈武士の情け〉すなわち〈武士のやさしさ〉に内在している。したがって「それはサムライの慈悲が盲目的衝動ではなく、正義に対する適切な配慮を認めているということを意味している。またその慈悲は、単にある心の状態の姿というのではなくて、生かしたり殺したりする力を背後に持っていることを意味する」（新渡戸 2009：59）ということになり、「窮鳥懐に入る時は、猟師もこれを撃たず」（新渡戸 2009：61）ということわざに通じるものだ。

〈名誉〉は武士にとって最高の善であり、“忍耐”と関係がある。そこから「取るに足らない侮辱に腹をたてることは、すぐれた人物にはふさわしくないが、だが大義のための義憤は正当な怒りである」という考え方に到達する。〈忠義〉とは「主君に対する臣従の礼と忠誠の義務」（新渡戸 2009：97）のことで、武士道では「個人よりも国がまず存在する･･･そのために個人は国のため、あるいはその合法的権威のために生き、または死なねばならない」（新渡戸 2009：103）と考える。したがって、「生命はここに主君に仕える手段とさえ考えられ、その至高の姿は名誉あるべきものとされたのである」（新渡戸 2009：107）ということになり、それは時に生命軽視とも見られたのであろう。

新渡戸は言う。

> サムライにとっては感情を顔にあらわすことは男らしくないと考えられた。
> 立派な人物を評するとき、「喜怒を色に現わさず」ということばがよく用いられた。（新渡戸 2009：127）

“寡黙”は「長い年月にわたる克己の訓練」の現われだからだ。また、外国人が武士道を語るときよく象徴とされる〈切腹〉についても、彼は「名誉を何よりも重んずる考え方は、多くの人びとにとってみずからの生命を捨てる十分な理由となった」（新渡戸 2009：135）とし、切腹は「純化された自己破壊」（新渡戸 2009：137）で、「きわめて冷静な感情と落ち着いた態度がなければ、誰も切腹など行いうるはずはなかった」（新渡戸 2009：137）と説明している。

では、女性は武士道の蚊帳の外にいたのだろうか。新渡戸はこれを否定し、

武士道は本来、男性のために作られた教えである。したがって武士道が女性について重んじた徳目も女性的なものからかけ離れていたのはむしろ当然であった。
武士道は、同じく「自己自身を女性の有する弱さから解き放ち、もっとも強く、かつ勇敢である男性にもけっして負けない英雄的な武勇を示した」女性を讃えた。(新渡戸 2009：157)

と述べて、女性もその例外ではないことを示している。また、人間ではないが、「サクラ」も、

サクラの花の美しさには気品があること、そしてまた、優雅であることが、他のどの花よりも「私たち日本人」の美的感覚に訴えるのである。
私たちはヨーロッパ人とバラの花を愛でる心情をわかち合うことはできない。バラには桜花のもつ純真さが欠けている。(新渡戸 2009：177)

という特徴を持ち、武士道を愛する日本人の精神に通じているのだ。
新渡戸はこうまとめる。

サムライは民族全体の「美しき理想」となった。「花は桜木、人は武士」と歌われた俗謡は津々浦々に行き渡った。
･･･いかなる人間の活動も、いかなる思考の方法も、武士道からの刺激を受けずにはいられなかった。
日本の知性と道徳は、直接的にも、間接的にも武士道の所産であった。
さまざまな局面で武士道は、・・・日本人全体に対する道徳の基準を供給した。
武士道は当初､｢エリート｣の栄光として登場した｡だがやがて国民全体の憧れとなり、その精神となった。(新渡戸 2009：174-175)

ロンドンもまた、こうした「宗教の列に加えられるべき資格を有する道徳体系」(新渡戸 2009：175) に「憧れた」一人ではなかったか。
上述したようにロンドンは、日露戦争に従軍することで日本人への偏見を強め、日本人に対して怒りを感じたのであるが、従軍記をよく調べてみると、日本人や日本軍について冷静に分析し、高く評価していると思われる部分も少なくないのである。たとえばロンドンは、日本兵について、

I think as to the quietness, strictness and orderliness of Japanese soldiers it is very hard to find any equals in the world.･･･I have never seen even a single Jap soldier who got drunk or acting violently, yet its infantry is perfectness itself, ･･･Japanese is the race who can produce real fighting men, and its infantry is simply superb. (Hendricks and Shepard 1970：13)

と、まるで讃辞のようなことを言っているし、ソウルからの報告の中でも“I doubt if there be more peaceable, orderly soldiers in the world than the Japanese.・・・but the Japanese are not boisterous. They are very serious.”(Hendricks and Shepard 1970：41)と述べて日本兵をまじめだとほめているほか、進軍する日本兵の不屈の歩き方にも感心し(Hendricks and Shepard 1970：81)、平壌からの報告では“The Japanese soldiery and equipment seem to command universal admiration.”(Hendricks and Shepard 1970：47)とまで評している。

ロンドンのこの時の日本人論の結論は“The Japanese are a race of warriors”(Hendricks and Shepard 2009：42)であり、“The Japanese are surely a military race.”(Hendricks and Shepard 2009：53) であろう。彼は日本人を「武人の人種」「軍人の人種」と呼んだのであり、これは警告であるとともに、隠しきれない讃辞でもあったのではないか。つまりロンドンは、日本人に警戒感を抱くとともに、一方で日本的なものに引きつけられ、日本人の生きざまに憧れるような気分を抑えきれなかったのではないか。

2.5.2.　示現流と自顕流、そして黒木

ロンドンは黒木の所作や戦い方に武士道を見ていたと思われるが、黒木の武士道は薩摩の武士道である。薩摩の武士道はおそらく日本でも最も厳しい武士道の一つだと思われ、黒木は下級武士の家に生れ、西郷などの教育を受けて成長したいわば本物の武士である。薩摩の武士道を十分に身につけて数々の戦争を戦ったわけで、その戦法や戦略にも武士道の影響が多々あったことは想像に難くない。

では、薩摩の武士道にはどんな特徴があるのだろう。薩摩隼人という言葉があることからもわかるように、薩摩ではことさら男らしさが強調され、勇猛果敢で頑固なことが評価される傾向がある。薩摩では早くも 16 世紀末から郷中(ごじゅう)教育というものの中で子供たちに武士道が伝えられてきた。各郷に青少年の自治組織があり、年長者が年少者を教えるというのが基本で、徳育と体育が行われた。特に「体育では、剣術をはじめとする武芸全般の鍛錬、相撲や山坂達者と呼ばれる長距離走破を実践して、質実剛健の気風を養った」(原口(監) 2008：48－49) そうである。薩摩の武士道の気風は「尚武(しょうぶ)の精神[37]」(高橋久 2008：131) すなわち〈武事や軍事を重んずる精神〉で、その戦法は、

> ･･･「徹頭徹尾攻勢を取り」「先ず敵の主隊を遮二無二直突して之を粉砕し、全軍を撃滅する」「兵勢は多きを尚(とうと)ばずして精錬を要し、戦役は久しきを欲せずして一挙に勝敗を決し、戦術は猶予遅疑を忌みて果断勇往を尚ぶ」「島津氏の軍を起すや、必ず名分あり･･･不倶戴天の仇敵といえど、降を乞う者あれば之を免し、或は敵将の遺骸を送致し、或は敵の戦死者を供養せり」(高橋久 2008：131)

などというものである。まさに黒木の戦い方を彷彿とさせないだろうか。こうした考えが「果断勇武・剛毅不屈の精神」(酒井 2008：131) や「絶対に後戻りしない勇猛果敢な生き方」(酒井 2008：133) につながり、「薩摩独自の「郷中教育」として見事に結実し、家

庭教育でも、「負けるな」「嘘をつくな」「弱い者いじめするな」を強調するに至ったのである（高橋久 2008：131）。

しかし薩摩の武士道の基本的な特徴は、薩摩の剣法の中心にあり秘剣として天下に恐れられた薩摩独自の示現流（自顕流）の精神にあるのではないかと思われる。郷中教育の中で行われた剣術の鍛錬とは、その多くが示現流（自顕流）だっただが、実は、〈じげん流〉には二派があり、主に下級武士が学んでいたのは〈薬丸自顕流（野太刀自顕流）〉の方だったようである。

示現流は、1587 年（天正 15 年）に藩主島津義久に随行して上京した東郷重位が、天真正自顕流の奥儀を授かって帰り、タイ捨流を加えて創始した剣法であり、東郷が藩の剣術指南となって以降、藩校で教えられるご流儀となり、もっぱら上級藩士の教育に寄与してきた。（歴史群像（編）2005：65）一方、薬丸自顕流は、薬丸兼武が、薬丸家に伝わる〈野太刀流（野太刀の技）〉の独自の技を研きつつ示現流をも包み込んで、野太刀自顕流（薬丸自顕流）として完成し、創始したものである。薬丸自顕流が藩のご流儀として認められたのは幕末近くになってからとも言われるが、それまでに下級武士である郷士の間には普及していたようだ。つまり示現流は主として上級武士たちの間にきわめて厳格に伝えられ、薬丸自顕流は下級武士たちに伝えられたのである。自顕流は明治の時代を迎えても〈学舎〉によって伝えられ、現在まで受け継がれている。[3)]

薬丸自顕流の門弟は幕末の時期には 166 人を数えていたそうで、その中には西郷軍を支えた大山綱良、西郷従道（つぐみち）、“人斬り”半次郎として知られた桐野利秋、日本海海戦勝利で知られる日露戦争時の連合艦隊司令長官東郷平八郎などのほか、日露戦争時の将軍が何人も含まれている。黒木の名は筆者の見る限りの自顕流資料には見当たらないが、たとえ門弟ではないとしても、黒木が下級武士として幼いころから郷中教育の中で自顕流を学んだ可能性はきわめて高い。[4)]

自顕流の身上は何といっても〈速さ〉と〈強さ〉であろう。言い換えれば「神速」と「剛剣」である。そのため全国の武士に恐れられたようだが、新撰組の隊長近藤勇は隊士に向かい「薩摩の初太刀は外せ」と指示したそうである。それほど抜きが速く、打ちかたが激しいのである。「一打必倒」「一刀必殺」を掲げて速さと地力を養うため、藩士は「猿叫（えんきょう）」を挙げながらひたすら抜きや続け打ちを続け、剣体一致を目ざす。そこには、抜けば必ず「一気」にかかって敵を圧倒する厳しさがある。[5)]

さて、薩摩の武士道の根幹をなしている可能性が高い自顕流の考え方とはどういうものだろう。それは、両派に共通する〈意地〉というもので、次の 4 つが知られている。

1、刀は抜くべからざるもの

2、一の太刀を疑わず、二の太刀は負け

3、刀は敵を破るものにして、自己の防具に非（あら）ず

4、人に隠れて稽古に励むこと

1 は、「刀はいざという時以外はみだりに抜くものではない」という戒めだ。武士道の真髄であろう。2 は、薩摩独自の考えで、「一刀必殺」「地獄の底まで叩き斬れ」という気概と激しさを示している。3 は、薩摩の剣は身を守ることを前提としていないということで、強い覚悟を持って余計なことを考えるなということだろうが、考えようによっては恐ろしい考

え方である。4 は、「一人稽古をするようにならければ本物ではない」ということだそうである。[6)]

2 に関連して、自顕流について語る次のような説明文もある。

よく肉を切らせて骨を切るということばが言われるが、自顕流には、その考えはない。我が身の打撃を少くして、敵を倒すと考えるのは、そこにまだ何程かの未練がある。一挙に死を極めるのが当流の意地である（松永 1976：57）

本来武は濫りに用ふべからざるもの、太刀は常々鞘止めしておくべき程の物なるも、天地之道理（忠孝之道）に順はんとして、逆らう敵を破らんと、一旦太刀を抜いたら、即ち大憤怒を振ひ起し、千が千、万が万ながら敵を倒す。堅甲断ずべし。天かける飛行機も撃つべし。大地も両断すべし。我が太刀折れなば空拳にて、両腕折れなば口にて、首断たれなば気魄にて、必ず唯一撃を以て斃す、否、立会って未だ撃たずとも、敵は五体慄然萎痺、遂に気死する底の気魄を言ふのではないでせうか。而も無念無想、無我無心、生なく死なしの境地、所謂、大極は無極の如く、また、或は知って知らざる者の如く、敢て其の力を他に示さず言ふのです。勿論一時の付衛気の如きものでなく、行住坐臥、千段万練、念々修行して到達した、我と意地が同一体となる境地でありませうか。（松永 1976：56）

「･･･“唯一撃敵を斃さずんばやまず”といふ攻撃的気風と、頑健なる体力とを養ひ、剛毅、果断、敬虔、礼譲、誠実と言ふやうな態度の備はった、日本武士的風格を練成したいと言ふのが」（松永 1976：57）自顕流を学ばせる目的だと説明したりもするが、これは何という激しさ・厳しさであろう。しかし、黒木の戦いぶりはまさにこの通りではなかったろうか。こんな教育を受けた〈薩摩の武人中の武人〉のような黒木にロンドンは同行していたのだ。直接会って話す以上に彼の戦い方の中に〈(薩摩の）武士道〉を見たことだろう。そして、黒木の中に生きている自顕流の精神と戦法の両方がロンドンに影響を与えたに違いない。

2.6.　日本的な生き方への共感と薩摩武士道の影響

2.6.1.　ロンドンの〈日本もの〉と薩摩武士道

ロンドンは、いわゆる〈日本もの〉と呼ばれる日本を舞台にしたり日本人を主人公にしたりした作品をいくつも書いている。彼の著作の出発点になった作品も日本ものなら、未完の絶筆も日本ものである。Reesman は *Jack London’s Racial Lives* の中で“Throughout his life London seemed to need something more than “whiteness,””（Reesman 2009：38）と言っているが、〈日本人〉や〈日本的精神〉がロンドンの「必要としたもの」だったのではないか。ここではその中でもとりわけ日本人の考え方や武士道精神の影響を受けていると考えられる 3 作品を取り上げてみたい。

まず短編「戦争（“War”）」（1911）を見てみよう。 この作品は人生の皮肉を描いたもの

で、日露戦争の取材の経験をもとにしたものだ。従来は日本ものと見られていなかった作品だが、相手役の兵隊がロシア人の風貌をしていることなどからしても間違いなく日本人の若い偵察兵だからである。彼は偵察先において至近距離でロシアの老兵に出会うが、相手が丸腰だったため撃たずに逃がす。しかし次に出会った時には、彼はこの老兵に撃たれて命を落とすのだ。

あまり主人公の個性は描かれていないが、彼が老兵を撃たなかったのは、まさにすでに触れた〈武士の情け〉ではないか。丸腰の相手、しかも老人を撃つことは日本武人としては卑怯なことであり、恥である。戦争には卑怯も何もないかもしれないし、この描写は欧米人にはなかなか理解しにくいのではないか。これはまさに日露戦争の取材をする中で黒木を見ていて発想したことなのではないだろうか。

ロンドンの日本ものの中で最も日本精神にあふれているのは、何といっても「おはる（“O Haru”）」（1897）と『チェリー（*Cherry*）』（1916、未完）である。Reesman はロンドン作品の主人公について“There are especially memorable nonwhite heroes”（Reesman 2009 : 16）と述べているが、〈おはる〉や〈チェリー〉はまさにそういう主人公である。「おはる」は日露戦争に従軍する以前に書かれており、ロンドンが 1 回目の来日以来日本に関心を持ち続けたことが分かる。

「おはる」の筋はこうだ。大名の重臣を父に持つおはるは、父が死んだあと芸者屋に売られるが、幼なじみの武士トヨトミと恋に落ち、彼が全財産を手放して彼女を請け出して婚約する。財産を失ったトヨトミは、金持ちになって帰ってきて結婚すると約束して海外に出かけ、おはるは芸者に戻って給料をためながら誘惑にも負けずに 10 年間彼を待つ。彼はついに帰国し二人は結婚するが、トヨトミは海外で人が変わってしまっており、浪費するようになる。おはるは自分の稼いだ金もすべて彼に提供するが、彼は西洋の習慣を彼女に押しつけようとし、二人の仲は悪化する。彼は暴力をふるい、浮気をして、彼女が夜の仕事をしないと離婚すると言い出す。おはるは悲嘆にくれた挙句、芸者に戻り、忠臣蔵の踊りを披露しながら父の刀で切腹して果てる。

女性が切腹したり、武家の娘が芸者になったりとややおかしなところもあるが、大石や豊臣の名を出したり、仏教に触れたりと十分に日本への関心を示している。侍の血を引いていることにこだわり、忠義や民族の誇りにも触れているのは興味深い。そして何といっても〈切腹〉である。すでに触れたとおり、武家にとって切腹は「純化された自己破壊」であるから、おはるは武家の娘としての名誉を守るために死んだのだ。ロンドンが日本のことをよく知っていたことも驚きだが、この作品を読むと、彼が武士道に強い関心を持っていたことがよくわかる。

さて、黒木との関係で最も注目しなければならない作品は『チェリー』である。これは絶筆であるから、ロンドンが死ぬまで日本への関心を持ち続けたことを示しているし、第一、チェリー、すなわち〈さくら〉をタイトルにし、主人公の名にしているのだ。すでに述べたとおり、この名が日本人の精神を象徴していることは言うまでもない。『チェリー』のストーリーは次のようである。チェリーは赤ん坊の時、漂流した日本の難破船から救い出され、ハワイの裕福な牧場主の Mortimer 夫妻に育てられ、年頃の美しい娘となった。高い身分の武家の血を引くチェリーには、何人もの求婚者が現れるが、彼女は相手にしない。

彼女が関心を持っているのは、実は、日本から来て庭働きをしている契約労働者の青年ノムラ・ナオジロウだった。ノムラは武士の末裔と思われ、共通した面を持つ二人は音楽を通して惹かれあっていくが、ここで未完のままになってしまった。

Tony Williams は、ノムラやチェリーの描き方について次のように述べている。

> London’s references to Naojiro Nomura’s strong presence and his thrashing of two white capitalists may have been too much for the post-Palmer Red Raids twenties dominated by the so-called Yellow Peril, the KKK, and racist legislation.･･･ Naturally, these references to the justified cause and stubborn attitude of an Asian woman causing chaos in a supposedly superior white society would not have suited the tastes of *Cosmopolitan*’s average readership. (Williams1999：77)

ロンドンは、20 年代すなわち自分の死後すぐの時代には到底受け入れられないような作品を書いたのだ。あの人種主義者で〈日本人嫌い〉のロンドンによってこの作品に書かれた日本人像は、Williams が“Nomura’s noble presence”(Williams1999：92)と言っているように、力強く、気高く、存在感のある人物として描かれているのである。それは黒木に代表される日本の武士道、特に薩摩の自顕流に憧れる気持ちを込めたからではないか。

この作品は、黒木の影響を強く受けて書かれたと言っていいだろう。何しろ〈黒木〉の名が直接出てくるのであるから。未完となる中断箇所に近いところに次のような記述がある。

> ･･･Plenty low Japanese say he look very much like Kuroki San and Kuroki San very high blood and big war general in Japan.(London1999：61)

この作品において有力な助演者で存在感の大きいノムラは、なんと薩摩武人〈黒木〉がモデルなのだ。そうして見てみるとノムラは確かに武士の要素をたくさん持っている。彼は、強い男として知られ恐れられてはいたが、普段は動きも鈍く、寡黙で眼でものを言うタイプであった。(London1999：60-61)これこそ、すでに触れた武士道の〈勇〉であり、“忍耐”であり、“寡黙”である。

そんなノムラが一度だけ激しい怒りを示し、すばやく行動する次のような場面がある。

> ･･･The *pupule luna*, on horse has riding whip,・・・―the *pupule luna* hit Nomura on the head with riding whip because Nomura is not quick like the low coolies. Bingo! Nomura, the whip on the head, is very quick. He take the pupule Portuguese *lun*a by the arm. It is like when you pick a flower that is tough in the stem, and that you jerk with a bend on the stem at the same time to break it―just like that, Nomura pick the *luna* from the saddle like a flower, and the *luna* is on the ground on his back, and his arm is much broken in the inside of the shoulder. Two months that *pupule luna* off the job in Queen’s Hospital. (London1999：61)

この変り身の早さと豪胆な闘い方はまさに武士の、そしてとりわけ自顕流のスピードと地力に他ならない。武士道に言う〈義〉と〈勇〉の融合がここにはある。

2.6.2.　〈日本もの〉以外の作品と薩摩武士道

ロンドンの上記以外の作品にも武士道や自顕流の影響が見られると言えそうな部分があるので付け加えておきたい。まずは、『白い牙』（*White Fang*）（1906）である。後半ホワイト・ファングはスコット判事邸で飼い犬になるが、野性まで消えたわけではないことを証明するエピソードとして、いわゆる〈三重殺〉が描かれる。ある日、意地の悪い3匹の犬に侮辱されたホワイト・ファングは、すばやく音もなく走って、あっという間にその3匹を引き倒して殺害してしまうのだ。この場面と先ほどのノムラの場面はダブって見える。このスピードと変わり身は、やはり自顕流のそれのように感じられてならない。

また、ロンドンのアラスカものの傑作のひとつ「恥さらし（“Lost Face”）」（1908）について西山嘉子はこう言っている。

> ･･･この主人公の価値観の描き方は、ジャック・ロンドンが日本の武士道精神のようなものに影響を受けたことを示してはいないだろうか。戦の場で敵に殺されるくらいなら、武士としての誇りを持って、自分で腹を掻っ切って死ぬことを望むという、武士道精神の影響があると考えられないだろうか。（西山 2009：34）

> ･･･現実としてどうせ“死ぬこと”になるなら、美しい死を貫きたいという気持ち、願望が描かれているのではないか。これは武士道精神に特にみられる考え方ではないか。（西山 2009：35）

> 主人公のスビエンコフは、武士の「死の美学」のように、「相手に下に見られて死にたくない」、「助けてくれと懇願するより、自分の無様な姿をさらして死ぬより、心の中で自分が優位に立って、相手をあざむいて死にたい」と考えた。そしてその死に方を貫きたいがためだけに、あらゆる駆け引きをし、うそをついて、相手を納得させ、自分の望む方向に導いた[5,6]。（西山 2009：36）

なるほどスビエンコフの首がポーンと飛んでいくこの作品の最後の場面は武士のさながら切腹のようでもあり、その介錯のようでもある。『白い牙』が出されたのが日露戦争の 2 年後、「恥さらし」が 4 年後のことである。案外、黒木為槙（ためもと）から受けたインパクトがそこに表れているのかもしれない。

謝辞

この章を書くにあたって、韓国の地名については鹿児島国際大学の井上和江教授より、自顕流については鹿児島市議会議員奥山嘉次郎氏に、ご教示いただいた。ここに記して感謝の意を表するものである。

注

１）司馬は、『坂之上の雲』を書くにあたり執筆期間以前の５カ年をかけて史料を調べたと述べている。小説であることもあってか、出典や参照文献については詳細な言及はない。しかし、同書の第四巻では、日露戦争の参謀長落合豊次郎の『孫子例解』（大正６年刊、日露戦争、特に陸軍に触れている）やドイツ参謀本部から派遣されたホフマン大尉の著書やロシア側のクロパトキン報告書を挙げているし、第八巻の〈あとがき〉には、『国民新聞』、『東京日日新聞』、参謀本部編『日露戦史』全10巻（大正２年刊）、クロパトキン著『満蒙処分論』（大正２年刊）、谷寿央著『機密日露戦史』などが挙げられており、黒木に関する描写にはリアリティーがあると考えられる。

２）　この章を書くにあたり、『図説　日露戦争』、*Jack London A Definitive Chronology*、*Jack London Reports*、『郷土と日本を築いた熱き薩摩の群像７００名』、『鹿児島百年＜中＞明治編』を参照した。

３）このあたりを書くにあたり、『日本の剣術』、『薩摩の秘剣　薬丸自顕流』を参照した。

４）このあたりを書くにあたり、『天璋院篤姫ガイドブック』、『薩摩の秘剣　野太刀自顕流』、『三代軍人列伝　薩摩の武人たち』を参照した。

５）このあたりを書くにあたり、『日本の剣術』を参照した。

６）このあたりを書くにあたり、『薩摩の秘剣　野太刀自顕流』を参照した。

3.　長沢鼎の武士道精神について――手紙の下書きに触れて

3.1,　長沢鼎の生涯

すでに述べたように、アメリカの小説家ジャック・ロンドン（1876-1916）は薩摩藩出身の 2 人の武士に出会っている。その一人がまさに幕末の薩摩藩士長沢鼎（1852-1934）である。

鹿児島市出身の長沢は幕末の薩摩藩英国留学生 15 人の最年少のメンバーとして、4 人の随行員とともに、明治維新より 3 年早い 1865 年（慶応元年）に鎖国の禁を犯して英国に渡った。19 名は 4 月 17 日に羽島（いちき串木野市）を出港し、6 月 21 日に英国のサウサンプトンに入港しているが、最年少の長沢はロンドン大学に入学することはかなわず、8 月には一人他のメンバーと離れて北部アバディーンのグラバー邸に送られ、ここに寄宿して中学校に通うこととなった。長沢は、ここで中学生として 2 年間を過ごすことになるが、1867 年の 8 月頃には、トマス・レイク・ハリスの勧めに従い、親しい兄貴分森有礼（のちの初代文部大臣）ら 5 人の仲間とともにさらにアメリカに渡った。

長沢は、ニューヨーク州アミニアのハリスのコミューン〈新生兄弟社〉に約 2 ヵ月間いた後、12 月にはニューヨーク州ブロクトンの新農園に移り、1867 年 12 月末から 1875 年の 2 月中旬までここで過ごした。ニューヨークに来た時彼はまだ 15 歳の少年で、ブ

ロクトンには 25 歳まで滞在した。1968 年（明治元年）には留学生間で分裂がおこり他の留学生が帰国し始め、長沢と共にハリスのもとに残っていた森と鮫島尚信も 6 月 6 日に帰国の途についた。

一人残った長沢は、コーネル大学を中退したあと、1871 年（明治 4 年）にアメリカ永住を宣言し、1875 年（明治 8 年）にはハリスと共にカリフォルニア州サンタローザに移住し、ファウンテングローブの丘を購入した。長沢は、ハリスを手伝ってワイナリー創設と経営を進め、1892 年にハリスがニューヨーク市に退くと、彼に代わって土地とブドウ醸造所の管理を任された。その後、1900 年（明治 33 年）に農場と醸造会社を譲渡された長沢は、経営の全責任を負うことになる。1911 年（明治 44 年）になると、全ファウンテングローブが事実上長沢の所有となり、やがてワイナリー経営者として成功した長沢は、〈カリフォルニアのブドウ王〉と呼ばれるまでになった。彼は 1934 年（昭和 9 年）3 月 1 日に 82 歳でサンタローザに亡くなっているが、ついに永住のために母国に帰ることはなかった。

3.2.　長沢の武士道精神を語るエピソードについて

薩摩藩英国留学生の最年少学生・長沢鼎（1852 - 1934）はアメリカのカリフォルニア作家ジャック・ロンドン（1876-1916）に思想的・文学的影響を与えた可能性が高い。ロンドンは青年期から日本や日本的な精神に関心を持っていたし、長沢は、武士という階級が消滅した明治維新後では唯一生き残っていた本物の侍だったと言える。その長沢がロンドンの住む場所から目と鼻の先にいたわけだから、ロンドンが、地元では〈ブドウ王〉として知られていた長沢に強い関心を持たない方が不自然だと言えよう。

となれば、ロンドンが関心を持った長沢の武士道精神とはどんなものだったのか知りたくなるのは、鹿児島に住むロンドン研究者として当然である。カリフォルニア作家を主に研究する筆者が「カリフォルニアのブドウ王」長沢に関心を持ったのは 1984 年頃からになるが、ロンドンとの関係については、1997 年頃に、長沢の縁によって設立されたサンタローザ市の鹿児島友好協会からヒントを得たことによって調べ始めたものである。

すでにこれまでの章の中で筆者は、ロンドンが多くのいわゆる〈日本もの〉作品を書き、その多くが薩摩の武士道や自顕流の影響下で書かれていることを指摘してきた。それは日露戦争時の陸軍大将である黒木為楨（1844-1923）の影響でもあるのだが、長沢の影響をめぐっては、そもそも、たった 13 歳で渡英した長沢がまともな武士道的影響を持っていたのかが疑われるだろう。

しかし調べていくと、驚くことに、長沢が 13 歳までにいかに薩摩武士道を身につけ、いかにそれを生涯をかけて守り通したかが分かってきたのである。むしろ、それゆえに彼は日本には帰らなかったとさえ言えるし、それゆえにたった 13 歳で留学生に選ばれたのだとさえ言えるかもしれないのである。先ず長沢は、日本を発つまでの幼少期に鹿児島の特異な教育制度である〈郷中教育〉を十分に受けて育ったのである。薩摩藩は全国でも最も武士の比率の高い藩の一つであったし、厳しい薩摩武士道を代々伝えてきた歴史がある。郷中教育の中では先輩たちが後輩に厳しく書を読ませ、自顕流を教えて鍛えた。長沢は特にまじめだったようで、自顕流もかなりマスターしていたと言われている。

学問に熱心な家柄もあって、薩英戦争の直後に開設された開成所洋学校にすぐに入学した長沢は、相当目立って成績が良かったに違いない。でなければ 13 歳の最年少でありながら多くの学生の中から 16 人ほどの留学生に選抜されるはずがないからである。彼が天才少年であったことは、イギリスに渡ってからのアバディーンでの 2 年間が雄弁に語っていることでもある。つまり、イギリス人中学生に混じって優秀な成績をあげて地元の新聞に成績優秀者として掲載されていたし、その科目は一つや二つではなく、そこには英語さえ含まれていたのである。

こうして若くして薩摩武士道をほぼマスターした上で世界に飛び出した長沢の武士道精神を物語るエピソードを紹介しよう。まず今に残されている彼の多数の写真を見てみると笑った写真がないことが分かる。歯を見せて笑っている写真は 1 枚としてなく、少し微笑んでいるような写真もほとんどない。ほとんどすべての写真が、苦虫をつぶしたようにきりっと口を真一文字に結んだ写真である。これは薩摩武士の武士たるゆえんだろう。歯を見せて笑ってはならないのである。

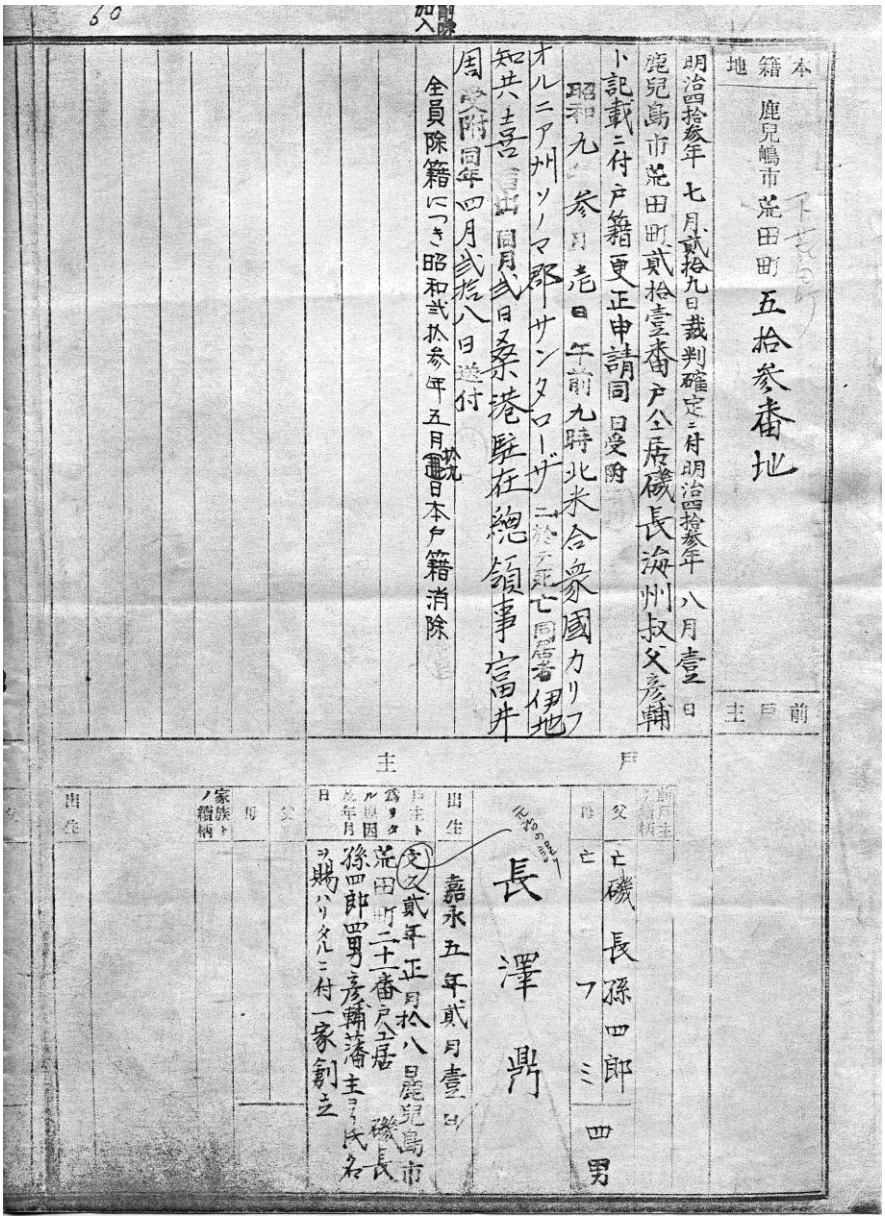
13 歳の長沢（ロンドンで撮影、鹿児島国際大学蔵）

60 歳頃の長沢（鹿児島国際大学蔵）

次に、長沢は 1910 年（明治 43 年）に今の鹿児島市下荒田町に新戸籍を作っているのである。58 歳の時である。これは何を意味するだろう。この頃に長沢がアメリカ国籍を申請したらどうなったかは定かではないが、彼にはそんな気はさらさらなかっただろう。アメリカ人になろうなどとは思ってもいなかったのだと思われる。彼はその命が尽きるその時まで髪の毛の 1 本まで薩摩藩士だったのである。その証拠に新戸籍を作ったのであり、注目すべきは、この戸籍に記す自分の名を〈長沢鼎〉としたことである。

実は、薩摩藩英国留学生一行は 1865 年に渡英する際、この留学が幕府の鎖国政策に反するため、藩主からそれぞれ変名を与えられたのである。長沢の本名、すなわち親からもらった名前は〈磯長彦輔〉であるが、彼は生涯変名を使用した。したがって戸籍名を変名の長沢鼎としたのには大きな決意が込められているのだ。要するに、親からもらった名前より藩主に貰った名前の方が当然大事だということを示し、生涯薩摩藩士で通すことを宣言

したものである。因みに、19 人の薩摩藩英国留学生一行のうち明治維新後も変名で通したのは長沢と松村淳蔵と朝倉盛明（変名は正確には朝倉省吾）だけである。



長沢の戸籍（鹿児島国際大学蔵）

長沢は、明治の末に島津家の島津忠重がサンフランシスコを訪れた時に馬車で迎えに行き、長沢邸に到着すると門前において忠重を土下座して迎えたと言われている。おそらく実際にそんなことがあったに違いない。これも彼が終生薩摩藩士であった証しである。また、ディアボーン・インディペンデントという新聞の記者が、将軍家伝来と言われる刀を長沢が引き抜くところを目撃した時のことを語っているが、その動作はとても素早く激しかったそうである。これが自顕流に特徴的な〈抜き〉でなくてなんであろう。自顕流の特徴は〈スピードとパワー〉である。それも圧倒的な速さと剛力である。

長沢はファウンテングローブ農園を見回る時、正装しシルクハットをかぶっていた。事実そういう写真が残っている。そしてそういう威厳ある態度が近隣住民の尊敬を集め、〈ブドウ王〉と呼ばれることになるのである。長沢の武士道についてはさらに詳しく後述する

農園を見回る長沢（写真左側、鹿児島国際大学蔵）

が、笑わない、すなわち隙を見せず常に毅然とした態度で過ごすこと、忠君の思い、すなわち藩主への忠義を貫くこと、武士らしい知性と武術を保つこと、そして日常であっても身なりを整え威厳をもつこと、こうしたことを見てくると確かに長沢が生涯薩摩武士であり続けたことが分かる。長沢は最後の武士のひとりだったのである。

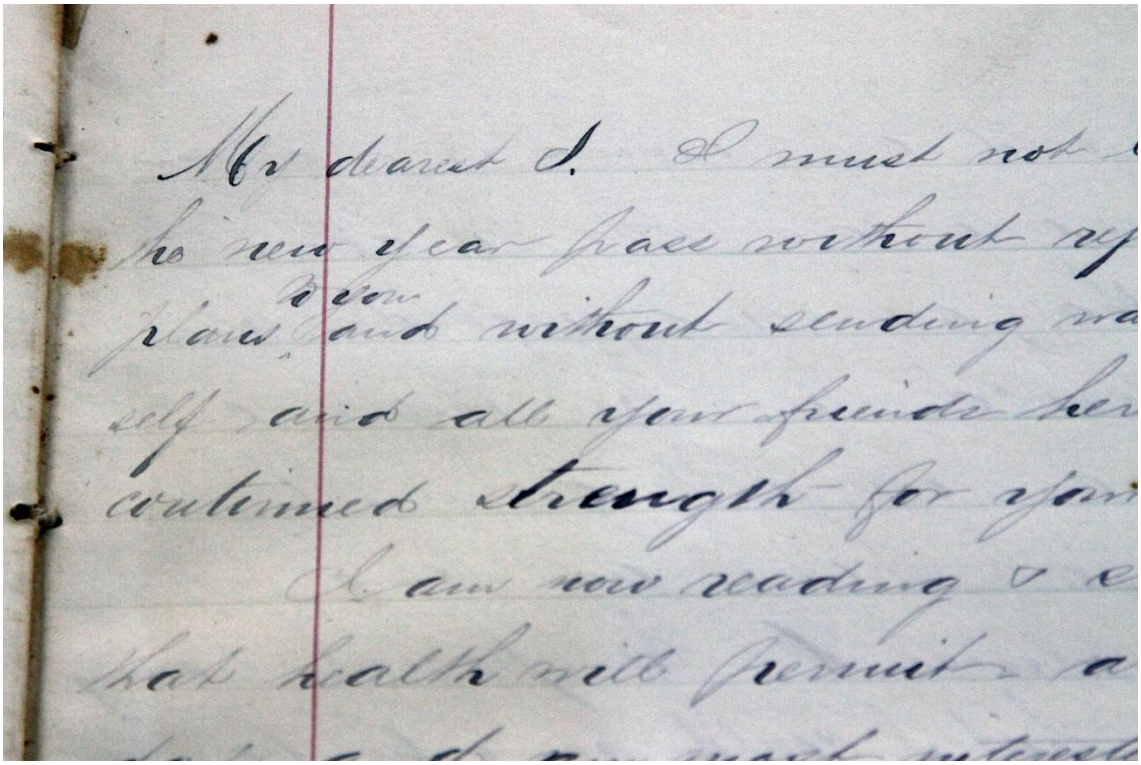
3.3.　長沢鼎の手紙の下書きとそこに込められた思いと精神

2011 年 12 月に鹿児島県いちき串木野市の職員奥ノ園陽介と砂田光紀が渡米し、サンタローザにおいて長沢の一次資料を大量に入手し持ち帰った。その中に存在は知られていたが長くその所在が不明だった長沢の日記の原本が含まれていた。これは筆者にとって驚きであった。実は、1980 年にこの日記の全文を翻刻・発行し、その全文の邦訳も 1994 年から 98 年にかけて発行していた故門田明鹿児島県立短期大学名誉教授も、この日記の原本は見たことがなかったのだ。日本における日記の翻刻・発行は現地の研究家ゲイ・ルバロンの翻刻を元になされたのである。[1)]

この日記は長沢がブロクトン滞在中の 19 歳の時に 1871 年 1 月 1 日から 4 月 23 日まで書きつづられたものであるが、今回持ち帰られた日記を見てみるとまず第一に長沢の書く文字の美しさに驚く。また、さらさらと書かれた筆跡を見ると、いかに彼の英語が流暢かも容易に知れるのである。しかし、この原本には門田明が翻刻しなかった部分が

あった。それは日記本文の最後の日（1871 年 4 月 23 日）の日記の後に書かれた彼の手紙の下書きであった。

詳しくは後述するが、門田はこの下書きについてすでに著書の中で触れている。したがってこの下書きが付属していること自体は新しい発見ではない。美しい割には読み取りにくい長沢の英語だが、まずはここに下書き原文の一部を写真で紹介する。



（いちき串木野市保管）

長沢の慣れた筆跡が感じられるし、活字に慣れている我々には芸術性さえ感じさせるのではないだろうか。ただ、なかなか読みにくい字もあり解読には時間を要する部分もあるのは事実だ。

そこで、筆者は、いちき串木野市から長沢の手紙の下書きを原本からのデジタル原稿の形で提供してもらい、2012 年 2 月中旬から鹿児島国際大学国際文化学部のデイビッド・マクマレイ教授と共同でその翻刻の作業を行った。作業は 2 月 25 日に終了したが、ここに原稿の全文を翻刻して掲載する。[2)]

My dearest S. I must not let this first month of the new year pass without reporting myself and my plan to you and without sending warmest greetings from myself and all your friends here with wishes for your continued strength for your true service.

I am now reading and studying all the time that health will permit -- about seven hours a day and am most interested in reading works of Mr. Harris selection giving the history of the conquests of the so called Christian races over the less dominant peoples of the globe and studying the effect produced upon the conquered races by a religion of force and ceremonies without an unwilling spirit of brotherly love and charity.

Of course I always have the pain of feeling that our government is not satisfied that I am not devoting myself more entirely to book learning and the acquirements of some especial branches of science, but there are plenty of others who are doing that. We are an inquisitive people and quick to learn but, what we need most it seems to me to be a deeper knowledge of the underlying structure of Human Society. The intelligent observer must see that the present social and religious systems of the Christian world are passing through great changes and Japan would gain little by adopting blindly the knowledge that are being proved by deeper weight to have served their purpose and are being cast aside as a worn out garment. Therefore I conscientiously feel that I am being better prepared for future usefulness by the special training that I am receiving here that I could possibly be anywhere else and this I believe you concur so and I only go over the ground in case any solicitous friends in the Embassy are interested in knowing my present feelings.

If you should feel like bringing to Salem or Eve any of the gentlemen who you think would be glad to hear from Mr. Harris' life his views of the present condition of European and American social and political affairs he would be very glad to talk with me.

これは、1871 年の 4 月頃（19 歳）に長沢が、薩摩藩英国留学生の同志でのちの初代文部大臣である森有礼（1847-1889）――1868 年 6 月にすでに帰国済み――に宛てて書いたものだ。最初の My dearest S の S というのは沢井鉄馬（変名）、すなわち森有礼のことである。

では、この手紙の内容を見てみよう。最初のパラグラフでは、自分は今年の正月に森に自分のことや自分の計画について報告すべきだったし、彼の幸せを祈って温かい挨拶を送るべきであったと反省している。第 2 パラグラフでは近況報告をしており、すなわち、自分は今一日に 7 時間、健康の許す限り読書をしている、そしていま最も関心を持っていることが 2 つあると述べている。その 2 つとは、一つは、師であるトマス・レイク・ハリスの著作を読むことであって、その内容は、いわゆる〈キリスト教人種〉が地球において劣勢な人民を征服した歴史についてである。また二つ目は、力と儀式の宗教によって征服された民族にもたらされた結果について研究することである。

第 3 パラグラフがもっとも長く重要な段落である。この段落の中で長沢はまず、自分が書物を読んで学んだり、何か特別な分野の科学を習得したりすることに完全には専心していないではないか、しかし一方でそれをしている人は他にもたくさんいるではないかと明治新政府が自分に不満を持っているだろうと感じて、いつも心を痛めていると言う。さらに彼は、日本人は知識欲のある国民で覚えも早いが、我々日本人が必要としているのは人間社会の基礎をなす構造についてのより深い知識だと思う、と語る。

続いて長沢は、知性的な観察者というものは現在のキリスト教社会の社会的・宗教的なシステムが大きな変化を経験しつつあることを理解すべきであり、日本は、もはや用済みになっている知識や着古した服のように脱ぎ捨てられた知識を盲目的に身につけてみても得られるものはほとんどない、と説く。そして、したがって、と彼は続け、今受けている特別な訓練によって将来より役にたてる人材になる準備を自分は続けているところで、それにより自分はどこへでも行けるようになるだろう、と述べた後、森が自分に同意してくれると信じている、誰か友達が自分の今の心境に関心を持ってくれるなら自分はただこの地を越えていくだけである、と語ってこのパラグラフを締めくくっている。

最後の第 4 パラグラフは森への呼びかけで、もし森が、ハリスから現在の欧米の社会的・政治的状況について聞きたいと言う人を連れてくる気があるなら、自分とハリスは喜んで話し合ってみるつもりだ、と言って筆を置いている。ただし、結語が見当たらないので、実際の手紙はもっと長かった可能性がありそうだ。上でも記したように、門田明は著書『カリフォルニアの士魂』の中でこの手紙に触れていて、第 3 パラグラフの自分が怠惰に見えているのではと長沢が心を痛めている部分と日本がキリスト教社会から得るものはないと言っている部分を紹介している。そしてそれを受けて、

二十才にも満たぬ年令で、長沢はこういう成熟した考えを身につけていた。この引用の原文は、長沢自身英語で書いたものであるが、彼がいかに聡明であり、卓抜した

学習能力を持っていたか、これを読むだけでも明らかである。（門田・ジョーンズ 1983：99-100）

確かにこの手紙にあらわれる長沢は、孤独な外国暮らしの中でも成熟した考えを持つまでに成長した聡明な青年である。

筆者もこの手紙を分析してみよう。まず第1、第2パラグラフにおいては、長沢の森への思いとハリスへの思いが吐露されるとともに、自分が精力的に勉強していることを訴えている。自分はさぼっているわけではないことを強調し、次のパラグラフの傷心の告白につなげている。ハリスの著作を読んでいるという部分に彼への敬慕が表われ、それは最後のパラグラフに見える尊敬心につながっていく。

門田も紹介しているように、そして筆者もすでに指摘したように、第3パラグラフは最も重要である。長沢の日本と日本人に寄せる熱い思いが見出せるし、言いかえるとそれは長沢の武士道である。彼は、日本人は知識欲があり覚えも早い優れた国民だとの確信を持っているが、しかし今の（明治初めの）日本は欧米の変化に気付かずに欧米の古い知識や価値観にとらわれているといつか置いていかれてしまう、と危機感を表明し助言して、日本がそうならないために、すなわち自分が日本を救うために、有為な人材になろうと日夜訓練に励んでいるのだと自己を肯定する。これはまさに武士道の象徴のような薩摩藩に生まれ育って藩主の命で世界に飛び出したサムライの責任感なのではないだろうか。

第3パラグラフの締めくくりは、友が自分に関心を持ってくれれば私はこの地を飛び出す、というようなことを言っている。原文の英語ではI only go over the ground・・・・である。この言葉をどう解釈するかは難しいところだが、そしてこの時期はちょうど長沢がアメリカ永住を宣言する時期に重なるのだが、一生懸命訓練している自負もあって請われれば自分はブロクトンから世界へ飛び出す用意があるという意味ではないだろうか。それは日本に帰国してお国のために役に立つという可能性もあるという含みもありはしないか。それはともかくとして、長沢は4年後の1875年には満を持してハリスと共にカリフォルニアという新天地・開拓地に飛び出すことになる。この時彼は薩摩藩士として世界に打って出るような興奮を感じたのではないだろうか。

第4パラグラフは、日記本文にあふれているハリスへの思慕と尊敬に満ちている。ハリスの話は非常に有益だから森や周囲の人がぜひ聞くべきであるから、連れてきなさい、自分が間に入ってやる、と言っているように思われる。この頃の長沢はハリスへの敬意においてはいささかの迷いもなく、彼の思想に触れることが多くの人の成長につながる、日本人や日本が彼の思想を知ることで薩摩藩出身者が実権を握る新政府の正しい発展にもつながると、信じていたのではないだろうか。日本に住む日本人以上に日本を思い、自分が武士であることを決して忘れない長沢鼎の武士道精神がここにある。

全体を見てきて思うのはそのことである。若き長沢の心は複雑であったろうし、仲間がみな帰国して揺れていただろう。日本や鹿児島への郷愁はとても強かったはずだ。しかしそれを表に出すこと、つまりあからさまに顔に出し言葉にすることは武士道に反するのだ。手紙にはそこはかとなく彼の郷愁は現れているように思われ、自信と強がりが

交錯しているようにも思われる。短い手紙だが、親友の森に宛てたものでもあり、長沢の本音が見え隠れしているとみてよいだろう。

3.4. 長沢鼎の武士道

武士道では「武士たるものは、足を伸ばして仰向きに寝てはならない」（氏家 2012：66）のである。常に警戒しなければならないからで、死の覚悟が心得の中でも最重要だからだ。見苦しくない死を遂げる覚悟が重要なので、「切腹はもっとも武士らしい行為」（氏家 2012：144）ということになる。女性の行動とはいえ、ロンドンの初期の短編「お春」（1897）の結末は、〈もっとも武士らしい行為〉を彼の執筆人生の極めて早い段階で描いたものと言えよう。また、武士には〈寡黙〉が重要である半面、〈武士の面目〉のためには言葉を惜しんではならない。長沢は非常に寡黙な人であったようだし、そういえば、ロンドンの短編「恥さらし」（1908）の主人公スビエンコウは、読者からすればくだらない虚言を並べ立てながら、結局は介錯に似た形で醜態をさらすことなく死んで行くことができた。〈武士道〉をまっとうするには、ときには己の生命をも〈義〉や〈名〉のためには、投げ出さねばならない厳しさや凄まじさがともなった」（加来 1997：115）わけだが、江戸時代の太平の世の中にあっても、本来の厳しい〈武士道〉を守りこれをさらに厳しくしたのが薩摩の武士道であった。

薩摩藩は全国平均の 5 倍以上という武士の比率の特に高い藩で、19 世紀中葉で 20 万人の武士がいて藩の人口の 4 人に 1 人が武士だったが（今吉・徳永 2012：98、星 2008：77）、それだけに薩摩の武士道は日本の武士道を代表するような厳しく典型的なものであった（加来 1997：56）。〈薩摩士道〉または〈薩摩士風〉と呼ばれるその武士道は西郷隆盛にその典型を見る人が多いが、長沢は西郷よりはるかに先まで生き、しかも外国のカリフォルニアで厳しい薩摩士道を守って生きた〈最後の武士〉であった。では、自顕流に集約されるこの長沢の武士道とはどのようなものだったのだろう。

鹿児島には昔から「男あ三年に片頬」ということわざがある。男は三年に一度片頬だけ笑えということだが、長沢はいつも口をきっと結び、めったに笑顔を見せない男だった。他にも「山坂達者」「泣こかい跳ぼかい、泣こよっかひっ跳べ」「負くっな。嘘を言な。弱え者ぬいじむっな」というような言葉がよく知られているが、それぞれ、体を鍛えろ、勇敢に行動せよ、負けてはいけない、などと〈強さ〉を強調するものが多いのが特徴だ（橋口 2009：134-144）。ちなみに、最後の「負くっな。…」は、郷中教育のスローガンだが、この教育は「潔さと勇敢さ、弱者へのいたわりといった寛容に通じるすべてを、身をもって知らしめ養うもの」であり、「したがって、臆病を最も卑しみ嫌忌する」のも大きな特徴だった（加来 1997：60）。〈寛容〉といえば、西郷隆盛は〈武士道的寛容さ〉〈度量ある寛容さ〉を持っていたが、これは同様に郷中教育を受けた東郷平八郎や大久保利通や、ロンドンが出会った黒木為楨にも共通しているという（加来 1997：55）。この中に長沢が入ることは言うまでもないが、さらに、黒木と長沢の共通点として見るとき、この〈武士道的寛容さ〉はロンドンの短編「戦争」（1911）に描かれる〈武士の情け〉的な描写を想起させる。

〈質実剛健〉を旨とする〈薩摩士風〉は、忠孝仁義をもとにして実践を重んじるもので、薩摩の気候・風土や薩摩人の気質（激しさ、諦めの良さ、明るさなど）が育んできた（宮

下 2009：16, 39)。これは自顕流の誕生にもつながっており、「(自顕流は) なんとも凄まじい剣法だが、薩摩藩では郷中制度にこの示現流の修行を組み込み、少年時代から心身の剛毅を育んだ」(加来 1997：61)。したがって、すでに黒木を巡る章で触れたように、自顕流に見られる〈速さ〉と〈強さ〉そして〈意地（刀を使う際の気概・激しさ・厳しさ・強い覚悟など)〉が薩摩士道の本質である。

では長沢はこうした薩摩士道をどのように身につけたのであろう。彼は、13 歳で渡英するまでに、薩摩藩（鹿児島）の徹底した武士育成教育である郷中（ごじゅう）教育を強力に受け、全国に知られた薩摩の秘剣である自顕流を修めた。郷中とは町の小さな区割りのことであり、現在の校区に近いものだ。郷中の学校は薩摩藩の教育システムの基礎部分をなしていて、若者たちに薩摩の武士道精神を叩き込んだ。このシステムの第一の目的は郷中内部の結束意識を生みだすことである。第二の目的は子どもたちを教養ある大人に育てることであり、そのため子どもたちは、朝 6 時から夜 6 時まで、読書や団体行動や教訓歌を学び、武芸の練習を行った。子どもたちが武士道に従って様々な日常的状況に対処できるようにするために、武士としての常識を養うことに主眼が置かれている。

剣術はまた郷中において重んじられた。これは武士たるものの実戦に備えた準備で、郷中の学校の第三の目的であった。剣術としての自顕流は、薩摩では最も主流の剣法だった。その教義は「剣の目的は敵を攻撃することなり、自己を守ることにあらず」であり、スピードと腕力が身上で、これは全くもって攻撃的な剣法である。熟練した者はお互いに剣をぶつけ合いながら走るが、その様はまるでツバメが飛ぶように見える。たとえ 1 秒であろうが気を散らしたなら、結果は手ひどいけがを負いかねない。

謝辞

とても貴重な資料の翻刻を後続の研究者に残してくださった故門田明県立短期大学名誉教授に感謝の意を表したい。なお、門田先生のご遺志により寄贈された――長沢資料を中心とする――数百点に上る薩摩藩英国留学生資料は、鹿児島国際大学に所蔵されている。

このたび貴重な写真を提供していただき、写真と翻刻の掲載も快諾いただいた鹿児島県いちき串木野市のご厚意に対し, この場を借りて深く感謝したい。同市の計画している薩摩藩英国留学生の記念館設立の成功を祈るものである。

鹿児島国際大学国際文化学部の同僚であるデイビッド・マクマレイ教授には、忙しい中全面的な協力をいただいた。ここに記し、心よりお礼申し上げる。

注

1) 長沢の日記の翻刻は、『鹿児島県立短期大学地域研究所「研究年報」』の第 9 号（1980 年)、第 23 号（1994 年)、第 26 号（1997 年)、そして第 27 号（1998 年）に掲載されている。なお、これらの「研究年報」は鹿児島国際大学に所蔵されている。

2) マクマレイ教授と筆者の努力にもかかわらず、一部にどうしても読み取れず正確に

は判明しなかった文字がある。ここにお断りするとともに、後続の研究者のご訂正をお願いするものである。

4.　ジャック・ロンドンに対する薩摩武士の影響—長沢鼎の場合

4.1.　薩摩武士とジャック・ロンドン

日露戦争時の陸軍大将黒木為楨(くろきためもと)(1844-1923)と薩摩藩英国留学生長沢鼎(ながさわかなえ)(1852-1934)がジャック・ロンドン(1876-1916)に出会い彼に影響を与えた関係は偶然と言ってもいい。日露戦争の取材のために来日したロンドンが黒木の率いる第 1 軍に従軍することになったのはたまたま軍部がそう指示したことによるものだし、長沢はトマス・レイク・ハリスに導かれるままロンドンのいるカリフォルニア州ソノマにやってきたにすぎない。しかしそこには歴史的必然性があったという言い方もまたできる。つまり、日露戦争時の日本軍には戊辰戦争に勝利した薩摩の軍人が多数参加していたという背景があるし、それより約 40 年前に薩摩藩は鎖国中にも関わらず世界の技術を学ばせるために、長沢らの留学生を日本でも最も早い時期にイギリスへ（そしてアメリカへ）と送ったという歴史があるのだ。

薩摩（現在の鹿児島）が幕末から明治の初めにかけて日本において中心的な存在だったことが多少なりともロンドンを薩摩に近付けたと言えようが、彼は薩摩武士に出会う前から日本や日本人、または武士道にある程度関心を持っていたことも事実である。短編「おはる」(1897)が書かれたのはロンドンが薩摩武人に出会う前のことだからだ。しかし、黒木や長沢に出会ったことが彼の日本や武士道への関心を増幅させたことは容易に理解される。なぜなら、日露戦争従軍後すなわち長沢と出会って以降に書かれた〈日本もの〉の方がそれ以前よりはるかに多く、そこにはロンドンの日本ものの中でも、日本への関心がより鮮明になる短編「比類なき侵略」や「戦争」、それに未完の遺作『チェリー』が含まれているからである。

黒木との関係についてはすでに別の章で論及しているので、この章では主に長沢とロンドンの関係について概観し、二人が実際にはどの程度接触しているかを追究して、影響力について論じていくことにする。ただ、具体的な論述の前に押さえておくべきことが２つあると考える。一つは、ロンドンが青年期から日本に深い関心を持ち、生涯を通じて〈日本もの〉を書き続けたことである。その数は 10 作を越え、それ以外にも日本的な哲学が感じられる作品もいくつも存在するわけで、彼の日本や日本人への関心の強さが感じられる。

あと一つの押さえるべき点とは、そのようなことを述べるとアメリカの研究者などから、ロンドンはエッセイ「黄禍論」なども書いて日本を批判していたではないか、彼はむしろ人種主義者で反日主義者だったのではないか、と反論が寄せられることだ。しかし、これについてもすでに論じたことだが、日本を警戒するよう警告するロンドンのこうした主張と日本や武士道への彼の強い関心は必ずしも矛盾しない。簡単に述べると、従軍記や「黄禍論」などに見られる主張の核心は、不可知的なものへのロンドンの畏怖であり、集団としての日本人や国家としての日本は何をするかわからないところがありアメリカを脅かす可能性があるので甘く見てはならない、というまさに〈警告〉である。しかし、このよう

な主張の底流にはロンドンが惹きつけられるような日本人の実直さや精神力への強い関心があり、それがあるからこその主張だともいえるのだ。

ところで、薩摩武士のロンドンへの影響というものは、文学的影響、すなわち日本人がストーリー展開のうえで題材として面白いという関心というだけではなく、自称無宗教主義者で人種的な純粋さを重んじるロンドンにとっては自分の価値観にさえ関わる思想的影響でもあった可能性が高いと思われ、この点でもただの異国趣味あるいは日本趣味と言って片付けることのできない関係であると言えよう。またこの影響関係がさらにおもしろいのは、薩摩武士の影響を受けたロンドンから薩摩の（鹿児島の）複数の文学者が文学的・思想的影響を受けていることだ。このことについては後の章で詳しく触れるが、併せて考えるとこれは壮大な影響関係であることが理解されよう。

4.2.　長沢とロンドンの出会いと関わり

長沢とロンドンが出会っていたとする状況証拠はたくさんあり、ここではまずそれを提示し、そのうえで長沢の死亡記事を提示してその信憑性を検討したい。ロンドンが〈ブドウ王〉〈ワイン王〉として知られた長沢の存在を知っていたことはその死亡記事がなくとも明らかなことであり、武士道精神を残している人物が身近にいることに強い関心を持ったであろうことは疑う余地がないからだ。[1)]

ジャック・ロンドン（1876-1916）は、代表作『野性の呼び声』（1903）によって一躍人気作家になった直後の1904年に、カリフォルニア州ソノマ郡の（サンタローザの隣町である）小さな町グレン・エレンに移り住んだ。そして1905年にグレン・エレン山中に広大な土地を買って定住することになると、その後も徐々に土地を買い足して一大農園を作り上げていった。ロンドンはここで何人もの日本人を好んで雇って使用人としていたし、彼らを大変信頼して重用したが、ロンドンの死を看取ったのもそのうちの一人だったのである。

ジャック・ロンドンは知日家だった。ロンドンは 2 度来日し、1 回目は 1893 年、2 回目は 1904 年、そして実現はしなかったが、亡くなる 2 年前にもう一度来日する計画があった。1893 年には漁船員として父島と横浜を訪れている。17 歳の時だった。1904 年、28 歳の時には、新聞社の特派員として再来日し、日露戦争（1904-1905）を取材した。このとき彼は、横浜、神戸、長崎、門司、そして小倉を訪れていて、その後朝鮮半島に向かっている。

ロンドンは日本と日本人に強い関心を抱く作家だった。彼はいわゆる〈日本もの〉を生涯にわたって書き、カリフォルニアの自分の農園では、ナカタ・ヨシマツ、関根時之助、世良誓といった日本人使用人を重用した。ロンドンは、明治時代の末（1900 年代）から昭和の初め（1930 年代）まで日本で人気のある作家であったし、現在でも多くの作品が翻訳などを通して日本人に読まれている。

多くの社会活動家や作家たちがロンドンに強い影響を受けてきたが、彼がもっとも大きな影響を与えた作家は、すでに触れたように、日本の二大動物作家である戸川幸夫と椋鳩十である。動物作家であるとともに児童文学作家でもある椋は、鹿児島に住みそこで亡くなったので、ロンドンは椋を通して鹿児島の文学に好ましい影響を与えたとも言える。

ロンドンにはまた、偶然にも同じ鹿児島で生まれカリフォルニアで亡くなったサムライの知人がいた。それは長沢鼎だ。長沢は、アメリカに渡って永住した初の日本人移民であ

る。彼は大きなワイナリーを経営していたので、北カリフォルニアでは〈ブドウ王〉として知られた非常に有名な日本人だった。彼のワイナリーは全米でも十本の指に入るほど大きなもので、ロンドンが暮らして亡くなったグレン・エレンの隣町であるサンタローザで大成功を収めた。

サンタローザとグレン・エレンを含むソノマ郡は、ジャック・ロンドン・カントリーとして知られている。ここには、ジャック・ロンドン州立歴史公園やジャック・ロンドン財団が存在し、サンタローザは長沢鼎の縁で鹿児島と友好関係にある。

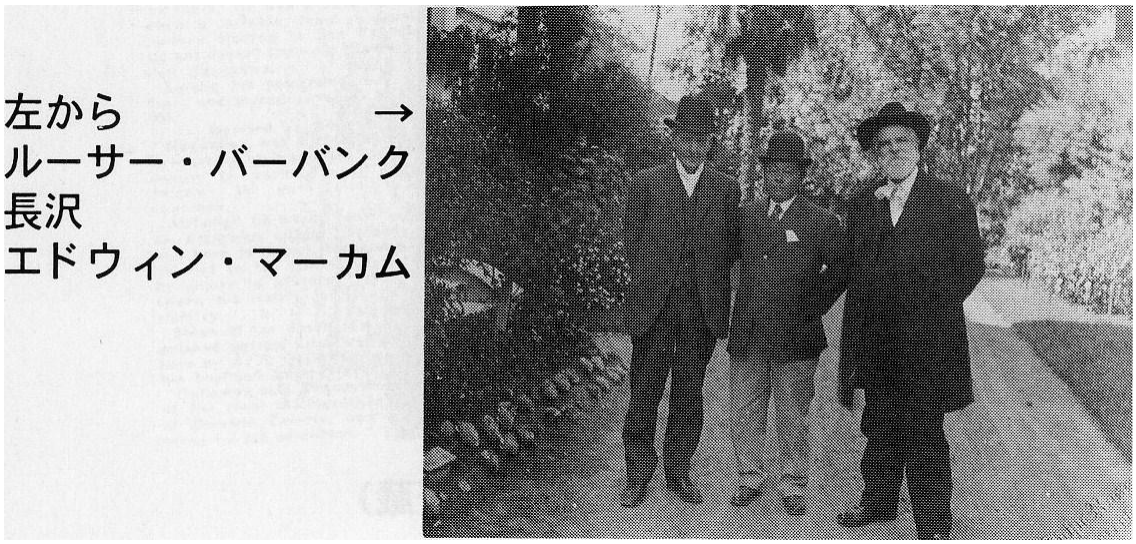
長沢鼎は、1852 年に鹿児島城下（現在の鹿児島市）で下級武士の子として生まれ、鹿児島特有の郷中教育を受けて育ち、有名な剣術である自顕流を学んだ。彼は、明治維新の 3 年前の 1865 年、13 歳の時に薩摩藩主より留学の命を受けて、他の 18 人の武士仲間と共にイギリスへと旅立った。日本でも最も早い時期の留学生、いわゆる〈薩摩藩英国留学生〉である。

長沢はその後、1867 年に他の 5 人の仲間と共にさらにアメリカに渡ったが、しばらくして彼以外は全員日本へ帰国した。それから、一人アメリカに残った長沢は、1875 年、23 歳の時に彼の尊敬する指導者トマス・レイク・ハリスと共にカリフォルニア州サンタローザに移住し、丘の上にファウンテングローブ・ワイナリーを創立してワイナリー経営に乗り出す。長沢は、サンタローザに着いた直後に、著名な園芸家であるルーサー・バーバンク（1849-1926）や有名な詩人であるエドウィン・マーカム（1852-1940）に出会っている。1911 年に事実上全ファウンテングローブ・ワイナリーの単独の所有者となった彼は、勤勉に農業、特にブドウの栽培や生育を研究し実践して成功し、〈カリフォルニアのブドウ王〉と呼ばれるまでになった。

一方ジャック・ロンドンは、1904 年 6 月に日露戦争の取材から帰国したあと、28 歳のときにカリフォルニア州グレン・エレンに移り住み、月の谷のソノマ山に広大な土地を購入して定住した。ここに落ち着くとすぐ彼は、化学的農業への情熱から、早くも 1905 年には、サンタローザ在住の世界的園芸家ルーサー・バーバンク（1849-1926、棘なしサボテンを作ったことで知られる）に農業に関するアドバイスを求める手紙を送っているし、また 1910 年以降は親しく何度もバーバンクを訪問している。その後ロンドンは次々と広大な土地を買い足して、ビューティー・ランチと名付けた巨大な農場を建設した。彼はここで〈農業小説〉を含む数々の小説を執筆する傍ら、一生懸命新しい科学的農業を勉強・研究し、それを実践した。家畜を飼育しワイン用のブドウやその他の作物を栽培しつづけたのだ。現在でも、彼の残したブドウ畑で採れたブドウで造られたワインは、〈ジャック・ロンドンワイン〉と名付けられ、高級ワインとして売り出されている。

したがって、1900 年代初頭のカリフォルニア州ソノマ郡には、3 人の著名人、つまり、世界的に有名な人気作家ジャック・ロンドン、〈カリフォルニアのブドウ王〉長沢鼎、世界的に著名な園芸家ルーサー・バーバンクが住んでいたのだ。バーバンクはロンドン、長沢どちらとも親しい関係にあった。ロンドンと長沢がバーバンクの家かどこかのパーティーあたりで実際に会って話をしていた可能性は高い。

バーバンクは 1873 年にサンタローザに住み始めているが、1875 年に長沢がサンタローザに移ってすぐに二人は親しくなっている。バーバンクは、親友長沢としばしば農業について語り合ったし、ロンドンに農業を教え、ロンドンは頻繁にバーバンクを訪ねた。ロンドンと長沢は、いわば、バーバンクの生徒だった。サンタローザにあるルーサー・バーバンク博物館には、バーバンクと長沢が一緒に写った写真と、バーバンクとロンドンが一緒に写った写真が展示されている。



鹿児島国際大学蔵。森孝晴著『椋鳩十とジャック・ロンドン』より転載

30歳前後、農園経営本格化（真ん中の人物がルーサー・バーバンク）↓

ラス・キングマン氏所蔵。森孝晴著『椋鳩十とジャック・ロンドン』より転載

そのうえ、有名な詩人のエドウィン・マーカムもまた長沢とロンドンに共通の親しい友人だった。マーカムは、長沢のファウンテングローブ・ランチとロンドンのビューティー・ランチの共通の客でもあった。マーカムは、長沢がマーカムに出会ったその同じころファウンテングローブの一員となり、長沢の農園に一時期住んでいて、農園を離れてからも生涯にわたって幾度もここを訪ねた。一方、マーカムは、1906 年当時にはすでにロンドンの親友となっていた。こうしたことから考えて、ロンドンと長沢がワイン製造者や農業者として、また有名人同士として、お互いを知っていたことは間違いないだろう。

長沢鼎は、ソノマ郡とナパ郡のすべてのワイナリーを訪問して、だれとでも率直に言葉を交わした。ジャック・ロンドンは、農業についての情報を得るために多くの場所に出向き、さまざまな農業組織や実験農場と数えきれない書簡を交換した。ファウンテングローブ・ランチで長沢とディナーをするために多くの訪問客がやってきたし、実に多くの訪問客がロンドンのビューティー・ランチを訪れてディナーパーティーに出席したこともよく知られている。ロンドンのディナーパーティーにはルーサー・バーバンクや近隣の農業者

も出席した。あるときなどは、若い日本女性が我がヒーローを一目見ようとグレン・エレンから歩いて農場に登って来たが、ロンドン一家は寛大な腕を開いて彼女を受け入れ、この女性は 2 週間先まで丘を下りて行こうとはしなかったという。ロンドンは、週 1 回、午後に、2 頭の最も足の速い馬に引き具を付けて全速力で 16 マイルを走らせてサンタローザに出かけ、バーで酒を飲んだものだ。また彼は、ルーサー・バーバンクに会うために何度となくサンタローザを訪れた。

こう見てくると、ロンドンが実際に長沢に会い、バーバンクの家か彼らの農場で時に言葉を交わしたことはまず疑いない。実際に、1934 年 3 月 1 日（長沢が 82 歳で亡くなった日）付の新聞の夕刊に載った死亡記事がそれを証明している。[2)]そこには「晩年の有名作家ジャック・ロンドンがそこ（＝長沢の農場）をたびたび訪れた」と書かれているが、これは記者が当時直接取材して書いたものだからその信憑性は極めて高い。ロンドンと長沢はお互いに何度も会っていたのだ。そして二人は、知人同士としてしばしば、農業や日本のことについて様々に語り合っていたに違いない。

長沢の死亡記事（ロンドンがしばしば訪れたことが記されている）

JAPANESE EXPERT WHO WORKED WITH BURBANK IS DEAD

3/1/34

Kanaye Nagasawa, Internationally Known, Succumbs In Sonoma

Kanaye Nagasawa, internationally-known agriculturist and collaborator with Luther Burbank, the plant wizard, in some experiments died to-day at his home at Fountain Grove, near Santa Rosa.

Nagasawa, a Japanese, was years of age, and had resided America since he was 11 years old.

Was Noted Viniculturist

Nagasawa, one of California's wealthiest Japanese, [illegible] been prominent in wine [illegible] in Sonoma County [illegible] Fountain Grove [illegible] of the show places [illegible] ity. In 1915 he [illegible] with the Order of the [illegible] emperor in recognition of his work among Japanese in the United States.

Residents of the Sonoma Valley knew the aged man as Prince Nagasawa. He was [illegible] descent. He was a bachelor. Several nephews are active in the management of the winery, which specialized in French type wines.

Nagasawa lived in a large [illegible] building house, with a dining room having a seating capacity for 100 persons.

London Was Visitor

This residence for fifty years was the Mecca for literary lights and artists. The late Jack London, noted author, was a frequent visitor there. It was a rare occasion when a notable from a foreign country visiting in San Francisco did not depart from his itinerary to visit Nagasawa.

Among his possessions [illegible] library and museum [illegible] 000.

Devoted To Am[illegible]

Nagasawa was a [illegible] Frequently his name led the list of donors in various charity campaigns. He gave also to the churches.

Although he never [illegible] an American citizen because he was born in Japan, Nagasawa was devoted to the United States. He strove to preserve [illegible] tween his native land and [illegible] country.

News of the death of this distinguished agriculturist was [illegible] here by A. R. Gallaway, [illegible] his boyhood [illegible]

Gallaway said Nagasawa [illegible] of the most distinguished [illegible] of Sonoma County, and [illegible] loved by his neighbors.

Rev. Robert D. Clark of Santa Rosa will pronounce the Episcopal ritual at the funeral service at 11 a. m. tomorrow. Wallace L. Ware, state railroad commissioner and lifelong friend of Prince Nagasawa, will deliver the eulogy.

Honorary pallbearers include Justice J. Emmett Seawall of the state supreme court, Superior Judge Hilliard Comstock, W. Finslaw Geary, Ernest L. Finley, Senator Herbert Slater, J. Henry Williams, Joseph P. Grace, Frank P. Doyle and other outstanding citizens.

PALLBEARERS NAMED

Active pallbearers will be [illegible] L. Ward, Allison Ware, Phillip Ware, Charles M. Ware, brothers of Santa Rosa; A. R. Gallaway of Sacramento and George W. Murphy of Santa Rosa.

Cremation will follow the funeral service.

The Fountain Grove colony of vineyards, orchards and gardens, composed of 2000 acres three miles from Santa Rosa, was the show place of the country, equaling the home and gardens of Luther Burbank in interest. Prince Nagasawa came to the country about the same time as the horticulturist wizard.

The colony features a magnificent old mansion, with library of thousands of volumes, many of them priceless. Beautiful botanical gardens and fertile vineyards spread from the mansion.

COLONY FOUNDED

The colony was founded by a group of the "New Life" cult under the late Thomas Lake Harris, philosopher, writer and poet. Through inheritance and purchase, Prince Nagasawa became sole owner of the property many years ago. Edwin Markham was a friend and intimate.

The son of a Japanese gunpowder manufacturer, then related to the reigning dynasty, Nagasawa was educated in England and America and directed the interests of the Japanese government in 1915 for the Japanese exhibit at the exposition.

He was decorated and made Knight of the Order of the Rising Sun at impressive rites at Fountain Grove, in recognition for his efforts for good will between America and Japan.

Three nephews, a grand nephew and grand niece survive him in this country.

ファーン・ハージャー氏提供。ソノマ・カウンティー・ライブラリー蔵

ロンドンは、ビューティー・ランチを作る際に長沢のファウンテングローブ・ランチから学び、参考にしたのではないか。彼の小説に登場する日本人の中には、長沢のイメージをベースにして描かれてはいるものがあるのではないだろうか。

ロンドンは熱心に農業に打ち込み、さまざまな資料や情報を集めて農業を研究し、広くいくつかの実験も行った。たとえば、ユーカリの木を植栽するというテーマについてあらゆる政府広報を調べ、カリフォルニア大学デーヴィス校に出かけて行って農業の専門家と話をしたり、手に入る限りのあらゆる情報について熟考したりした。ルーサー・バーバンクがサンタローザの自分の実験農場から自ら育てたとげなしサボテンを持ちこんだときには、ロンドンは、何にでも挑戦する気概があったので、彼はそれを自分の農場に植栽した。こうしたことにより、彼は農業の専門家になるのに十分な知識を得た。

一方長沢も、新しい農業やワインの製造技術について調査し本を読み、また実験をするのに非常に多くの時間をかけたし、畜牛や馬も飼育した。1893 年にはカリフォルニア州ワインコンテストに出品して 2 位を取っている。ロンドンはカリフォルニア州の農業について研究し、カリフォルニア農業を救おうと思い立ったほどなので、長沢の活動に関心を持たないわけにはいかなかった。

1893 年にはサンタローザのワイン製造者から大量のワインやブランデーが陸路で運ばれたが、その出荷量のうちファウンテングローブのシェアは実に約 90 パーセントに上り、長沢のファウンテングローブ・ワイナリーはカリフォルニア州全体で、つまり全米で十本の指に入るほど大きなワイナリーだった。もちろんロンドンは、農業についてはバーバンクから大きな影響を受けていたが、長沢の技術やスタイルも自分のものとしたり、あるいは参考にしたりしていたのではないだろうか。少なくとも、ロンドンは長沢の大地への愛や人道的な農場経営に共感していたはずである。

4.3.　長沢、または薩摩武士の作品への影響について

ロンドン文学への薩摩武士の影響については、『チェリー』や『白い牙』などを挙げて、黒木を巡る章の中ですでに具体的に実証してきたところだが、さらにほかの作品も取り上げてその実証性を高めていきたい。ロンドンの後半の作品群、特に〈農業小説〉の中には、カリフォルニアの農場や日本人の登場人物への言及がよく見られる。登場する理想的な農場は基本的に彼のビューティー・ランチを反映していると思われるが、そのイメージの幾分かは長沢のファウンテングローブ・ランチから来ているかもしれない。ロンドンの晩年の作品に出てくる日本人の登場人物には長沢を思わせる人物もいて、注目に値する。次にその例を見てみよう。

ロンドンの優れた農業小説である『月の谷』(1913) の後半には複数の日本人が登場する。特に、第 3 部の終盤、〈月の谷〉（カリフォルニア州ソノマ郡のロンドンが暮らした地域の先住民由来の地名）を舞台とする場面では、主人公のビリーが「仔馬に乗って出かけて、実験を続けている日本人化学者と話をしたよ」(London1913, 1916：508) と述べているが、実際長沢は農業の研究と実験に多くの時間を割いている。長沢以外にそういう人物がいたとは考えにくい。

ロンドンの未完の遺作である『チェリー』(1916) では、ハワイに住む若い日本人女性チェリーが日本人ヤードボーイの一人〈ノムラ・ナオジロウ〉に思いを寄せている。この作品の中でノムラは、「彼は優秀なヤードボーイだ。彼はいつも働いている。働き過ぎるくらいだ。他のヤードボーイたちは彼が好きではない。だが、彼を恐れている」「ひどく恐れている。ノムラがとても粗野な日本人だからである。彼は強い男だ」とか

彼がとても粗野で強いことはだれもが知っていることだ。…ノムラは強い眼をしている。彼は何も語らない。彼の眼が語るのだ。だれかがなれなれしくするときノムラの眼はより強く見える。だから他のヤードボーイたちが彼を恐れるのだ

とか

「ノムラはもっと勇敢だ」そして

ノムラはすばしっこいわけではない。むしろスローだ。彼の眼が語るのだ。変人の監督官が…ノムラが地位の低い苦力のように素早くないと言って彼の頭を乗馬用の鞭でたたいた。やった！　頭に鞭を受けたノムラは非常に素早かった。ポルトガル人の変人監督官の腕をつかみ…花のように鞍から突き落とすと、監督は地面に仰向けに倒れ、腕が肩の内部でひどく骨折していた

などと説明されている(London1999：60-61)。

ノムラの眼が語る、つまり目でものを言うのである。彼の行動は普段はのろいが、攻撃されると急にその動作はとても機敏になり、激しい男となる。その眼は武士の眼であり、このような素早さは武士のそれ、特に日本の剣術の速さである。ではロンドンは武士を知っていたのか。すでに少し触れたことだが、橋本順光が指摘しているように、ロンドンはたしかに新渡戸稲造の『武士道、日本の魂』(英文版、1900) を 1904 年までには読んでいた (橋本 2005：218)。エッセイ「黄禍論」(1904) の中で『武士道』の一節に触れているからだ(London1970：349)。この書は日露戦争後に各国語に訳されてベストセラーになったわけだから (富増 2013：21)、短編「おはる」(1897) に見られるような日本への強い関心を持つロンドンがこれを読んでいても不思議ではないし、むしろ待望の書だったかもしれない。[3)]

こうしてロンドンは、『武士道』そのほかの書物を読んで武士のことを勉強していたのではないか。そう考えると、たとえば、代表作『野性の呼び声』や『白い牙』に武士道の〈忠義〉を見ることさえできるだろう。ロンドンは、上記したように、『武士道』をその初版がフィラデルフィアで出版された 1900 年 (明治 33 年) から日露戦争を取材して帰国する 1904 年 (明治 37 年) の間に読んでいたから、1906 年に出された『白い牙』はもちろんのこと、1903 年に出された『野性の呼び声』でさえこの書の影響を受けている可能性も否定できない。その『武士道』の第 9 章「忠義の義務」には、次のような記述がある。

…忠誠心がもっとも重みを帯びるのは、武士道の名誉の規範においてのみである。(新渡戸 1993：108、Nitobe2007：87)

…他の国では忠義が忘れ去られていたり、また私たちが他の国では到達しなかったくらいにまでその考えを進めた…(新渡戸 1993：110、Nitobe2007：88)

このように日本の武士道にとりわけ特徴的に表れ外国より深い到達度を有する「忠義、忠誠心(loyalty)」の厳しさについて、新渡戸は、

生命はここに主君に仕える手段とさえ考えられ、その至高の姿は名誉あるべきものとされたのである。サムライのすべての教育や訓練はこのことにもとづいて行なわれたのである。(新渡戸 1993：122、Nitobe2007：95)

と述べている。

さて、そこで、ロンドンの二大代表作を見てみよう。『野性の呼び声』の主人公バックは、愛する主人ジョン・ソーントンのために尋常ではない行動を 3 回もやって見せる。まず、実行には至らなかったものの、ソーントンの命令どおりに疑いもせず崖下に飛び込もうとした。次に、サークルシティーでソーントンを助けるため、バートンという男の喉を咬み裂いてしまった。さらに、フォーティーマイル川の急流を下っているとき、船から落ちたソーントンを、自身がおぼれそうになりながら救助した。

一方、『白い牙』のホワイト・ファングは、〈愛の神〉と言うほど愛する主人ウィードン・スコットのために、スコット判事邸に押し入った狂暴なジム・ホールと闘い、拳銃で撃たれながらもこれを咬み殺した。犬は忠実な動物だとは言え、バックにしてもホワイト・ファングにしても、彼らのエピソードに示されたのは、何という強い忠実さだろう。異常なほどの忠誠心と言ってもいい。これこそ新渡戸のいう「生命はここに主君に仕える手段とさえ考えられ」るような武士道の〈忠義〉であろう。ロンドンがそれを意識して書いたと考えてもあながち不自然ではない。『野性の呼び声』の結末部に、野性の世界に戻って数年たってもバックが毎夏ソーントンと過ごした谷を訪れる、という記述がある。これは、バックのソーントンへの愛の深さを示すものだが、言いかえるとバックの忠誠心・忠義心の強さを示すものでもあるだろう。このエピソードは、すでに触れたことだが、、長沢鼎が鹿児島を発って半世紀が経過してもなお、長沢邸を訪れた島津忠重を門前で土下座をして迎えたという逸話を思い起こさせるのに十分だ。

しかし考えてみると、ロンドンが 2 度に渡って来日したときには、すでに日本に武士はいなかったのだ。ロンドンの日本人使用人たちは武士でも武家の血筋でもなかったし、彼は来日時にも日本で実際に武士に会うことはかなわなかった。ところが、同じソノマ郡にいた長沢鼎は正真正銘の武士だったし、言いかえると、ロンドンが実際に本物の武士を見たりこれと接触したりしたことは、武士出身の黒木為楨陸軍大将を除けば、長沢以外にはない。

すでに述べたとおり、長沢は薩摩士道を叩き込まれた本物の武士であった。彼は、「一見

太っており、背丈は低かったが、非常に敏捷」（門田・ジョーンズ 1983：134）だった。また、『ディアボーン・インディペンデント』紙の記者が、ある時、長沢が刀を取り出したその現場に居合わせた。記者は、長沢がさやから刀の刃を引き出すしぐさの中に武士の伝統の名残を見てとった。長沢は、アメリカにありながらも、若き日に進んで敵の首を切ろうとするときに行ったように、素早く力強い動きで〈抜き〉を見せ、鮮やかな刀さばきを見せた、ということを記者は証言している（門田・ジョーンズ 1983：156）が、これはまさに薩摩の自顕流の特徴である。

長沢は、郷中精神、すなわち強力な精神的・社会的自制心を十分に持ち続けたし、簿記や金銭管理はあまり好きではなかったが、日本国籍を生涯捨てることなく、武士道精神を保持し続けた。チェリーは人種的に純粋な日本人で、誇り高き血筋だが（London1999：5）、長沢もまさに人種的に純粋で、下級武士の出身ながら名のある家柄である。彼は、日本人であることを誇りとし、武士道精神を持つ典型的な日本人だ。まさにそんな日本人サムライがジャック・ロンドンの近くに住んでいたのだ。

『チェリー』の中でロンドンは、「多くの日本人使用人が〈ノムラが黒木さんによく似ている〉と言うが、黒木さんというのは高い血筋を引く日本の戦時の大将軍である」（London1999：61）と書いているが、ノムラのイメージは薩摩のサムライのそれ、つまり長沢のイメージでもあるのではないか。ノムラのモデルは長沢である可能性もある。いや、黒木と長沢のイメージを融合したのがノムラなのかもしれない。すでにほかの章で指摘した『白い牙』の主人公〈白い牙〉の自顕流的描写も、短編「恥さらし」の切腹的描写も、さらに短編「戦争」の〈武士の情け〉的描写も、同じ自顕流や薩摩武士道を修得した黒木と長沢の両方から得たヒントに基づいて書かれたと考えたほうが自然なのかもしれない。また、自顕流的な強さとスピード感を持つ作品は他にも存在するし、厳しい精神性（道徳性、倫理性）を示す作品も存在する。黒木と長沢のロンドンへの文学的・思想的影響は案外大きいかもしれない。

ところで、ロンドンはなぜ強い関心を抱いていたはずの長沢のことに、自分の著作の中で具体的に言及していないのだろう。彼の住所録をすべて調べてみても長沢の名は出てこない。いや、日本人の名前自体がほとんど出てこないというのが事実である。奇妙なことだが、長沢の資料の中にも今のところロンドンの名は見当たらない。おそらくロンドンにしてみれば、日本への警戒を激しく主張した自分が、ごく近距離に住む長沢への関心を公に語れば誤解を生じると考えていたのではないか。そこであえて名前を出さなかったのではないか。長沢は武士としての自覚もあり、階級意識から考えても武士道とは相いれないであろう社会主義を信奉するロンドンには、やはり表向きは距離を置かないわけにはいかなかったのではないだろうか。しかし、逆説的に考えれば、これだけ証拠がそろっていながら名前が出てこない不自然さこそが、かえって二人が親密だったことを示していると言えるかもしれない。

ロンドンは一方で、時代背景もあり日本人に対する偏見のようなものも持っていたが、彼の日本人に対する関心は非常に大きかった。矛盾した面もあった彼が日本人や日本人の精神にどのような関心を持っていたかは非常に興味深いし、ロンドンの日本人に対する関心と彼の作品世界の関係についても、もっと注目されるべきであろう。

注

1) 本章で扱うロンドンと長沢の伝記的な情報については、*A Pictorial Life of Jack London, Kanae Nagasawa-A Biography of a Satsuma Student*── および『カリフォルニアの士魂──薩摩留学生長沢鼎小伝』からのものであり、すべての記載ページを示すことはしない。

2) この記事は、20 年ほど前にサンタローザ市在住の地方歴史家ファーン・ハージャー氏よりそのコピーを提供していただいたもので、氏によれば、ソノマ・カウンティー・ライブラリーで見つけたものだということだ。コピーには「要保存　歴史的価値あり」という印があるが、その後筆者が自分で 1 年以上に渡って調べてみたものの、どこの新聞かは未だに突き止められていない。

3) アメリカ第 26 代大統領セオドア・ルーズベルト(1858-1919)や日露戦争当時のロシア皇帝ニコライ 2 世(1894-1917)も読んで、感動したそうだ（富増 29)。

第２部

1.　椋鳩十と鹿児島―ジャック・ロンドンから松風まで

長野には椋鳩十顕彰会や椋鳩十記念館があり、鹿児島には椋の顕彰とその文学普及にあたる松風会や椋鳩十文学記念館がある。椋は長野の作家でもあり、鹿児島の作家でもあるのだろう。長野と鹿児島の環境が与えた影響は大きいが、ここでは鹿児島と椋の深い関係を見ていくことにする。

1.1.　鹿児島に来るまでの経緯

椋鳩十(1905-1987)は、1905 年（明治 38 年）に長野県下伊那郡喬木村に生まれた。本名は久保田彦穂である。多感な少年時代を南アルプスの大自然の中で過ごし、1918 年（大正 7 年）に入学した長野県立飯田中学校で大きな文学的示唆を与える恩師と出会うとともに、多くの文学作品を読んで文学に傾倒していった。その恩師とは佐々木八郎であり、正木ひろしである。すでにヨハンナ・スピリの『アルプスの少女ハイジ』に強いインパクトを受けて文学への窓を開かれていた椋は、彼らから世界の様々な作家や作品を紹介された。

特に正木からは当時はまだ日本では広く知られていたとは思えないアメリカ作家たちを紹介され、ソロー、エマーソン、ホイットマン、マーク・トウェインなどから大きな影響を受けた。特にエマーソンの自然哲学やソローの自然に生きる姿勢からはのちの基本的創作態度を学んだと思われるが、実は正木からは当時最新流行の作家であったジャック・ロ

ンドン(1876-1916)も紹介され、このことがのちに鹿児島行きにつながっていくのである。
正木がロンドンを紹介したという確証は実のところいまだ見つかっていないのであるが、椋がそのころから精力的にロンドンを読み始めることや最も新しいアメリカ作家を紹介できたのは正木以外にはいないと思われることから、正木の紹介によってロンドンに出会ったことはまず間違いないだろう。
もちろん椋はこうした作家以外にも、ツルゲーネフやゴーゴリとかスペインのバローハやヒメネスなど多くの作家から影響を受けている。しかしロンドンが椋を鹿児島に誘い、ロンドンから受け継いだ精神が鹿児島永住を促したと言ってもあながち言い過ぎではないと思われるのである。
さて、その後 1923 年（大正 12 年）に飯田中学を卒業して、翌 1924 年（大正 13 年）に東京の法政大学文学部に進んだ椋は、詩を書くことで執筆人生を開始する。2 冊の詩集を自費出版し、童話や評論も発表する傍ら、次々と翻訳・出版されるロンドン作品を読むことも忘れなかった。そして 1930 年（昭和 5 年）に同大学文学部国文科を卒業する時に大きな転機が訪れた。
東京の大学を卒業すれば当然故郷の長野に帰ることが予想されるわけだが、なぜか椋は全く知らない土地である鹿児島に赴任、移住していくのである。この理由については、鹿児島に永住したこととともに以前から不思議なことと思われていたようだが、実はそこにはかなりはっきりした経緯が存在していたのである。
椋自身は鹿児島に来た経緯についてどう語っているだろう。まず、久保田喬彦の『父椋鳩十物語』を見てみよう。椋の妻みと子によれば、それは話す時により微妙に変わり、ある時は、

> 大学を卒業した昭和五年という年は、非常な就職難だった。おれはなあ。運よく学校でもいちばん早く山梨の師範学校に内定していた。…ところが三月になって校長が亡くなられた。校長が変わると人事は一変する。内定は白紙にかえってしまった。あわてたねえ。…鹿児島で女医をしていた姉に泣きついた。とりあえずというので、種子島の小学校の代用教員に滑りこむことができたよ(久保田 1997： 85)

と言い、別な時は、

> あのなあ。昭和 5 年という年は未曾有の就職難だった。…おれは妻が臨月だということにはじめて気がついた。これには、のんきな私もあわてたね。北は千島、樺太、北海道から南は台湾、南洋諸島まで、履歴書を送りまくったよ。返事が来たのは台湾と種子島だけ。しかも台湾は断り状、種子島は代用教員なら採用してやってもよろしいという便り（久保田 1997：85-86）

と述べて、姉や代用教員のポストが自分を鹿児島に呼んだとしている。しかしみと子が伝えるところによれば、別なある時には椋は次のようにも説明している。

山国で育った私は、あのいきいきとした、躍動的で野性味たっぷりのジャック・ロンドンの世界にあこがれたね。…南の島の学校という学校へ履歴書を送ったよ。…その中でもすこしでも遠く、未開の地を希望していたんだが、妻の親父が、
『へんな外国の作家にあこがれて、名もわからない島へ行くなんて、…』
と猛反対、やむをえずいちばん本土に近い種子島でがまんせざるを得なかった（久保田 1997：86）

こうしたことから椋が様々な言い方をしていることがわかるが、同書の中でさらに久保田喬彦は、椋が来訪者に、

ジャック・ロンドンの『野性の叫び』あれはいいなあ。私の文学の原点だ。あんな作家になりたくて鹿児島にやって来た。君も読んでおけよ（久保田 1997：182）

と言っていたことを明らかにしている。
大学卒業以前にすでにロンドンの作品については、代表作『野性の呼び声』『白い牙』（椋は特に『白い牙』に惹かれた）をはじめルポルタージュである『奈落の人々』や短編集などかなりの作品を読んでいた椋だが、ロンドンへの思いについては、とりわけ対談の中でよく語っている。鹿児島に来た経緯について、1980 年、昭和 55 年 4 月に児童文学者鳥越信と行なった対談の中では、

ジャック・ロンドン、ところがこれは、動物作家だと思っていたら違うよ。いろいろの作品を書いている。海の作品も書いている。南海物語を書いている。南洋―。
―（中略）―
もうすばらしかった。それで、ぼくは大学出てから作品書こうと思ったころに、ジャック・ロンドンのあれにすっかり―田舎に育って、そして山の中に育ったから海を見たことがないでしょう、ああいう海の物語を書こうと思った。…サイパンだったかな、どこかで徒弟学校の口があったんです。ぼくはそこへ行くつもりで、そして姉が鹿児島で医者をしていたから、大学病院の前身の県立病院。姉に、いろいろ、小遣いもらったり世話になっていたから、姉のところへお別れに行こうと思って、そして、ちょうどそのころ学生結婚で家内を持っていたころだから、家内を静岡の郷里に行ってお別れして来いと、もう、南洋に行ったら五、六年帰れんぞと、家内を静岡に帰したのが南洋へ行きそこなっちゃたんだ。静岡では家内の親父がぼくをちっとも信用せんからね。…静岡の実家の方で、家内をとりあげちまった。…・弱っちゃって、姉に相談したら、おまえ、しょうがないからこっちでどこか勤め口探して、勤めているうちに呼びに行って、お詫びをして、そしてからでも南洋に行ったらどうかというので勤め口を探したんだけれども、勤め口ないよ、そのころもう。四月を過ぎちゃったから。
そしていろいろ探しておるうちに種子島に代用教員の口があったよ（椋・鳥越 1980：14-15）

と詳しく語っているし、1982 年、昭和 57 年 4 月に長野県大鹿村の山塩館で編集者小宮山量平と行なった対談では次のように述べている。

…こんなに南の方へ移り住むことになったのは、私の姉が鹿児島におるという関係からだった。じつは昭和五年に大学を卒業するとすぐ、南の海のことを書くつもりで鹿児島へゆき、姉に会って、これから南洋に行こうと思っているんだ、というと、この姉が賛成してくれたんですねえ。…その頃私は詩を書いていたんですがね、…もうひとつのびのびと物語そのものを書きたくなってきたんですね。そんな思いを刺激したのが、その頃読んだジャック・ロンドン（Jack London 1876-1916）なんですね。

―（中略）―

するとロンドンは、いわゆる社会派的な作品もたくさん書いているし、すぐれた短編小説も少なくない。その中に「南海物語」というのがありました。…それを読んでいるうちに、私はこういう（この鹿塩のような）山また山の中に生まれ育ったものだから、海への憧れがつのってきたんですね。九州に住んでいた姉からは、学生時代にも小遣いをもらったり、いろいろと援けてもらっていたもんですから、南洋に行くにつけても、先ずは姉の所にお別れのあいさつに…思ったわけ。するとこの姉が、それはいい、行きなさいって…。

―（中略）―

何しろ南洋へ行ったら十年ばかりは帰れんからって、家内を静岡の郷里へお別れにやったんです。すると親父がそういう心配をして、家内を帰してよこさないの。鹿児島から発つつもりでいたんですが、困ってしまって姉に相談しました。それじゃ、こっちでどこかへ勤めてみないか、勤めているうちに姉が嫁の郷里へ呼びに行ってやるからってんで、勤め口を捜してみた。

けれど、卒業の年も四月を過ぎては、どこにも勤め口なんてない。どうにか種子島というところに一つだけ、代用教員の口があった（椋・小宮山(1)1982：216-219）

詳しくは後述するが、この翌年の 1983 年、昭和 58 年 7 月には、鹿児島市民文化ホールで開催された芸術選奨文部大臣賞受賞記念の講演会で、椋は「私がどうして鹿児島にやってきたか。鹿児島にきてからの、私の文学がどんなに変化していったか、そんなことを、これからお話ししようと思っています」(椋 1983：1)と前置きした上で、すぐにジャック・ロンドンを紹介し、ロンドンの短編「戦争」について詳しく語ったあと、

…大海原を背景として、強烈な物語を展開させるジャック・ロンドンの南海物語を読んだのです。

まだ、見たこともない、南方の海に、強く心ひかれました。そして、私は、欧米人の見た南洋でなく、日本人の目で見た南洋の物語を書いてみたいと思いました。南洋に行ってみようと、思いたったのでした。昭和五年でしたから、今から、五十三年も前の話です。

ところが、南洋まで行ききれず、種子ヶ島にとどまってしまいました（椋 1983：10-11）

と説明している。
また、本村寿一郎によれば椋は次のように説明している。

大学時代、私はジャック・ロンドンを読みふけり、その『南洋物語』にひかれて、海の物語が書きたくてたまらなくなった。そこで大学を卒業した年、南洋に行くつもりで南に向かった。当時日本の委任統治領だったマーシャル群島の職業訓練学校に、たまたま教師の口も見つかっていた。とりあえず、身重の家内を実家の浜松へ帰し、鹿児島に来た。姉が鹿児島県立病院で女医として働いていたから、あいさつをするつもりだった。
ところが家内の親父から『…娘は渡せない』と言ってきた。困って姉に相談したら『ほとぼりがさめるまで鹿児島にいたらいい』という。『じゃ、ここで一年ぐらい働くか』ということになったのが、私の第二の故郷鹿児島とのなれそめだ（本村 1998：42）

ここまで見てきてわかるように、椋は、ロンドンへの思いと姉とのきずなが自分を鹿児島に引き寄せたという意識を強く持っていたのである。
では、研究者などの椋をよく知る人たちはこの経緯についてどう見ているだろうか。既に登場した小宮山は、「あたかも J・ロンドン的な流浪を思い描いて九州まで辿りつきながら、忽ち鹿児島で医者となっていた長姉清志にあっさり取りおさえられたり、その姉の世話で身を寄せての代用教員の務めをしくじったりしたテンマツ」（小宮山 2005：24）と解釈しているし、椋と親しく付き合い伝記を書いた生駒忠一郎は、こう説明している。

…彦穂は、伊那谷に帰って家業を継ぐつもりはなかった。
学生時代にはぐくんだ夢とロマンを実現させるために、はるかな太平洋上に浮かんでいる南の島に就職することを夢見ていた。
そこで、二十数通の履歴書を作って関係方面に郵送したところ、日本の統括領、マーシャル群島の職業訓練学校の教師の口が見つかった。
南の島で生活をしながら、海を舞台にした小説を書きたかったのである。
雄大な自然と動物のかかわりあいを描いた『白い牙』、ヨーロッパに征服された原住民たちのエキゾチックな世界『南海物語』を書いたジャック・ロンドンといった人たちに大きく影響されていたからだ。
そこで彦穂は、まず鹿児島県立病院にいる姉の清志にいとまごいをするために、身重の妻のみと子を静岡の実家に預けて旅立った。
ところが、彦穂のそんな計画を聞いてみと子の父が激怒した。
―（中略）―
彦穂も姉も困りはてた。まもなく生まれる子をみごもっている妻を捨てて旅立つような勇気は出てこない。
そこで姉が、ほとぼりのさめるまで鹿児島にいろということで、種子島の中種子高等小学校の代用教員の職を見つけてきた（生駒 1995：87-89）

ところで、一番詳しくこの経緯について語っているのは長野の椋研究者宮下和夫である。その内容を見てみよう。

昭和五年三月、彦保はいよいよ法政大学を卒業する時をむかえた。

この年は、日本の経済に不況の嵐が吹きまくっていて、ひどい就職難をきたしていた。彦保は教員を希望していたのだが、東京はもちろん、地元の信州でも、彦保をやとってくれる学校はなかった。

そのとき、みと子夫人は身重のからだだった。

「生まれてくる子どものためにも、何とか就職しなくては…

みと子を静岡の実家に帰しておいて、彦保は、ひとり阿島の家にこもって、あちこちの学校へ履歴書を送るのだった。…しかし、ことわりの返事は来ても、採用の返事は一通も来なかった。

四月。…

しばらくして、鹿児島にいる姉の清志から手紙が来た。…

…上久堅村出身の筒井清治と結婚して、鹿児島県立病院の眼科医になっていた。

手紙の内容は、目の治療に来た磯野という県の視学官に、彦保の就職についてたのんだら、種子島に小学校教員の口があるというので、そこに行ったらどうかというものであった。

「種子島か、わるくないなあ」

…

その彦保の頭にまず浮かんだのは、ジャック・ロンドンの『南海物語』だった。つづいて『海の狼』『野性の呼び声』『白い牙』など、ロンドンの一連の作品だった。

彦保がジャック・ロンドンの作品を読みあさったのは、おもに予備校に通っていた浪人中であった。

…

―極北の物語を書いたと思ったら、こんどは南洋の物語か。ジャック・ロンドンという男は、まるで化け物みたいだ。しかも、自分の体験によって物語を書いているんだから、そのエネルギーは大したものだ。

彦保は、ジャック・ロンドンを知ったとき、そう思った。

―（中略）―

また、ジャック・ロンドンが一九一一年に出版した『南海物語』は、日本の小説では見ることのできない、スケールの大きな冒険小説だ。

―（中略）―

「そうだ。この信州には海がない。おれがひとつ南洋にわたって、信州人の南海物語を書いてやろう。その手はじめに種子島に行くのもいいだろう」

―（中略）―

こうして彦保は、昭和五年五月、鹿児島県熊毛郡中種子村中種子高等小学校に代用教員として単身赴任したのであった（宮下 2004：47-54）

以上のように、椋の言うことにもぶれがあり、研究者の説明にも微妙にずれがあって、マーシャル群島の教師の口の話など、事実関係については明確でないところもある。だが、椋が実際に繰り返している言葉や周囲の人々の証言からして、彼は最終的には姉の勧めがあって鹿児島に赴任することを決めたのであるが、そもそもロンドンの影響、特に『南海物語』の影響がなければ南を目ざすことそのものがなかった、ということは明らかであろう。すなわち、先にも述べたように、少なくとも椋の意識の中には〈姉とロンドンの存在が自分を鹿児島に連れてきた〉という思いがあったと言えよう。

鹿児島に関わる〈謎〉は、もう一つある。それは〈なぜ椋は鹿児島を出なかったのか〉ということである。この点については後の章で考えてみよう。

1.2.　鹿児島を舞台にした作品

椋はほとんどの作品を鹿児島に来てから書いているが、その中でも鹿児島を舞台にして書かれているものが圧倒的に多い。もちろん故郷の長野を舞台にした作品も多く、さまざまな場所のイメージを融合して書かれているものもあるが、主な創作作品を中心に椋の作品 280 編余りを調べてみるとそのことは歴然としている。鹿児島を舞台とする作品群は全体の 6 割以上に上り、3 割強を占める長野を舞台にした作品の 2 倍近くになる。よって両県以外の場所を舞台とする作品はごく少ないことになる。

鹿児島を舞台にした作品は、ほぼ県内全域を扱っているといってよいだろう。加治木高女の教員となって 10 年ほどたって教員生活に慣れた 1941 年ころから鹿児島を舞台にした作品を精力的に書き始めた椋だが、舞台になった地名が判明しているもの中で一番多く登場するのは 12 編余りに上る加治木である。その中には、椋の代表作のひとつで、飼い犬のマヤが戦争という時代に巻き込まれて殺される『マヤの一生』や不屈の母スズメの野性的な戦いを描いた「片脚の母雀」、猫の主人への愛情を扱った「猫ものがたり」、ニワトリの母性愛を描いた「鶏通信」が含まれる。

次に多いのが屋久島で、9 編余りが書かれている。この中には、やはり代表作のひとつで、鹿を追っていた「ぼく」を含む 3 人が、逃げ込んだほら穴で片耳の大鹿をリーダーとする鹿の群れに命を救われるという名作「片耳の大シカ」や、人間の開発に追いやられるヤクザルを描く「野性の叫び声」、鹿・大鷲・ヤクザルなどの野生動物の闘争と本能を扱う「野獣の島」、若いヤクザルのホシが、両親を人間に襲われながらも生き抜いてサルの大王となり、大王らしく死んでいくまでを感動的に描いた『ヤクザル大王』が含まれる。

3 番目と 4 番目に多いのは、意外にも甑島と鹿児島市である。甑島は 5 編ほどに書かれているが、その中には、「王者の座」「消えた野犬」「丘の野犬」の三部作からなり、終戦後に島に残された軍用犬のナチが生き抜いて野犬の群れに飛び込んで勝利し、群れの王位に就きさらに大きな群れの王にもなるが、群れの中の大きな黒犬に襲われて王位を失い、去っていく群れを見つめる、という『孤島の野犬』が含まれる。一方 4 編ほどある鹿児島市を舞台にした作品としては、結婚する長女のあかねに送ったもので、鹿児島港でオランダの水兵から貰った猫のモモとあかねの愛情を軸にモモの一生をたどった「モモちゃんとあかね」や、吉野町の原っぱでキジの母親がヘビやイタチと戦う様を描いた「はらっぱのおはなし」がある。

5番目は栗野岳である。3編ほどが書かれているが、残雪という利口な雁と猟師の大造爺さんの知恵比べと、堂々とした残雪に対する爺さんの敬意ある対処を描いた「大造爺さんと雁」や、〈栗野岳の主〉と呼ばれる大イノシシと狩人やその犬との戦いを力強く描いて、野性的な生命力や本能、先祖の記憶と学習能力を示した「栗野岳の主」といった名作が含まれている。

このほか、紫尾山、川内、種子島、奄美大島、日当山、悪石島、霧島、志布志、牧園、新川、などを舞台にした作品がそれぞれ1〜2編ずつ書かれている。これらの中には、志布志の四浦を舞台に、3頭の子供を連れた賢い大イノシシ＜カガミジシ＞と狩人源助じいとの戦いを描き、誇り高く死んでいくカガミジシとこれに敬意を示した源助じいの姿を浮き彫りにする傑作「カガミジシ」や、新川や川内を舞台に身勝手な人間たちに翻弄される川のカッパたちをユーモラスに描いた「ガラッパ大王」が含まれている。

こうしたことから、どうして椋が鹿児島を離れて、南洋に行くなり長野に帰るなりしなかったのかという謎を解くカギの一端が見えてくる。彼は、長野に勝るとも劣らず豊富な鹿児島の材料を余すことなく利用して作品を書いたといっても過言ではない。鹿児島には海があり、山があり、川があり、谷があり、森があり、島があり、実に多くの動物が住んでいる。わざわざ南洋まで行かなくとも、ジャック・ロンドンに憧れて南へ向かった椋の求めていたもののほとんどが、ここ鹿児島にあったのである。つまり、〈鹿児島の多様さ〉が椋をとらえて離さなかったということなのだ。

1.3.　鹿児島との深いつながり

椋は、作家として、鹿児島から多くの題材を得て多くの作品を書いただけではなく、他にも多くの仕事をした。こうした仕事のやりがいや、それによって生まれた多くの人々との出会いが椋を鹿児島にとどめたのではないだろうか。

まず、教師として椋は全力を尽くした。種子島の代用教員として、加治木高女の教師として、そして鹿児島女子短期大学の教授として一生懸命に教え、教え子たちに尊敬された。それは有名な作家だからということではなく、教師として優れていたからだ。戦時中に加治木高女の教え子たちと学徒動員で長崎に行った時の話などを聞くと、椋がいかに教師として必要な天分を有し、父親のような愛情を持って生徒たちに接していたかが理解できる。授業中に読み聞かせをしていたことなども、自分が恩師から学んだことを実践し、師に恩返しをしていたのだとも解釈できよう。したがって、卒業後も長きにわたって交流した教え子たちの存在が椋を鹿児島に引きとめた、という面があったに違いない。

次に、椋は県立図書館長、つまり官吏として、また読書運動家として、立派に仕事を成し遂げた。彼は県立図書館長を辞めてから最も多くの作品を書いているが、そのことからは就任中いかに職務に励んだかが知れる。しかしそれは実にユニークで、官僚的なところがなかった。予算獲得のために知事に「線香の火では風呂はわかせませんよ」と言ったという言葉は有名だし、いろいろな試みも行った。

その中で最も実践的で効果的であったのが〈農業文庫〉であり、その進化形の〈母と子の二十分読書〉の運動である。椋は、「感動は人生の窓を開く」というような考えを基本としてあちこちを講演して回り、この運動は1960年、昭和35年に鹿児島の全県で実施され、

全国に広がっていくのである。なお、このころ椋の指示によって作られた〈家庭読書サークル〉は50年以上たった現在も〈鹿児島読書サークル〉として健在であり、椋を慕う読書活動家や読み聞かせグループも今なお多い。椋の生んだ運動は鹿児島に根を張っているのである。

長男久保田喬彦によれば、椋は、教員による〈いじめ〉にも遭ったらしい。近くに身寄りのほとんどいない椋はさぞ心細かったに違いない。しかし一方で、加治木高女の山口校長らの励ましを受けつつ作品を書いたという経緯もあったわけで、鹿児島の人に支えられた面もあったのだ。椋はこう言っている。

> 私が大学を出てすぐ、南洋の島に渡るつもりだったのが、いつの間にか鹿児島に住み込んでしまった“きっかけ”については、先にふれた。要するに鹿児島に女医の姉がいたことが大きいが、それでも僕は鹿児島に永住することになるとは思っていなかった。第一、僕は最初の三年間というもの、大きな荷物のヒモをとかなかった。いつでも引っ越しができるように…という気持ちがあったからだ。しかし加治木高女で山口斉校長に会ってから鹿児島でやる気になった。この校長が私を認めてくれたからだ。人間、自分を認めてくれる人がいることほどすばらしいことはない。
>
> それに、鹿児島は人情がいいねえ。…そんなふうにしてギリギリのところで生きてきたのだから、鹿児島の人情はよそとは違う。ひと言でいうと、縁でつながったものは、なんとか助けねばならぬ―といった濃密な人情だ。
>
> ―（中略）―
>
> 鹿児島に住み始めたころ、鹿児島から転出する機会がなかったわけじゃない。新潟や桐生から先生の口の誘いがあった。ついで山口県の柳井の中学校からのは、かなりしつこかった。…
>
> 僕としては、とにかく移りたいとは思わなかった。それは結局、鹿児島の人たちと深い付き合いができ、ここでなら飢え死にすることはないと思ったからだ（本村 1998：54-56）

1934年（昭和9年）には、その頼りにしていた姉の清志が亡くなるというショックが椋を襲った。けれど、それでも彼は鹿児島を離れなかった。それからも、種子島から加治木へと移動してきた椋は、さらに鹿児島市の長田町に移り住んで、鹿児島を終の棲家と決め、最後は市内の南風病院で亡くなった。久保田喬彦によると、椋は加治木を大変気に入っていたそうだ。また、来鹿前に書いていた詩は厭世的だったが鹿児島に来てからは楽観的な作風に変わった、という事実もある。椋は鹿児島の風土が気に入り、鹿児島の温かさやおおらかさが彼の持前の〈向日性〉を促進したのだろう。

このように、椋は鹿児島の環境に溶け込み、多くの仕事に関わるうちに多くの人ときずなを作り、すでに引用したように、鹿児島を第二のふるさとと感じるようになっていったのだろう。だから彼は鹿児島に永住したのである。死が近づいたとき、椋は「松風よ吹け！」と言ったそうである。確かに彼はその瞬間には長野の松林を歩いていたかもしれないが、ロンドンを追いかけて鹿児島に来たことや鹿児島に最後まで暮らしたことには満足してい

て、いささかの悔いもなかったことだろう。

1.4.　国際的評価・現代的評価を要求する椋文学

鹿児島に永住して鹿児島を舞台にした多くの作品を書いて、日本を代表する児童文学者、動物作家となった椋鳩十だが、そのように呼ばれることを必ずしもよしとはしなかった。ジャック・ロンドンが動物作家と呼ばれるのに比べれば、椋の方がよほど動物作家と呼ばれるにふさわしいが、ロンドンが再評価されつつあるように、椋文学もまた再評価され、今以上の国際的評価・現代的評価を受けてもよいように思われる。

鹿児島の多様で豊かな自然は、ロンドンや長野から受け継いだ自然と共に生きるという姿勢、すなわち、現代流に言うなら＜エコロジー＞や＜共生＞の意識をさらに突き動かし、発展させたと言えよう。後の章で詳しく述べるが、椋の文学は、世界的に見てもかなり早い時期に＜環境文学作品＞を発表したし、ロンドンにもできなかった＜人間の原始化＞、つまり、人間の側から自然に働きかける形の共生志向を描くことに成功した。

このような業績は、もっと国際的に認知されてもいいように思うが、まだあまり知られているとは言えない。また、今まさに環境問題の解決が叫ばれているときに、椋の多くの作品は現代的な読み方を我々に迫っていると言えよう。今こそ椋文学は読まれなければならないのかもしれない。

2.　ジャック・ロンドンと薩摩文人
――椋鳩十の動物小説へのロンドンの影響

2.1.　椋鳩十の軌跡

椋鳩十が鹿児島に来た経緯については前章で述べたが、1930年（昭和5年）5月に種子島の中種子高等小学校代用教員となった彼は、さらに8月より鹿児島県の町立加治木高等女学校教師に転じ、以後17年間勤務することになるが、彼はこの頃から主な作品を書き始めるのである。

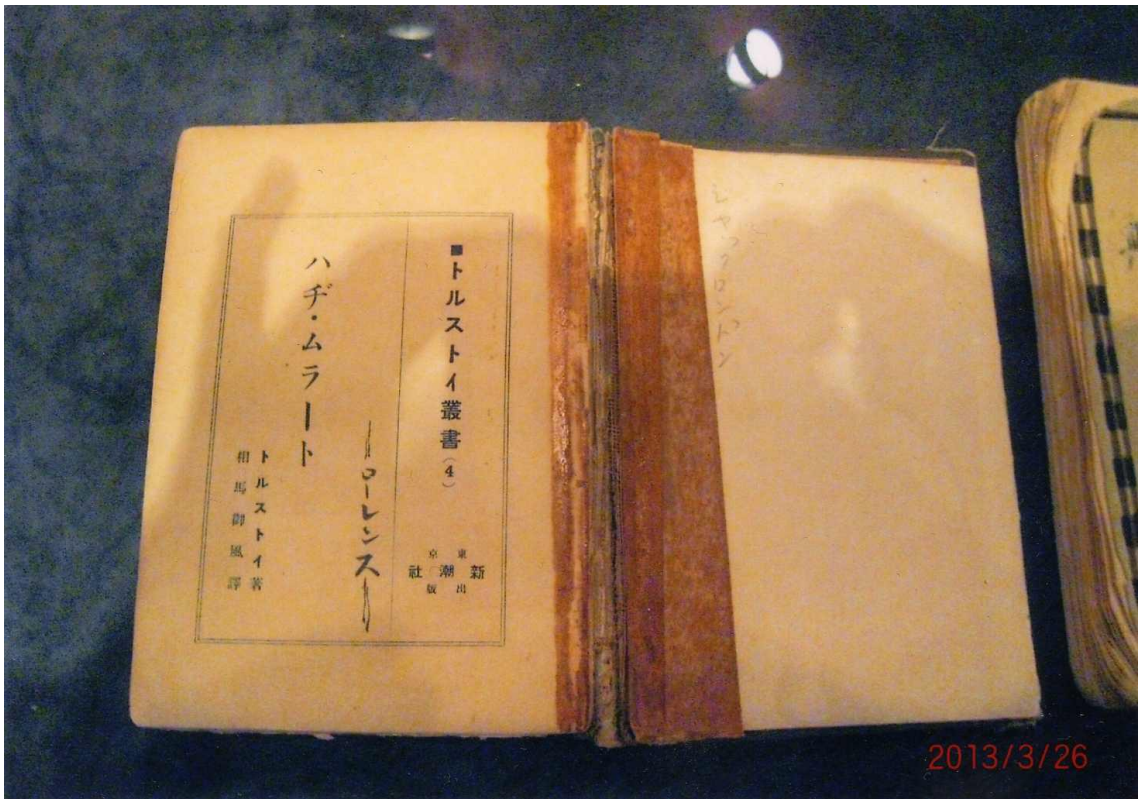
その後椋は、終戦後の1947年（昭和22年）11月に鹿児島県立図書館長となり、なおも作品を発表し続ける一方で、1955年（昭和30年）には第6回南日本文化賞（芸術文化部門）を受賞、さらに1960年（昭和35年）には「母と子の20分間読書」を提唱し、県下のみならず全国的にも大きな反響を呼んだ。1964年（昭和39年）に『孤島の野犬』（1963）でサンケイ児童出版文化賞及び国際アンデルセン賞（国内賞）を受けたあと、1966年（昭和41年）に鹿児島県立図書館長を定年退職し、翌1967年（昭和42年）より鹿児島女子短期大学教授となる。さらに、第1回赤い鳥文学賞、児童福祉文化奨励賞、学校図書館賞、鹿児島県民表彰、文部大臣賞、第7回博報堂賞、児童文化功労者表彰、第33回芸術選奨文部大臣賞などを次々と受けた椋は、その間、全集や選集を次々に刊行し完結していった。なかでも2期にわたって刊行された『椋鳩十の本』全34巻＋補巻2巻は、椋文学の全貌を明らかにするものと

なっている。

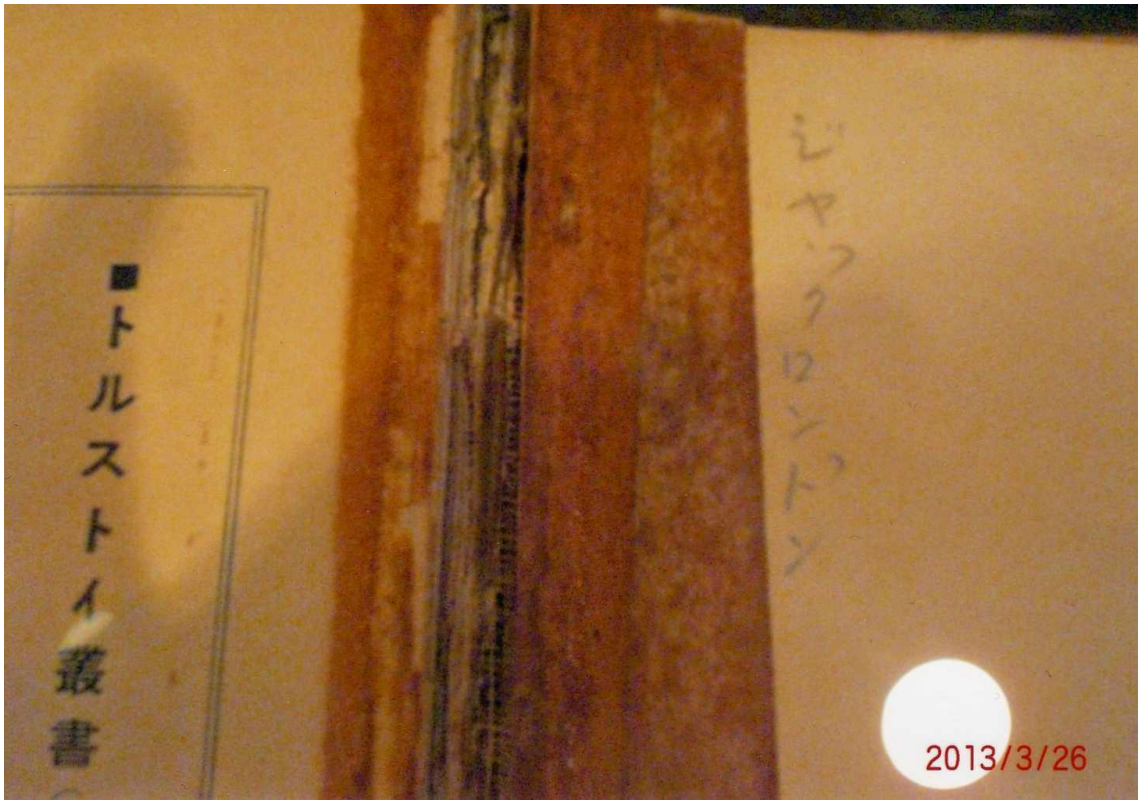
1987年（昭和62年）12月27日、椋鳩十は肺炎のため死去、享年82歳であった。[1)]

2.2.　ロンドンとの出会い

ロンドンより29歳年下の椋とロンドンの出会いは青少年期であった。前章でも触れたが、中田幸子も言っているように、中学時代の恩師佐々木八郎か正木ひろしの紹介で椋はロンドンを読むようになったと思われる。（中田1991：351）特に、主にアメリカ文学を紹介してくれたのは正木であったから、ロンドンを紹介したのも正木であった可能性の方が高い。椋は、「自伝的対談(1)」の中で「佐々木八郎先生（…）正木ひろし先生に出会わなかったら、僕は他の世界に行っていたかも知れない」（椋・小宮山1982(1)：235）と言っているほどの影響を二人から受けているが、正木のエマソン「自然論」の講義に感激し、佐々木のトルストイ『ハヂ・ムラート』、徳富蘆花『自然と人生』、国木田独歩『武蔵野』などの読み聞かせに聞き惚れたという（このことが、読書運動を提唱する原点になったようだ）。（椋・小宮山1982(2)：262）また、椋自身、「それに『白い牙　White Fang』(1906）なんて言うのはすばらしい作品ですから。それらを学生時代に読んで、非常に打たれました」（椋・小宮山　(1982)(1)：217）と言っている。さらに、鹿児島県姶良郡加治木町にある椋鳩十文学記念館内に展示してある、椋が学生時代に愛読した原本とされる『ハヂ・ムラート』の中表紙の隣の白頁には、椋が書いたと思われる〈ジャック・ロンドン〉という文字が見られる。それほど引き付けられていたのだろう。したがって、このころロンドンに出



椋家提供。椋鳩十文学記念館所蔵



椋家提供。椋鳩十文学記念館所蔵

会ったことはほぼ間違いないと思われるが、中田によれば、そのころ椋が読んだロンドンの作品には『野性の呼び声』『白い牙』『奈落の人々』『強者の力』『南海物語』などがあるという。（中田1991：351）確かに、文学記念館内に復元されている彼の書斎の書棚には、『野性の呼び声』や『白い牙』などが複数並んでいる。椋自身が先ほどの部分に続いて「こんなすばらしい物語があるんだろうかと驚いちゃって、それから僕はジャック・ロンドンの作品を読みふけった。するとロンドンは、いわゆる社会派的な作品もたくさん書いているし、秀れた短編小説も少なくない」（椋・小宮山1982(1)：217）と述べていることや、「私の青年時代」という講演の中で「大学時代もひきつづきジャック・ロンドンのものを読み、その影響下にあった」（椋1989：207-208）と言っていることや、『南海物語』などは一般的にロンドンの主要作品には含まれないことなどを考えると、かなりの作品（翻訳）を読んでいた可能性もある。

ところで椋は、前章で紹介したように、法政大学を卒業しても故郷長野には戻らずに、遙か南の鹿児島にまで行って種子島の高等小学校の代用教員になる。この間の事情については「自伝的対談」に椋自身の言葉で語られているが、このことにはジャック・ロンドンが深く関わっているのである。

つまり、椋を鹿児島に引き寄せたものはロンドンの『南海物語』（のロマン）（中田1991：352）と姉の存在だったのだ。椋は、没後25年以上が経過した現在もなお、鹿児島を代表する作家の筆頭におり、作品は広く県民に（もちろん国民にも）、とりわけ子供や児童文学

愛好家・研究家に愛読され、鹿児島を発信地とする椋鳩十文学賞というものも創設され、また、彼の読書運動は様々な形で全県下に根を張っている。たとえば、筆者が講師を続けている〈鹿児島読書サークル〉も〈母と子の20分間読書運動〉に伴って生まれて以来50年以上活動を続けている。鹿児島の作家椋鳩十を生み出したのが、まさに、あまりにアメリカ的な作家ジャック・ロンドンであったことは興味深いし、また奇縁でもある。

なお、中田によれば、椋は「けれど、おかしなもので、海に来て山を描くことになってしまいました。これも、その底の方には、若き日のジャック・ロンドンの感激が生きていることはたしかです」と述べているし（中田1991：352）、前章で述べたように講演の中でもわざわざロンドンと自分の縁に触れており、また、彼の長男の久保田喬彦氏によれば、氏が小学生の頃、客が来るとしょっちゅう「ジャック・ロンドンの『野性の叫び』あれはいいなあ。私の文学の原点だ。あんな作家になりたくて鹿児島にやって来た。君も読んでおけよ」（『父椋鳩十物語』）（久保田1997：182）と薦めていたという。こうしたエピソードは、彼がいかにロンドンに惹かれていたかを雄弁に物語っている。

2.3.　椋文学を形作った様々なもの・ひと

椋は、ジャック・ロンドンから強い影響を受けて作品を書いた。しかし、椋が影響を受けたのはもちろんロンドンだけではないし、彼の思考の傾向や文体も様々な出会いから生み出されている。たとえば、椋の文体のルーツは、彼自身の言葉によれば、囲炉裏で話をしてくれた祖母の話しぶりであった。（椋・小宮山1982(1)：230）また、椋が不偏不党で比較的自由なものの考え方をし、彼の時代の知識人の間でいわば流行であったマルクス主義の考えに距離を置いたのは、一つには生まれ育った環境によるのであり、一つには出会った恩師の影響なのである。少年時代の椋の周りには、「アメリカに向かってずいぶん窓を開いていた」（椋・小宮山1982(1)：226）信州の、「野性的で素朴な気質」（椋・小宮山1982(1)：227）と「見渡す限り全部山」（椋・小宮山1982(1)：223）というような自然があった。すなわち、椋は少年期を「土俗的なものに包まれて」（椋・小宮山1983(3)：262）育ったのである。また、椋に言わせれば、すでに触れた恩師正木ひろしは「絶対的な自由人」（椋・小宮山(1)1982：225）であり、彼の詩の先生である佐藤惣之助は「あの人こそ自由な詩人」（椋・小宮山1982(1)：224）、そして、法政大学の豊島与志雄、森田草平の両教授は「本当の自由人」（椋・小宮山1982(1)：225）であった。

椋に影響を与えた作家たちも様々である。彼は、ツルゲーネフやエマソンから自然に対する見方を学び、父の蔵書から影響を受けて考え始めた〈生と死〉の問題について、ヨハンナ・スピリの『アルプスの少女ハイジ』を読んで一定の解答を得るとともに、文学への窓を開かれ[4]、スペインのバローハやヒメネスから暖かくて剛直な表現を吸収し（椋・小宮山1982(2)：273-275）、また、ゴーゴリの『ディカーニカ近郷夜話』(1831)との出会いが、椋が伝承譚を書くきっかけになったのである。（椋・小宮山1982(2)：277）なお、椋が外国文学の中でも――彼が中学生の頃にはまだマイナーであった――アメリカ文学に強い関心をもっていたことは、「自伝的対談」やエッセイ「なつかしい先生」などの中に、エマソンをはじめホイットマンやソローやマーク・トウェインなどの名が繰り返し出てくることからよくわかる。

さて、その椋が、アメリカ文学の中でももっとも影響を受け、自分のライバルだとまで言い、自然や動物、そして人間について強い刺激を受け続けた（椋・小宮山1983(3)：277-278）作家が、ジャック・ロンドンである。すでに名前の出た戸川幸夫と椋とロンドンの共通点は、一言で言えば、中田の言うように確かに「ダーウィニズム」だろう。（中田1991：363）また、椋自身のロンドンに関する言葉や、先輩作家の作品を読んだことで影響を受け〈新たなる自由〉〈新たなるロマンの世界〉を求めて居を移していったという二人の共通点を見ると、やはり中田が言っているように、二人は「気質的に似ている」（中田1991：353）と言えよう。

では、二人は具体的にはどこが似ており、また椋のどこにロンドンの影響が見られ、二人のどこが似ていないのであろう。次にまず、椋の動物文学（児童文学とクロスする）のいくつかの作品を挙げる中で、それらのことについて考えてみたい。

2.4.　動物作家としての共通点と相違

まずもっとも単純に気づかされることは、椋の作品の中に、おそらくロンドンの作品を意識して付けられたであろうと思われるタイトルや主人公名がいくつも見られることである。たとえば、ストーリーにはほとんど共通点のない「野性の叫び声」は、いかにも『野性の呼び声』を思わせるし、「南島のシシ白耳」や『野性の谷間』も、ロンドンに惹かれる気持ちを表しているように感じられる。また、『山の大将』の主人公の名は「黒い星」であり、「南島のシシ白耳」の主人公は、もちろん「白耳」である。そこには、ロンドンの『白い牙』を高く評価する椋の心情（椋・小宮山1982：217）が窺えないだろうか。

さて、ストーリーやプロットが二人の作品の間で似ている、あるいは共通している作品となると、これはざっと見ただけで十指に余る。たとえば、「王者の座」は、孤島に置き去りにされた軍用犬（シェパード）のナチが、仲間が野犬に殺されていく中で一頭だけ生き残り、逆に野犬の中に飛び込んで王位に就き、結末では他の犬にそれを奪われるという話だが、ナチが王位に就くまでのストーリーは『野性の呼び声』のそれによく似ている。「アルプスの猛犬」において、主人公（山犬）の灰坊が、山犬に囲まれて戦っている運平や自分の飼い主の三吉のために重傷を負いながら戦う場面は、『白い牙』の第1部第3章に出てくる場面や、ソーントンのために命を懸けて頑張る『野性の呼び声』の主人公バックや、スコット家のために侵入者と戦って死にかける『白い牙』の主人公ホワイト・ファングの姿を容易に思い起こさせる。また、「犬塚」では、主人公のアカ（雑種）が野良犬（子犬）から主人思いの優れたイノシシ犬となり、主人のために命まで捨てるのだが、これも何やらバックのイメージと重なるし、「名犬」に出てくる主人公の猟犬アカも、ホワイト・ファングのように、飼い主には従うもののこれに媚びたりはしない。

さらに「山に帰る」の主人公の飼い猿は、始めから身体が大きいという好条件を持ってはいたものの、偶然鎖が杭から外れたので山奥へと進み、引きずっているこの鎖を武器にして野生の猿の群と戦い、その仲間となった上に仲間に対する愛のようなものも身につけて猿の群の頭領となっていく。これもまた、バックのパターンに酷似している。このように見てくると、椋がいかに『野性の呼び声』や『白い牙』の世界に憧れていて、そういう世界を描きたいと願ったかがよくわかる。

しかし、そうしたストーリーや個々の場面の類似や共通性をめぐる最も重要な点は、椋がロンドンの主要なテーマを受け継いでこれをまた自らのメインテーマに据えているということである。そのテーマとは、〈野性〉や〈本能〉や、そこから生まれる〈生命力〉への強い関心であり、それらの重視である。つまり、今紹介したようなストーリーの上での共通点や類似点とは、実は、二人の中に共通して流れる〈生き残りの論理〉とでもいうようなもの、すなわち、二人が共通して持っている《自然の中で自然と共に生きようとする者は、〈野性〉や〈本能〉の力によって先祖の記憶を取り戻し、それを活かして学習しながら〈生命力〉を得て生き抜かねばならず、さらに愛情をも獲得することによって王者にも頭領にもなり得るのだという考え方、あるいは思考傾向》を示しているに他ならない。

したがって、部分的にこのことを見ようとするならば、それは椋の多くの作品に散在、あるいは偏在しているのである。そういうファクター、あるいはポイントは、まとめると〈（本能としての）母性愛・同族愛・親子愛〉〈人と動物の愛の交流〉〈先祖の記憶〉〈人を含むあらゆる動物が先天的に持っている野性・本能・生命力〉といったふうになるだろう。たとえば、母性愛や親子愛については、すぐにやはり10作品以上を挙げることができる。こうしたテーマは椋の比較的初期の作品に多いが、「佐々木さんの話」に出てくる、自らの身を投じることによって大ワシから我が子を助けるという悲しくも美しい猿の親子愛や、ひなを守るためには決してめげない片脚の母雀を描いた「片脚の母雀」、我が身の危険も顧みず子熊を助けるために滝に飛び込む「月の輪熊」の母熊などが代表的な例であろう。

人と動物の交流について言えば、これは椋の得意とする分野であり、またライフ・ワークでもあるように思われる。したがって、このテーマを持つ作品もまた十指に余るのであり、それらは椋の創作人生の全体にわたってみることができる。たとえば、悲しくも感動的な『マヤの一生』、忠犬物語である「黒ものがたり」や「犬塚」、熊と人との交流を描いた『山の大将』や「山の太郎熊」、狐の人間に対する恩返しを描いた「金色の足跡」などが挙げられよう。先祖の記憶という問題は、大イノシシが先祖から受け継いだ種の知恵とでもいうようなものを活かして、猟師と猟犬から家族を守り、また自らも逃げ通すという「栗野岳の主」や、先祖からの知恵を十二分に利用して、安全に群れを率いていくイノシシを描いた「南島のシシ白耳」に描き込まれている。

さらに、椋にとって、またロンドンにとっても最も重要な創作上のテーマだと思われる野性や生命力については、大半の作品に現れていると言っても過言ではない。たとえば、弱肉強食の環境の中で本能をよみがえらせていく「王者の座」のナチ、大ワシを突き殺して悠然と立ち去る大ジカの姿を一種の美を伴って描き、野生動物の闘争をリアルに再現した「野獣の島」、「佐々木さんの話」の中に描かれる猿の生態とその弱肉強食の世界、『山の大将』の黒い星がハヤブサの頭をたたき、その目をつぶすことによって示される野性の力、野生の狐の知恵と底力を描いた「金色の足跡」、蛇と闘ってこれを殺してしまう雀を描くことで、野性の世界の闘争の厳しさと、小さな鳥にも底力や種を守るための不屈さがあることを示した「片脚の母雀」、滝に飛び込んでもなお起き上がる母熊の野性的生命力を描いた「月の輪熊」、先祖の記憶を本能として受け継ぎ、それにより人間や犬から身を守ろうとするイノシシの姿を、流れるようなストーリーの中で力強く描いた「栗野岳の主」、

ガチョウの水鳥としての本能と生命力が、人間である三郎の生命力を呼び覚ましていく「三郎と白い鵞鳥」、先祖の知恵や学習を活かして強く生き抜く痛快なイノシシの物語「南島のシシ白耳」など、挙げればきりがない。

ロンドンから受け継いだと見られるこうした様々な要素、とりわけ野性の生命力と愛の交流というテーマは、椋がロンドンと同様に、いかに野性の力に強い関心を持ち、そのすばらしさ、激しさ、必要性を示し、愛を持って動物たちと共存する道を示したかを物語っている。しかし、このテーマは椋の場合、さらに、時として一歩進んだ問題意識と結びつき、椋独自の世界や問題性を描き出すことになっていると思われる。すなわち、野性的な生命力と愛の重視というテーマが、椋の正義感、反骨精神、批判精神といったものや、動物との平等意識や楽天主義、さらには日本的な〈和〉の精神などと相まって、〈自然との共生〉という現代的なテーマを生み出し、それが椋文学の独自性となっていると思われる。

このことは、椋流の社会意識として作品に投影されており、たとえば、感動的な『マヤの一生』に見られる権力に対する反骨精神、開発に追い立てられていく猿たちを描き、環境保護のテーマを明確にした「野性の叫び声」、生き物を愛し命を大切に思う子供たちを通して命の大切さを訴えた「二人の兄弟と五位鷺」、本当の強さとは単に力が強いだけではないことを示唆した「まことの強さ」、西表島の手つかずの原始的環境を紹介して自然との共生の意味を語りかけるエッセイ「ヤマネコと水牛の島」、ゴミ問題に正面から取り組んだ「におい山脈」、架空の生き物の話ながら、身勝手な人間たちに翻弄される川のカッパたちをユーモラスに描いた「ガラッパ大王」などという形で表されているのである。

さて、では椋とロンドンの似ていないところ、あるいは相違点とはどんな部分で、違っていることにどんな意味があるのだろうか。椋は自由人であり、また自身でもそうあろうとしたため、中田も言っているように、ロンドンの社会主義的な部分には無関心であったことは事実だろうが（中田1991：353）、上記したことでもわかるように、それは椋に社会的関心がなかったということではなく、椋の社会意識がロンドンほどイデオロギー的ではなかったということになろう。また、中田も引用しているように、小宮山量平は、「自伝的対談(3)」の中で、、ロンドンはペシミズムの作家であったが、椋の作品は楽天主義的で解放感があって明るいと述べているが（椋・小宮山1983：276）、これも大枠において正しい。小宮山はさらに、椋の動物文学は擬人化したり人語をしゃべらせたりせず、あくまでも自然法則を守る、と指摘している（椋・小宮山1983：283）が、これもまたいくつかの例外を除けばほぼ正しいと言えよう。ただ、このことは、椋がロンドンより動物により近い位置にいたということを意味しているにすぎない。なぜなら、ロンドンがバックをある程度故意に擬人化したという解釈は無理ではないし、ロンドンの動物文学は50冊・数百編にのぼる彼の作品の中ではごく一部にすぎないからである。

だから、椋の動物文学や児童文学とロンドン文学の相違を見るときに重要なことは、その違いが椋文学の独自性の存在を証明していると言えることである。たとえば、中田は、椋の『野性の谷間』の主人公源次が犬とともに野性の谷間に姿を消してしまうという例を挙げて、ロンドンの描く人間と犬の関係はあくまでも主従であるが、椋の場合、人間と動物は対等な関係にあると指摘しているが（中田1991：358）、これは、ロンドンが、人間も含め動物を取り巻く環境がいかに厳しいものか、そして、弱肉強食がいかに容赦ないもの

かを描くことに重点を置き、人と犬との暖かい交流の方には比較的大きな意味を持たせなかったのに対して、椋が、弱肉強食の野性の激しい闘争をリアルに描きつつも、それでも、あるいは、それだからこそ母性愛や親子愛がこの弱肉強食のルールをひっくり返す姿や、人が動物に手心を加える場面をいくつも描き、ロンドンの何倍もの回数、何倍ものスペースを割いて、人と動物との愛の交流を描いたこと、つまり、椋が自然との共生の方にロンドンより重点を置いていたことを意味しているのだ。この違いは、もちろん、二人が生まれ育った経済的環境や時代の違いにも大きく起因していることだろう。

注

1) 椋鳩十文学記念館発行の『椋鳩十の略歴』(1990)を参照した。
2) 『椋鳩十の生涯』（椋鳩十文学記念館、1990）p.6.も参照のこと。
3) 筆者は久保田氏自身からも同様のことを伺ったことがある。
4) 椋は「この一冊の本とのめぐりあいが、僕の文学への窓を最初に開いてくれたんだ」（椋・小宮山1982(2)：271）と言っている。

3. 椋の山窩小説群と猟師物語『野性の谷間』へのロンドンの影響

3.1. 山窩小説の書かれた経緯と『南海物語』

動物文学作家や児童文学作家として知られる椋鳩十は、動物文学や児童文学ばかり書いていたのではない。彼の出発点は詩であるが、ロンドンもまた数多くの詩を残していることは興味深い。とりわけ、椋が大人向けの純文学を書いていたことは注目されねばならない。それがいわゆる山窩小説や猟師物語であるが、これらは，ロンドン文学と椋文学を比較する際には特に重要である。なぜなら、山窩小説や猟師物語、特に山窩小説は椋が切り開いた新しい文学形態だからだ。

山窩とは、『岩波国語辞典』によると「山奥や川原（かわら）などに、定住しないで自然人のような生活をしている漂泊民。竹細工・狩猟を業とする」（西尾ほか1980：431）という人々のことで、ロマ（いわゆるジプシー）のような人々であるらしい。いわゆる「山人＝先住民説」を主張した民俗学者の柳田國男は、「山の人生」の中でこう言っている。

> サンカと称する者の生活については、永い間にいろいろな話を聴いている。我々平地の住民とのいちばん大きな相違は、穀物、果樹、家畜を当てにしておらぬ点、次には定まった場処に家のないという点であるかと思う。山野自然の産物を利用する技術が事のほか発達していたようであるが、その多くは話としても我々には伝わっておらぬ。
>
> 冬になると暖かい海辺の砂浜などに出てくるのから察すると、彼等の夏の住居は山の中らしい。伊豆へは奥州から、遠州へは信濃から、伊勢の海岸へは飛騨の奥から、寒い

季節にばかり出て来るということも聴いたが、サンカの社会には特別の交通路があって、渓の中腹や林の片端、堤の外などの人に逢わぬ処を縫うているゆえに、移動の跡が明らかでないのである。（柳田1989：84-85）

つまり、山窩は、山の地理に習熟し原始的でたくましい生活をしている人々のようである。柳田はまたこうも言っている。

仲間から出て常人に交わる者、ことに素性と内情とを談ることをはなはだしく悪むが、外から紛れて来てサンカの群に投ずる常人は次第に多いようである。そうでなくとも人に問われると、遠い国郡を名乗るのが普通で、その身の上話から真の身元を知ることはむつかしい。（柳田1989：85-86）

山窩とは必ずしも山の先住民ばかりではないらしい。

椋によれば山窩は俗に〈お山〉とか〈ポンスケさん〉などと呼ばれたが、エッセイ「山窩の思い出」の中で彼は、実際に山窩を見たことがあると言っている。（椋1939：273）しかし一方で椋は別のエッセイ「山窩物の題材」の中で、

…私には、山窩は地方によって何と呼ぶとか、或は山窩の起源は何であるかと云うことは、余り興味がありません。

只、山窩は、ひょうひょうと山から山を流れあるいた民であってくれればよいのであります。

…私は、山間谿谷の部落に入り込んでは、彼等についての伝説的物語をできるだけ多く聞き集めて居ります。（椋1936：259）

とも述べていて、山窩は、彼にとって歴史上の人物である前に、創作上必要な人物だったことが分かる。つまり山窩小説（山窩物語）とは、椋が、日本オオカミのまだ生きていた明治の初めくらいの頃の伝説・伝承をもとに書いた「山の放浪民の物語」（椋1993：7）なのである。

ところで、椋が山窩小説を書こうとした動機や書き続けた直接的な理由は、またも鹿児島なのである。ロンドンの短編集『南海物語』に憧れて南洋の物語を書こうと鹿児島までやってきた椋は、郷愁に胸を痛め、山を恋う思いがふつふつと湧いてきて、物語の題材に山窩を選んだのであり（椋1936：257）、また、窮屈な教員生活を送る中で、山窩の生活について考え物語の題材として書いていくことは彼にとってオアシス、即ち、いわゆるストレス解消でもあったのだ。（椋1936：258-259）こうしてみると、ロンドンが椋に山窩小説を書かせた言ってもあながち無理とは言えないであろう。

だが、椋が山窩小説を書いたのはロンドンだけの影響だということはできない。すでに述べたように、椋は様々な作家の影響を受けて作品を書いており、特にスペインの作家ピーオ・バローハの描くバスクの民に感動して「僕の山窩ってのは、バスクとオーバーラップしているんだ」（椋1982(2)：274）と言ったそうだし、鹿児島にきてから山窩小説を書

く時も、バローハの『バスク族牧歌調』をまねして自分の本に『山窩調(さんかちょう)』とタイトルをつけたと述べている。（椋1982(2)：276）しかし、ロンドンもまた、椋に山窩小説を書かせるのに大きな影響力を与えたであろうことは、いくつかの点から容易に想像できる。

椋が山窩小説を書いたのは、昭和8年（1933年）から16年（1941年）まで、そして戦後の昭和21年（1946年）から25年（1950年）までのようである。しかし、全作品の半分以上は昭和8年から9年の間に集中して書かれているのであり、これは椋が鹿児島にきて3～4年後の加治木高等女学校の教師時代（28～29歳）のことであって、上で触れたことにも符合するのである。一方，ジャック・ロンドンの短編集『南海物語』（*South Sea Tales*）の初訳は、大正14年（1925年）に志摩三五郎の手によって出されていて、4年後の昭和4年（1929年）にも同一内容の訳が別のタイトルで出版されている。椋がこの『南海物語』 に魅せられて鹿児島に渡ったのが昭和5年（1930年）のことだから、法政大学在学中の1925年から1929年までの間に、すなわち鹿児島にやってきて山窩小説を書き始める直前に、彼がこれらのいずれかの訳（中身は志摩の同じ訳だが）でこの短編小説集を読んだことは間違いないだろう。そうすると、『南海物語』 を読んだ時の感動とその影響が椋の山窩小説の多くにそのまま反映したと見ることはごく自然なことである。

ちなみに、『南海物語』の邦訳については、志摩三五郎訳以降現在まで2回出されているが、実は志摩訳は「マッコイの子孫」を欠いているので全訳ではなく、昭和16年（1941年）の村上啓夫による訳が全編初訳である。なお、大正14年と昭和4年に２回刊行されている志摩訳は、それぞれ『南海物語』『南洋放浪記』というタイトルが付けられ、村上訳は『南海物語』というタイトルで出版されている。椋は、エッセイその他の中でこれを『南洋物語』と呼んだり『南海物語』と言ったりしているが、これらのタイトル訳のどれも間違いとは言えないものの、原題（*South Sea Tales*）を正確に訳せば、『南海物語』がベストだと言えよう。

ロンドンの短編集『南海物語』 は、彼が1907年（明治40年）4月から1909年（明治42年）7月までの間、自作のスナーク号によってハワイ、マーケサス諸島、タヒチ、サモア、フィジー、ソロモン、オーストラリアと航海した時に書かれた作品であり、1911年（明治44年）の10月にマクミラン社より出版されている。この作品は、南太平洋の島々の自然と風土を背景にして、南洋の先住民たち（メラネシア人やポリネシア人）とこれを支配しようとする白人たちの関わりや戦いを描いた短編8編（「マピュヒの家」「鯨の歯」「マウキ」「ヤァ！ヤァ！ヤァ！」「異教徒」「恐ろしいソロモン諸島」「必然の白人」「マッコイの子孫」）によってできている。そこには、この地にしかないエキゾチズムとバーバリズムがあふれていて、人種的偏見も見られるものの、人間の欲と生命力が渦巻き躍動してストーリーを盛り上げ、ロマンあふれる新鮮な作品となっている。椋は、この作品から受けた感動について「ヨーロッパに征服された土人たちのエキゾチックなロマンの世界。それにバーバリズム。これに魅せられた」（たかし1983：169）と言ったそうだし、「白く光る雪の夢」というエッセイの中でも、

これは、南洋の海を背景にした素朴な、まことに素朴な人たちのロマンに満ちた物語

であった。

この物語は、未知の世界であった。胸とどろかすロマンが、いっぱいに詰まっている世界であった。ほんとに、強く、体もしびれるほど強くこの物語は、私を感動させた。（椋1989：87）

と述べている。

彼は、こういうロンドン作品のようなものを日本人による南洋物語として書きたいと思って、鹿児島まで辿りついたのである。かくして椋は、海洋小説ならぬ山窩小説を書いた。だから彼の山窩小説は、〈まことに素朴な人たちの、ロマンとバーバリズムに満ちた物語〉となっているのである。椋は、前述したように、

けれど、おかしなもので、海に来て山を描くことになってしまいました。これも、底の方には、若き日のジャック・ロンドンの感激が生きていることはたしかです。（中田1991：352）

と回想しているが、彼の文学的才能が、『南海物語』中の「ヤァ！ヤァ！ヤァ！」や「マピュヒの家」や「マウキ」のストーリー展開の巧みさや、友情物語「異教徒」の感動、「マピュヒの家」や「必然の白人」のスケールの大きさとダイナミズム、そして「鯨の歯」や「恐ろしいソロモン諸島」や「マッコイの子孫」のスリルとサスペンスなどによって大いに刺激されたであろう事は容易に想像できる。

たとえば、「マピュヒの家」の台風の描写は大変リアルかつダイナミックで、自然の前では人間の命などいかにもろいものであるかが示されているが、椋の「鉄砲みず」に描かれる〈自然の脅威〉と〈死と隣り合わせの山の民の厳しい生活〉は、不思議なまでに同じような感慨を起こさせる。また、椋の「山犬」のあっと驚く結末も、オー・ヘンリーばりのおちをつけるのが得意だったロンドンの「ヤァ！ヤァ！ヤァ！」を始めとするいくつかの名短編を想起させるし、「雲の歌」や「敵」に見られる闘争の活劇は、「ヤァ！ヤァ！ヤァ！」や「恐ろしいソロモン諸島」や「必然の白人」の激しい銃撃の西部劇のような活劇に通じるものがありそうだ。。そういえば椋の作品、とりわけ山窩小説には、まさに〈未知の世界〉や〈ロマンがいっぱいに詰まっている世界〉が自在に描かれているではないか。

3.2.　椋の山窩小説とロンドン文学

さて、山窩小説をめぐって、ロンドンとの共通点や椋の特徴について述べてみよう。まず、動物文学の時と同じように、椋の山窩小説にはいかにもロンドンを思わせるような野性、本能、原始的生命力、人間の動物性・獣性が、ここかしこに描かれている。そういう作品を挙げるならば、「朽木」「山の鮫」「黄金の秋」「猛禽類」「火」「炎飆（なつあらし）」「驟雨」「山の猛者」など枚挙に暇がないし、それはすべての山窩小説に現れていると言っても過言ではない。特に、「朽木」における、死に瀕した婆さんの動物的な生命力や、「猛禽類」に出てくる、瞳の奥に「猛禽類の目玉の光みたいなもの」（椋1993：84）をもっている婆さんの崖に突き落とされても這い上がってくる原始的生命力は驚くべ

きものだが、獣性という意味では、自分が飼ってかわいがっていた四十雀の死体を焼いて食べてしまう「四十雀(しじゅうから)」の少女や、かじり取られた自分の腕の肉を焼いて食べてしまう「炎飆(えんぴょう)（なつあらし）」の岩公や、狼と思われる獣と戦ってその喉をかき切ってしまう「無精な男」の重病の男なども見逃せない。これらの人物はロンドンの描くアラスカ先住民（イヌイットなど）や南洋の人々、そして『海の狼』のラーセン船長、『アダム以前』の原始人達につながっていると言わざるを得ないだろう。

椋の場合、野性や原始的生命力は、ロンドンの場合と少し違って、しばしば女性のたくましさ、したたかさ、母性的生命力として、あるいは性欲・情欲の獣的激しさ、おおらかさとして描かれている。例えば、女性特有の生命力は、「黄金の秋」「山のトンビ」「霜の花」「四十雀(しじゅうから)」「膝の上」「若い月」などに表れているが、特に、自分一人で逆子への対処をしへその緒を切るという、「霜の花」の野性的な出産シーンは圧巻である。

厳しい自然――天変地異や野獣たち――を描き、その中で常に死と隣り合わせの厳しい生活や人生を送る山の民――山窩――を描くという椋の構図もまた、ロンドンのアラスカものや南海ものの構図――極北の自然の中で生きる先住民やゴールドラッシャー達を描くという――構図に重なるであろう。そういう構図は「夕立」「鉄砲みず」「山の犬」「山の猛者(えらもの)」などにみられるが、「鉄砲みず」の、鉄砲みずがあっという間に山窩の群れのほとんどを押し流してしまう場面や、「山犬」の、人なつっこいと思っていた狼に〈タケ〉が一撃で首を跳ね飛ばされる場面などが印象深い。

また、ロンドン流の進化論的な適者生存や弱肉強食の論理も、椋の山窩小説の随所で展開されるのである。適者生存については、「自分の力で自分を養う。これが吾々山の民の不文律」（「盲目の母」）（椋1993：28）ということがあるから「吾々は吾々の法則に従って、足腰の立たなくなったものはその場において行くのだ」（「打たれた鷲」）（椋1993：109）ということになる。この冷徹だが譲ることのできない掟に従って、「朽木」の婆さんも、「盲目の春」の梅毒にかかった春も、「打たれた鷲」の散弾で打たれた鷲じいさんも、原野に置き去りにされてしまうのだ。この掟がいかに厳しいものであるかは、「鉄砲みず」で、たとえ家族であろうともこの掟を免れることができないということが示され、「山の人びと」で、置き去りにされてから一年を生き延びたとしてもなお、再会した群れの仲間から再度見捨てられるということが示される時、確かに理解されるのである。

ところで、山の民は、こうした非常に厳しい適者生存の掟を潔く受け入れるのである。「朽木」の婆さんも、春も、鷲じいさんも、「鉄砲みず」の重傷の父親も、「呪婆(のろいばば)」の婆さんも、「山の人びと」の熊助じいさんもそうであるが、鷲じいさんと重傷の父親は特に潔い。しかし、彼等の潔さとはただ掟に対してだけのものではなく、死そのものに対する潔さでもあり、死を必ずしも特別なものとしてではなく「避けられぬ自然現象として平静に迎えることができるということ」（『父祖たちの神々』）（中田1991：355）を意味しているのである。それは、「霜の花」の中で妻子の死を目の前にして静かに座って一人で粥をすする男の姿にも見られることであり、中田幸子も言うとおり、ロンドンの短編「生命の掟」のコスクーシュにも共通する態度であり（中田1991：353-354）、短編「面汚し」のスビエンコウにも通じる姿勢である。

ここで注意しなくてはならないのは、その一方で、椋の主人公のうちの何人もが生命に

執着する態度も示しているということである。「無精な男」の主治公は重病で死ぬ覚悟ができていたはずなのに、いざ狼と思われる獣に襲われると必死になってこれに抵抗し、獣の喉を噛み切って殺してしまうのである。このプロットは、一方の主人公が死に、他方の主人公は救助されて助かるという違いはあるものの、中田が指摘しているように、ロンドンの短編「生命への愛着」のそれと同じである。（中田1991：356-357）これらのことから、上記のロンドンの短編を椋が読んでいたかどうかは別としても、椋が、死に直面した時の態度として、平静に正面からこれを受け入れることを理想としていたということや、しかし本能は死に直面してもなお生命に執着するよう命ずるものだと、彼が信じていたことなどが、ロンドンの理想や信念と共通していたということだけは言えるだろう。

では、椋の山窩小説の独自性はどこにあるのだろうか。もちろん、椋が〈山窩〉を自分の作品のテーマに選んだこと自体がまず独自であるが、彼の山窩小説には独特のロマンがあるということが何より重要なことだと思われる。その＜ロマン＞とは、悲恋のような感動的なドラマと激しい戦いの興奮から生み出されるものであり、このことを最も良く示しているのが、昭和9年に書かれた「雲の歌」であろう。この作品は、年に一度の山の民の祭りを背景に、悪辣な〈狼〉や〈ヒ首〉と、有能で善良で力強い〈熊〉やじじいとの激しい争いや戦いを描く一方で、熊とじじいの娘〈お花〉の相思相愛ながら結ばれることのなかった悲恋を情緒豊かに挟んでいくという、いわゆる上質のロマンス作品である。

このような悲恋物語は、昭和16年頃からあとに書かれた後期の山窩小説に多く、ほとんどが里人と山窩が関わり合い、触れ合い、はたまた愛し合うというストーリーになっているのが特徴で、感動的な作品が多い。「沼地の山窩」では里人がやや山窩を見下しているようなムードがみられるが、全体としては、「火」や「山の娘」や「掟（はたむら）の下の恋」に見られるように、一本気で、一途で、そのうえ野性的な美しさを持つ山の娘に里人が惚れ、あるいは里人が娘に惚れられるものの、「山の女は，里の男にふれてはならぬ掟」（「掟（はたむら）の下の恋」）（椋1993：299）により結ばれずに悲しい最後を迎える、というような感動的な作品が多い。

椋の山窩小説を読んでいると、いわゆる文明人である自分には決して体験することのできない未知の世界のロマンを疑似体験することによって、体の奥がうずくような気がすることがある。これは、椋が山窩小説によって、長編『アダム以前』など一部の作品を除いてはロンドンがなかなか肯定的には描きそして示し得なかった〈人間の野性〉を存分に描き切って、山の民の生活は一見非文明的でとても野蛮であるが、実はその中にこそ人生のロマンや冒険があり，彼らの原始的生命力の中にこそ我々文明に毒された者が生き抜いていくための活力の元がある、ということを説得力をもって示し得た証拠なのである。

ロンドンはどちらかというと、人間の野性的な部分を追求していった果てに個人主義やペシミズムを見てしまいがちな人であったし、アラスカや南洋の先住民に対する偏見からも脱し切らなかった。しかし椋は、ロンドンと同様の死生観を示し、厳しい自然の中で死と隣り合わせに生きる山の民の適者生存や弱肉強食の生活・人生をロンドンばりに描きつつも、持ち前の楽天主義とユーモアによって、厳しい内容を含みながらも読む者に活力を与え得るようなロマンあふれる新しい文学形態を創造することに成功したのだ。

3.3.　猟師物語『野性の谷間』執筆の経緯と梗概

椋の長編猟師物語『野性の谷間』は、彼の作品中最長最大のものである。すでに触れたように、そのタイトルからして椋のロンドンへの傾倒を感じさせるものだが、『椋鳩十の本　第四巻　野性の谷間　前編』の内表紙裏に「若き日にジャック・ロンドンに惹かれて野性的作品に開眼した作者としては、ここに長年の思いを凝結したような長編」（小宮山1982（前）：2）とあるように、内容的にもロンドンへの思いがあふれている作品である。この作品は、油の乗り切った54歳の椋が昭和34年（1959年）3月から『読切特撰集』という雑誌に3年間35号にわたって発表したもので、内容的にもかなりの力と熱情を注いで書かれたと思われる傑作である。ここには、椋のストーリー・テリングの巧みさが面目躍如としていて、話の展開は全く先が読めず、読者はハラハラ、ドキドキしながら先へ先へと引っ張っていかれるように感じる。

『野性の谷間』は、全6部、35章によって構成されている。ストーリーは次のようである。孤児となった二羽の野生の鷲が、様々な困難を乗り越えながら学習しかつ本能を甦らせながら成長していく。二羽は人間の部落の近くを領土とするが、ある日、オス鷲の方が腕の立つ猟師である〈源次〉に撃たれて捕われの身となる。このオス鷲は次第に源次になつき、犬（猟犬）や飼い猫とも仲良くなった。しかし、メス鷲の姿を目撃したオス鷲はにわかに悩み始め、ついには、ちょっとしたすきに小屋から飛び出してメス鷲の許に戻る。逞しくなった二羽は、雛の頃住んでいた古巣に戻ったが、ある日オス鷲が、彼を捜しにに来た源次の勘違い（オス鷲が犬を襲ったと思った）で銃に撃たれて深い谷に落ちる。ここで、源次の犬はオス鷲の許に駆けつけ、オス鷲の介抱をしながら共に暮らし、友情を育むことになった。オス鷲と犬は協力して狩りをするなどしてますます友情を深め、一方メス鷲も次第にこの犬に打ち解けていく。ある日、源次の犬の前にメスの猟犬が現れ、彼はこのメス犬を野性の世界に誘い込んだ。

二羽と二頭はこの谷で仲良く暮らし、谷はいつしか彼らのお陰で〈魔の谷〉と呼ばれるようになった。誰も寄りつかないこの谷に腕利きの猟人だが孤独な〈片目の八郎〉が二頭の猟犬を連れて入ってきたが、その二頭は源次の犬とその伴侶のメス犬に殺されて食われてしまった。恨みに燃える八郎は、源次の犬に散弾を浴びせることに成功するが、自身も鷲に襲われて重傷を負う。犬とオス鷲を捜しにやってきた源次に助けられた八郎は、源次の犬とメス犬の後を追い、その犬が源次に近付いたところを撃ち、源次の犬は重傷を負ってメス犬と共に逃走した。岩穴に隠れた源次の犬の許に、血痕を追って来た八郎と源次が近付く。源次の犬が八郎に噛みつき、これを撃とうとした八郎を鷲が突き飛ばした。オス犬と源次は再会し、やがて源次と二頭の犬は谷の奥に消えていった。10年後のある日、八郎は、山の奥で寄り添うようにして並んでいる人骨と二頭の犬の骨を見つけた。

3.4.　ロンドンの影響

この作品にもまた、他の作品にみられるようなジャック・ロンドンの作品からの影響と思われる部分がたくさんある。たとえば、孤児となった雛の頃の二羽の鷲が本能を甦らせながら学習して成長しようとする姿は、長編『白い牙』の第2部で主人公のホワイト・ファングがオオカミ属の本能を強めながら学習して成長していく姿を容易に思い起こさせるし、

源次に捕まったオス鷲が次第にガードを解いて源次になついていく様子は、ホワイト・ファングがウィードン・スコットに、また中編『野性の呼び声』の主人公バックがジョン・ソーントンに、それぞれなついていく様子によく似ている。何よりも、源次と彼のオス犬との強力な愛の絆が、こうした＜ロンドンの主人公とやさしい人間との愛によるつながり＞をお手本として書かれているであろうと考えるとき、動物文学の時と同様に、いかに椋がロンドン文学のそういう点に惹かれ、それを自分のトレード・マークとしようとしたかがわかる。

椋はこの作品の結末近く――「岩穴」の章――で、オス犬にとって源次は「愛の神」（椋1982（後）： 186）であると述べているが、ホワイト・ファングにとってのウィードン・スコットが「ラブ・ゴッド（愛の神）」（London1906：195） であったことを思い出せば、この点で椋がロンドンを強く意識していたことには疑いの余地がない。また、源次の小屋にいる時のオス鷲が大空の自由と人間の愛情の間で悩む姿や、源次の犬が猟犬に留まるか祖先や野性の呼び声に従うかと迷った末に野性を選ぶ姿、そして野性に戻った源次の犬が、彼のキャンプを前にして〈野性の自由〉と〈人間との愛情〉との間で葛藤する姿は、まさしくバックのそれであるし、愛情に背を向け復讐に燃える〈片目の八郎〉の自然主義的人物像は、『白い牙』においてスコットの邸宅に押し入るジム・ホールのそれに非常に近い。さらに、バックが狼の群れの王になったように、二羽の鷲と二頭の犬は〈魔の谷〉の王になっているし、源次は、バックと同様に、物語の最後で人間世界と縁を切り、永遠に原野に消えていくのである。

もちろん、この作品におけるロンドンの影響については、他の作品にみられるのと同様に様々な形で表れている。本能や野性といったポイントについては、鷲や犬、さらには八郎や源次の野性的な行動や自然との近さといった形で随所に表れているし、進化論的な適者生存や弱肉強食の論理についても何度も触れられている。たとえば、弱肉強食の論理については、ロンドンばりに「強いものが勝つという、自然の法則」（椋1982（前）：33）とか「おそうか、おそわれるかだ。殺すか、殺されるかだ」（椋1982（後）：197）などと説明されているし、適者生存についても、「この空腹と、深い傷に、うち勝つものたちだけが、生き残って行くのである」（椋1982（前）：142）とか、

> 祖先から伝えられ、教えられた知恵の範囲だけで、生きようとする、野性のものどもはおそかれ、はやかれ、やがて滅び去るべき運命を、になわねばならないのである。こうした運命をたどって、地球上から滅び去っていった野性のものどもの種族は、数多くあることであろう。
>
> 環境の変化に、打ち勝って、生きのびていくためには、臨機応変に、彼等なりの、新しい知恵を生み出して、その場、その場を、切りぬけて行かねばならないのである。
>
> こうした野性のものどものみが、人間の圧迫からのがれて、生きて行けるのである。（椋1982（後）：57）

などと述べられているが、さらにこれらの論理が、実際の動物同士の戦いや人間と野生動物の争いの場面の中で実証されていくことで、説得力を高めている。

ところで、源次に飼われたことのあるオス鷲とオス犬が、人間世界と完全に決別して野生の世界に入り込んでも、なお〈人間的な愛情〉〈人間くささ〉〈淋しさ〉を取り去ることができずにそれらを深く心の底に残していて、そればかりか、むしろ人間である源次の方を野性に引き込んでいったことは、ロンドンの作品にはほとんど見られないプロットである。ホワイト・ファングは、最終的には、文明の世界にいながらも野性を失っていないという狼だし、バックについても、野性の世界に完全に入ってからは、ソーントンと過ごした谷を毎夏訪れるということ以外には人間的な部分には何も触れられていない。このことは、椋とロンドンの違いの一つに数えられるだろうが、〈野性的な生命力〉と〈人間的な愛情や知恵〉を同時にもつというパターンは、椋にとってもロンドンにとっても理想的な人物像の条件だったのではないか。ただ、ロンドンの場合は主に野性的な生命力の方に軸足があるが、椋の場合は愛情のほうにより大きいこだわりがあったというだけのことだろう。

『野性の谷間』の結末で、源次じいさんは人間世界を捨てて、二頭の犬とともに〈魔の谷〉の奥に消えていった。このことは一体何を意味するのだろう。10年後に白骨化した彼ら（寄り添うようにしている）をみつけた〈片目の八郎〉は、「源次のじじいめ！　この世の生き物のうちで、ほんとに、しあわせな人間といえば、じじい、お前ぐれえなものかも知れんなあ」としんみりつぶやくが、母に捨てられ女に裏切られるといった醜悪な人間関係という環境の力で、人間不信にさせられ屈折した性格にさせられた八郎にこう言わせていることに注目したい。また、一方源次は――ロンドンとは少し違うが、椋自身と同様に――「愛情主義者」（椋1982（後）：146）「楽天家」（椋1982（後）：146）（傍点筆者）であり、「愛情への夢」（椋1982（後）：146）や「愛情に、すがろうとするものの、ねがい」（椋1982（後）：146）をもっている人物である。

つまり、『野性の谷間』は、文明や利己的な人間関係に毒されて生きている我々に反省を迫り、真の幸せとは何かを考えさせる、実に現代性を備えた傑作なのである。この意味で、この作品は、ロンドンのふんぷんたる影響（原始的生命力、適者生存や弱肉強食の論理）と、動物文学や山窩小説にもみられる椋のオリジナリティ（共生、楽天主義、野性の世界の中で人間くさい愛情を貫くというテーマ、文明への懐疑）が最高の形でマッチし、椋の動物文学と山窩物語を書く技量、それぞれの文学形態の長所が効果的に混じり合って結晶した、純文学の一傑作と言っていいだろう。

3.5.　椋文学の一評価とロンドン文学解釈の可能性

すでに各所で触れてきたことであるが、椋文学を、特にロンドン文学との関わりでどう捉え評価したらいいか、まとめてみたい。椋は、ロンドンと同様に、弱肉強食の激しい闘争や適者生存の厳しい現実を描きながら、野性的本能から生まれる原始的な生命力の重要性を訴えるとともに、人と人、人と動物、動物同士が自然の中で愛情をもって交流する様を、ユーモアをたたえた文章によって一つのロマンとして描くことで、人が自然と共生していくことの必要性とその方法について楽観的に語り、我々が文明に毒されていることに反省を迫り、我々に真の幸せとは何かを問う、といった現代性に富んだ文学を書いたものと位置づけられよう。

中田幸子は、「ロンドン（外国）の影響を通過して、日本人固有の成果をもたらすに至ったという点で、椋はかなり顕著な一例である」（中田1991：360）と言い、椋文学を「「自然主義・日本型」の重要な一例」（中田1991：350）と位置付けている（『父祖たちの神々』）。また、小宮山量平は、椋を「たんに児童文学作家・動物作家といった区分けでは囲みきれない」（椋・小宮山1982(1)：213-214）作家だとした上で、椋文学を「向日性の文学」（椋・小宮山1983(3)：280）と位置付け、そこには「現代の楽天主義」（椋・小宮山1983(3)：280）、「特有のあたたかさ」（椋・小宮山1982(2)：272）すなわち「生命の温もり」（椋・小宮山1982(2)：272）、などがあって、それが〈椋鳩十文学の現代性〉につながると述べている（「自伝的対談」(1)(2)(3)）。小宮山は、「現代の楽天主義を若者たちに考えてもらいたい」（椋・小宮山1983(3)：280）とも述べていて、このあたりに椋の現代性を見ようとしているらしい。しかし椋文学の現代性を評価していこうとするならまず、彼が、ロンドンに影響を受ける中で、そこから導き出した共生や文明批判や環境保護などのテーマをいち早く掲げたことを、挙げなくてはならないだろう。

そう考えると、ロンドン文学そのものがそういう読みを許す可能性を秘めている、あるいは、そういう方向性をもっていたとも言えるかもしれない。現在、ロンドンの本国であるアメリカでは、〈ネイチャー・ライティング〉の伝統の上に、〈環境文学〉という新しいジャンルが1960年代後半以降成立しており、一方で、エコクリティシズム――環境の問題、すなわち人間と自然の関係を視野に入れた新しい文学研究――が、80年代半ばに現れ、90年代にはいると1992年には文学・環境学会も発足したため、現在は、新しい文学批評の一つとして認知されている。[1]ロンドンに強い影響を受けていち早く独自の共生のテーマを打ち出した椋文学は、まさに日本における〈環境文学〉の元祖として、エコロジカルな文学批評の評価の対象になっていくべきだということは言うまでもない。しかし逆に、椋の視点からロンドンを見直すことにより、ロンドン文学もまたエコクリティシズムの俎上に上ってくることは実に自然なことであり、ウイルスによる文明の崩壊を描いた彼の未来小説『赤死病』などが環境文学として見直されると、ロンドンの再評価に拍車をかけることになるかもしれない。

こうした文学批評の流れから言っても、また自然環境保護が人類の緊急課題になって久しい現代社会の現状から言っても、「自然・人生＋作者＝作品　という形が、近代文学の正しいあり方」（「作者の意図と読者と」）（椋1982：123）と述べて、自然を重視する姿勢を示し、自分の作品の中で「人間どもを、じっと、みつめているような動物どもを、私の世界の中で、のそのそと、動きまわらせたい」（「野性のにおいを」）（椋1983：89）と述べ、「何とかしてロマンの火をかかげたい」（「自伝的対談」(2)）（椋・小宮山1982：279）と思いながら作品を書いた椋鳩十は、今改めて「日本のジャック・ロンドン」と呼ぶにふさわしい作家だと言いたい。

椋は全国に広がった〈母と子の20分間読書運動〉を創始した人だが、鹿児島の同人誌『原色派』の代表者で、加治木高等女学校教師時代の椋に担任してもらった経験をもつ久井稔子氏によれば、彼自身が中学生のときに正木先生や佐々木先生から朗読してもらったように、椋は久井さんたちにロンドンの『野性の呼び声』を朗読して聞かせてくれたそうである。[2]これは、椋がいかにロンドンに心酔していたかを示すエピソードだが、米国のカリフ

ォルニアでは今、ロンドンのファンの集まりであるジャック・ロンドン財団の手によって小・中学校でロンドンの作品を読ませて感想文を書かせる運動が展開されている。[3]このことは必ずしも偶然ではない。なぜなら、いわばロンドンが椋を通して間接的に鹿児島の文学的な土壌の一部を作ったと言えるからであり、二人の作品が今でも盛んに子供たちによって教育の場で読まれつつあることには，二人の文学の評価の高さと現代性の存在という共通点があるからである。

注

1) エコクリティシズムについては、スコット・スロヴィック著、野田研一編著『アメリカ文学の＜自然＞を読む　ネイチャー・ライティングの世界へ』（ミネルヴァ書房、1996）などを参照のこと。
2) 久井稔子氏からの1995年10月9 日付筆者あての手紙による。
3) 米国にはこのほかに、研究者の集まりであるジャック・ロンドン協会がある。なお、日本とフランスにもジャック・ロンドン協会があり、鹿児島では、日本ジャック・ロンドン協会の鹿児島支部も着実に活動している。

4.　椋の視点でロンドンを読む
――『白い牙』と共生の論理

椋文学へのロンドン文学の影響を見ていくうちに、筆者は、〈共生〉というエコクリティシズム的な視点にたどり着くことになった。考えてみれば、両者はともに、ありのままの姿の自然に対して深い関心を向け、現代文明のあり方に強い疑問を持っていたわけで、こうした視点に到達することは当然であったかもしれない。

そこで、ロンドンの代表作の一つで、椋がもっとも愛したロンドン作品でもある『白い牙』を、この〈共生〉という視点で読み直し、論じてみたいと思う。これにより、逆に、椋がなぜそれほどまでに『白い牙』を愛し、高く評価したのかについてもわかってくると同時に、椋とロンドンが現代においてもっと高く評価されていいということも理解できるだろう。

4.1.　〈共生〉とは何か

近年〈共生〉という言葉がよく聞かれるようになった。実際、新聞紙上でもしばしば〈共生〉という言葉がでてくるし、テレビやラジオ、ネットなどでも毎日のように使用されている。そしてそれらの多くが、生き物、森林、川、地球などいわゆる自然との共生の意味で使われているが、ほかにも、人間同士の共生、アジアとの共生、男女の共生、地域との共生、産業と産業の共生、沖縄と本土との共生、エイズとの共生、民族間の共生、老若共生、障害者との共生など、かなり幅広い意味でこの言葉は使われていて、一種のブー

ムのようにも見える。しかし、そのうちの多くが〈共存〉と同義で用いられているようだし、また、曖昧な意味で用いられている場合も少なくないようだ。新聞のコラムも、〈共生〉という言葉を安易に口にすることに注意を促していたことがあるが[1)]、筆者はこの言葉が未来に向けて重要なキーワードになると考える者の一人として、また、この論考において〈共生の論理〉を用いてロンドンの作品を読み解こうとする者として、〈共生〉という言葉に定義を下し、その意味について少し考えてみたいと思う。

〈共生〉（symbiosis)とは元々生態学の用語で、「異種の生物が一緒に住むこと」（松田1995：1, 46）を意味している。『「共生」とは何か』によると、〈共生〉とは、「「競争」の生態学における対立概念」（松田1995：4）で、「異質の者と共存するための概念」（松田1995：1）でもある。したがって、「共生の思想は、相手が常にこちらと敵対するとか、常に味方をするとは見なさない」（松田1995：7）し、「敵でも味方でも相手の価値基準を理解し合うことが大切」(松田1995：8) になる。ここが重要なところだと思われるが、この本の著者松田裕之は、「「共生の世紀」は個人主義の上になりたつものでなければいけない」（松田1995：6）とした上で、共生には掃除共生や消化共生のような双利共生関係だけでなく、片利共生や寄生関係も含まれると述べ（松田1995：53, 55-56, 198）、「犬や猫も人間と共生している」（松田1995：57）とする。すなわち、一見相手が自分を搾取しているように見えても、双利共生関係が成立することすらあるということになるが（松田1995：128）、こうしたことを前提にして松田は、「地球共生系」（松田1995：120）の考え方を推奨し、人間社会における共生も個人主義と自由競争がもたらすべきで、利益を各自が求める結果としての共生をめざすべきだと結論づけている（松田1995：193）。

現在様々な地球環境問題が取りざたされている。それは、ダイオキシンをはじめとする環境ホルモンや車の排気ガスの問題であり、酸性雨による樹木の枯死や、オゾン層の破壊、海や川の汚染、地球の温暖化・砂漠化の問題である。この中でもっとも問題なのが温室効果ガスによる地球温暖化の問題で、二酸化炭素やメタン、フロンなどの大気中濃度の上昇によって気温が上昇するだけでなく、そのことによる海水面の上昇や、土壌水分条件の変化（水分の減少）に伴う穀物生産の低下が、人口爆発と重なって大変深刻になっている。特に二酸化炭素が大きな原因になっているため、これを抑制することが地球環境にとって急務となっているのである。[2)]

しかし、こうした地球環境の破壊は最近始まったものではなく、人類の歴史とともに、あるいは、農耕牧畜文明の上に築かれた約5000年前の都市文明とともに始まったし（梅原1996：50-52）、農耕地・牧草地の拡大の必要から起こる森の破壊によって、人類は文明を築いてきた（梅原1996：50）。さらにこの環境破壊が一気にひどくなったのが18世紀半ばの産業革命以降のことで、科学技術文明・工業文明を手にした人類は、デカルトやベーコンなどの哲学者たちに理論的根拠を与えられて、自然を人間の奴隷と見なしこれを征服できると考えたのだ（梅原1996：56-58）。

このような歴史を自ら築き上げ、その結果として上述したような地球環境問題に直面している人類は、いったいどうすればよいのかといえば、それは、地球や自然と共生していくよりほかに方法はない。具体的には、持続可能な開発を可能にしていかなくてはならないので（松田1995：155-156, 坂田ほか（編著）1996：231-234）、車の排気ガスの問題解

決にはディーゼル車からガソリン車へそして低燃費車や電気自動車への転換や、都市部での渋滞の解消などが必要になるし、環境に優しい観光開発をめざす一方で海洋の乱開発を禁止しなければならない。また、二酸化炭素の増加を防ぐためにエネルギーを節約し、熱帯林の過度の伐採を即時に中止するとともに植林を進め、二酸化炭素を固定化するために珊瑚やプランクトンを保護するとともに、化石燃料の使用を抑えて太陽エネルギーに代替を見いだし、海藻（コンブ）を利用して二酸化炭素を固定化する一方で、これを直接熱エネルギーとして利用したりしなくてはならない(坂田ほか(編著)1996:247-248, 松永1993, 1995：158-166）。ところで、梅原猛や安田喜憲は、稲作農業文明は水や森を大事にするので川の安定をもたらす、よって人間と自然の関係が健全で共生していると指摘した上で、こういう文明を実践していたのが縄文文化だとして、これを見直すようにと訴え、西洋の人間中心の文明に対して縄文文化をアジアの考え方として提示していくべきだと主張している。（梅原1996：87-88, 90, 安田1996：232-253）こういうふうに考えると、鹿児島で発見された国分市の上野原遺跡は、現代文明を見直すための格好の教材だと言えよう。

共生の論理は、まだ１つの思想として完成されているとはいえないだろうが、そうなる可能性があるとはいえよう。この論考では、そういうことも視野に入れつつ、〈共生〉という言葉を〈共存〉とは区別し、〈自然（動植物、森林、海川、地球など）との共生〉に限定した上で、生態学の定義に基本的に従って筆者なりに定義して使用していきたい。つまり、〈共生〉とは、単に共に存在するということではなく、共に生きる、すなわち、お互いの違いを認め合った上で共にそれぞれの利益を求めて真の意味で生きることである。したがって、前述したように、共生には様々な形があり得るし、単に仲がいいとかなじんでいるとか主従の関係に見えるとかいうことでは否定も肯定もし得ないことを断っておきたい。梅原は、近代文明への鋭い批判を作品を通して行い、共生を理想としていた作家として、宮沢賢治をあげているが（梅原1996：285-286）、西洋の人間中心の工業文明の中で育ったはずのアメリカ作家の中にも、ジャック・ロンドンのように、約100年前にすでに近代工業文明に警告を発し、共生を志した人物がいたことにも注目しなければなるまい。そして、『白い牙』が、現代のように極度に文明が発達した時代においては、〈共生の論理〉で読める作品であり、今世紀初めに書かれた作品としては、先見の明のあった作品でもあることを論証したい。

4.2.　『白い牙』のテーマをめぐって

『白い牙』のテーマ、すなわちこの作品が描いたもの、追究したものとは何だろう。まず、この作品についての従来の位置付けや評価について見てみたい。『白い牙』に関するまとまった批評は驚くほど少ない。ロンドンの代表作の一つなのに、そして日本でもすでに数本出ているのに、本国アメリカでは数えるほどしかない。私の知る限り、アール・レイバーとジーン・キャンプベル・リースマンの書いた『ジャック・ロンドン』の中の『白い牙』に関する論述、ジョン・スティールが書いたシグネット・クラシック版の『『白い牙』と『野性の呼び声』』のための 「序言」、チャールズ・N・ ワトソン・ジュニアの書いた『ジャック・ロンドンの小説　再評価』の中の『白い牙』に関する一章、など数本だけである。なぜ少ないのかと言えば、『白い牙』が『野性の呼び声』の二番煎じのように

思われているからだろう。そのことは批評家たちの位置付けの仕方を見ればわかるが、たとえば、チャールズ・チャイルド・ウォルカットはこの作品を『野性の呼び声』の「姉妹編」(Walcutt1966:22)だとし、フランクリン・ウォーカーも「姉妹小説」(Walker1966, 1994:214) と呼んだ上で『野性の呼び声』の方がよい作品だと評し(Walker1966, 1994:228)、ジョン・スティールは「『野性の呼び声』のある種の続編」(Steelye1991:ix)と言い、ジョナサン・アウアーバックは「『呼び声』の姉妹編」(Auerbach1996:29)とした上で「バックの経験に対する続編と言うよりむしろ、その再演」(Auerbach1996:29)とまで言っている。

実は、ロンドン自身が『白い牙』の執筆意図について、出版の2年前の1904年12月5日付で出されたマクミランのジョージ・P・ブレット宛の手紙の中で、次のように述べている。

> 『野性の呼び声』の続編ではなく。
> 『〃〃〃〃〃〃』の姉妹編です。
> プロセスを逆にするつもりです。
> 犬の退化と非文明化の代わりに、私は、進化、犬の文明化。――家庭生活、忠実、愛、道徳、そして快適さ、それに徳、の発展を提示するつもりです。
> そうすれば、これは、同じスタイルの、同じ統制の、同じように具体的な――正式の姉妹編になるでしょう。すでに細部にわたって精密に計画を立てました。『野性の呼び声』とは完全に正反対のものです(Labor et al.1988:454-455)

彼は、「続編」ではなく「姉妹編」だとして詳しく説明しているが、ベストセラーになった『野性の呼び声』が出版されてからたった3年後に、それもストーリーがほぼ反対の作品を出したので、2匹目のどじょうをねらったと思われるのも仕方がないかもしれない。しかし、ロンドン自身が進化や文明化を描こうとしているのだと強調している点や、1906年11月16日付のブレット宛の手紙で『白い牙』を『野性の呼び声』より大きな作品(Labor et al.(Eds.)1988:629)と評価していたり、1915年4月3日付のH.E.ケルシィー宛の手紙では、

> 私の『野性の呼び声』と『白い牙』は、その最も広い進化論的重要さにおいて、共に愛を開拓したのです――一方は愛がないとどんなことが起こるかを示し、他方は愛があるとどんなにすばらしいことが起こりうるかを示しているのです(Labor et al.1988:1439)

と両者の違いを説明していたり、1916年10月16日付のレオン・ウェイルスコフ宛の手紙には、「私は『野性の呼び声』が好きだが、それ以上に『白い牙』が好きだ」(Labor et al.1988:1590)と書いていたりすることは、とうてい無視するわけにはいかない。ウォーカーによれば、ヨーロッパでは『白い牙』の方が読まれているそうだし(Walker1966, 1994:263)、日本での人気も翻訳点数も『野性の呼び声』に引けを取っていない。

事実、批評家の評価や位置付けも様々で、レイバーは、一方で「芸術的観点から言うと、それ（＝『白い牙』）は『野性の呼び声』ほど印象的ではない」(Labor and Reesman1994:

48)と言いながら、他方では

『白い牙』は、『野性の呼び声』とは完全に違う種類の本だ、…『白い牙』は、ロンドンの環境決定論の理論を例証するべく意図された、社会学的寓話である(Labor and Reesman1994：46-47)

と言ったり、この小説を「正確なイニシエーションの物語（＝成長物語）」(Labor and Reesman1994：47)と呼んだりしているし、さらに、『野性の呼び声』に対するというよりも短編「バタール」に対する「姉妹編で正反対の話」(Labor and Reesman1994：47)とさえ言うのである。また、ワトソンは、

この姉妹小説（＝『白い牙』）の方向は、求心的――中心への、そして、安定した家庭生活の〈女性的〉原理への回帰、である(Watson1983：98)

と位置付け、ラス・キングマンは、「『白い牙』は、まさに優れた犬の物語であるが、必ずしもクラシックの範疇に入ってはいない」(Kingman1979：173)としながらも、

描写の実力や、荒野やそこに住むものへの熱情において、アメリカの文芸には『野性の呼び声』の上に出る物はない。これら両方の点において、『白い牙』は十分にこれに　匹敵する、...(Kingman1979：173)

とも言い、

『白い牙』、『野性の呼び声』に対する彼の（＝ロンドンの）姉妹小説――愛と優しさが持つ支配的かつ進化的影響と文明化し向上させる力についての、真の慈愛の精神についての、驚くべき物語(Kingman1979：152)

とか、「その（＝『白い牙』の）心理学は、もちろん当て推量ではあるが、すばらしく説得力がある。この分野においてはこの作品以上に強力な作品はまだ現れていない」(kingman1979：174)などと言って、『白い牙』を高く評価している。ウォルカットも、この作品について、『野性の呼び声』ほど赤裸々で緊張感があって人をはなさないと言うことはないが、と断った上で、力強い作品だと評価している(Walcutt1966：22)。

では、筆者の位置付けはどうかと言えば、『白い牙』はロンドン自身が言うように『野性の呼び声』の姉妹編ではあるが続編ではなく、後者とは別個の作品と見るべきで、前者の方には確かにやや甘い部分も見られるものの、共に完成度が高く力強いし、さらに『白い牙』の方には明らかに『野性の呼び声』からのテーマ上の発展が見られる、と考えている。

『白い牙』のテーマを考えるためにざっと白い牙の成長の跡を追ってみたい。彼の生ま

れた環境は「野性」であり「野蛮」であって、「生命もなく、動きもない」わけで、動きを好まず動きをいつでも破壊しようとするような世界だった(London1906, 1970：1-2)。しかも彼は、早くに父を失うというハンディーも背負っていた。しかし、何もわからない彼も、生来の荒々しさをバネにして、飢餓を経験し制限と自制の掟を学び(London1906, 1970：63)、成長の力が恐怖の本能を上回って穴の外へ出ていき、ついに「食うか食われるか」の「肉の掟」を学ぶ(London1906, 1970：80-81)。

犬の血を4分の１受け継いだ白い牙は、人間を見てまず「力」を感じ取り、人間を「上級の生き物」とか「火をおこす者たち」などと考え、さらに「神々」であると結論した(London1906, 1970：95)。彼はその結論に基づいてキャンプの生活に適応してゆき、リプ・リプとの喧嘩などを経て「狡猾」になり「賢い泥棒」にもなっていった（第3部、第2章）。この生活の中で彼は、「どんな状況下でも神にかみついてはならない」という教訓や、自分の身をかばい敵を攻撃する方法などを学び、その上で弱肉強食の掟を守って力を指向し、「性分」として持っていた「残忍さ」を気質以上に発達させて「意地悪」になって、犬の群の事実上のリーダーの地位を確立していく（第3部、第5章）。弱肉強食を学んだために「優しさと愛情」を欠いていた(London1906, 1970：110)白い牙は、一方でグレイ・ビーバーの支配にむしろあこがれるようになり、結局キャンプを捨てられなくなってしまう。その他、神々にはほかのグループがあることや自分の神以外のその神々の不公正には憤ってもいいこと(London1906, 1970：125)、財産の掟とそれを守る義務なども学ぶが、愛を経験することはなく、人間への忠誠が愛の欠如した状態と共存していて(London1906, 1970：127)、友を求めずむっつりして孤独で情がなく凶暴だったため、それ故に生き抜けたとも言えるものの、すべての同種族（犬）の敵となってしまった(London1906, 1970：150)。

その後ひどい白人ビューティー・スミスに売られた白い牙は、スミスに打たれ闘犬をさせられる中でよくそれに耐え、生命力を発揮してその生活に適応していったが、一方、性格はさらに凶暴になり、「悪鬼」のようになった（第4部、第3章）。しかし、闘犬によって死にかけたところをウィードン・スコットに救われた白い牙は、スコットとのふれあいの中で徐々に心を開き始め、彼に対して「好き」の状態になりさらにそれは「愛」に変わっていった(London1906, 1970：192-195)。スコットは白い牙にとって「愛の神」となり(London1906, 1970：195)、再びこの生活にも適応していった。とりわけカリフォルニアのシエラ・ビスタにおける白い牙の適応は早く、その「適応」は様々な学習を可能にした。特に、家畜に敵意を持ってはならないことなどは経験の中で厳格に学び取ったし、持ち前の凶暴さ・野性・内面の狼などを残しながらも、次第に忠義心を持ち、抑制・落ち着き・冷静な寛容などを得るようになった。

こうして自己の潜在力としての愛に目を開かされたことは、白い牙にとっては大変化であったが、なおも彼は孤独だった。この状態は結末まで完全に解消されることはないが、彼は、次第に笑うことを覚えたり主人と戯れることを学んだりして、主人への愛と忠義を強め、さらにコリーと恋愛し結ばれることでひとりぼっちの生活ではなくなり、ついには、命を懸けて主人の家族を凶悪な脱獄囚ジム・ホールから救うという忠義を示して、家族から「神聖な狼」(London1906, 1970：247)と呼ばれるまでになる。

白い牙の成長は、生き残りのための適応のプロセスであるといえよう。この〈生き残りの論理〉は『野性の呼び声』や『海の狼』にも見られる論理で、荒野などの厳しい環境の中で生き抜き、生き残るには、本能を呼び覚まして、野性の原始的生命力を適応のための原動力として回復・獲得することで自ら強者となり――ここにはニーチェ流の強者の論理が介在する――、さらにこれを生かして自分の環境の掟などを学習することによって、適応を果たすべきだというものだ。白い牙は、こういう生命力を生かして、前提条件としての〈動きを好まぬ野性に生まれ、父もいないし母とも別れる〉という過酷な環境をものともせずに、次々に降りかかる苦難を切り抜け、むしろそこから実に多くのものを学び取っていく。しかもそれらの知識や掟の理解はすべて実用的なことであり、相互に関係し合って白い牙の心身の成長・発達を促しているのである。

さて、この適応のプロセスが、本当の愛を知るという、白い牙にとっては価値あることでありながらなかなか困難なプロセスに、結びつき融合していく点にも注目しなければならない。このテーマには共生の論理が含まれているというのが、これまでの批評と違う筆者独自の見方なのだが、その点については後述するとして、ここではもう少しこの作品の基本的な構造やテーマと個別の論争点について述べてみたい。

既に触れたように、ロンドンはこの作品の一つのテーマは愛であり、「愛があるとどんなにすばらしいことが起こりうるか」ということだと言っているが、このテーマは、『野性の呼び声』のジョン・ソーントンとバックのふれあいや、長編『海の狼』におけるハンフリーとモードの恋愛の中にも描かれている。ただ、ソーントンとバックの愛より、スコットと白い牙の愛のほうがリアルであるし、ハンフリーとモードの愛はその効果の点で疑わしい、と言えるだろう。いずれにせよ、この愛の存在は、白い牙の成長にとっては欠かせないものであったし、彼の成長の仕上げに当たるものだったのだろう。すなわち、全体としては、白い牙の成長は本質的には生き残りのための適応と愛の発見の旅だったのである。これは上に挙げたほかの二作の場合にも当てはまる構造で、ロンドンがいかに、野性的な生命力をもつと同時に寛容な愛をも獲得している人間像に、自己の理想――現代人の理想像――を見ていたかがわかるのであり、その考えは、長編『マーティン・イーデン』を書く頃になるとやや悲観的な色合いを帯びるものの、終生変わらぬロンドンの信条だったと見ることができよう。

ところで、この作品のテーマの一つは、レイバーの

> この結構なお話（＝短編「バタール」）は、....とりわけ『白い牙』と、遺伝と環境決定論のテーマを共有している(Labor and Reesman1994：39)

という言葉を待つまでもなく、環境決定論である。キングマンによれば、ロンドンは、

> 人はよく、私の「へどが出るようなリアリズム」という欠点を見つける。人生は、へどが出るようなリアリズムでいっぱいじゃないか。私は、男でも女でもありのままに知っているが――百万人もの連中がまだヘドロのような段階にいるのだ。だが私は進化論者だ。したがって明白な楽観主義者だから、人間（ヘドロの中にいるのだが）への私の

愛は、ありのままの人間を知ることから生まれ、人間の前途に神聖な可能性を見ることから生まれている。それが、私が『白い牙』を書いた動機のすべてだ。有機的な生活のあらゆる原子は、塑造できるものである。今存在しているうちで最もよい見本は、型に入れてこのようにもあのようにも作られ得た、かつてのすべての子供たちであった。その圧力は一方的にさせておけ、私たちには先祖返り――野性への逆戻り、もう一つは家庭化、文明化がある。私はいつも、人生の恐るべき可塑性に強い印象を持っているし、環境の驚くべき力や影響は、いくら強調しても足りないと感じるのだ(Kingman1979：152)

と言っているそうで、ワトソンも

この小説（＝『白い牙』）に浸透しているのは、純粋な自然主義的決定論というよりむしろ、機会の気まぐれと自由意志の認識が混ざった、遺伝と環境の規則についての、より柔軟な考え方である(Watson1983：91)

とか、「それ（＝『白い牙』）が無制限の自然主義を免れている基準は、機会の可能性についてのロンドンの認識である」(Watson1983：96)などと述べて、ロンドンの決定論が自然主義の枠を越えていることを指摘している。

筆者も決定論追求のテーマはこの作品において重要だと考えているが、ロンドンが決定論の例証に力を入れていたことは、その背景となるべき環境としての第1部の描き方の緻密さ・リアルさ・ダイナミズムと、その中に描かれる白い牙の翻弄される姿や、第5部でのジム・ホールの身の上の記述を見れば明らかである。たとえば、白い牙自身については、

数カ月が経った。白い牙は、より強く、重く、がっちりしてきた。一方、性格の方は、遺伝と環境によって敷かれた線路に沿って発達しつつあった。彼の遺伝とは、粘土にたとえられる生命材料であった。これは多くの可能性を有しており、多くの違った形に作り上げられうる。環境は、この粘土を形作り、それに特別な型を与える役割を果たした。....

だから、彼の気質の粘土と、環境の圧力に従って、彼の性格はある特別な形に形作られつつあったのだ。それを逃れることはできない。白い牙は、より気むずかしく、愛想が悪く、孤独で、どう猛になりつつあった...(London1906, 1970：132-133)

と説明しているし、ジム・ホールについては

彼（＝ジム・ホール）は凶暴な男だった。彼は人格形成期において間違って形作られた。正しく生まれつかなかったし、社会の手でつかまされた塑造によって、何も手助けされずに来た。社会の手は過酷で、この男は、その手工品のすばらしい見本であった
(London1906, 1970：239)

と言って社会の責任まで追及している。

4.3.〈共生の論理〉による新しい読み方

では、共生の論理で『白い牙』を読み解くとどうなるのか。それを考える前に、この読みをしていく際に障害となる従来のいくつかの指摘や批判に、コメントないし反論をしておきたい。まず、スティールが、『白い牙』が「ハッピーエンド」になり「肯定的なエンディング」になった理由をチャーミアンとの恋に求めていたり(Steelye1991：xi)、ウォルカットが、白い牙は、両親との縁が薄く貧困などの逆境を強く生き抜いたロンドン自身の寓話を演じている(Walcutt1966：23)と述べている点については、特に驚くべきことでもないし、否定する必要もないと思うが、筆者はむしろ、『白い牙』を書き始める直前の1905年6月にヒル農園を購入して、本格的にソノマでの農園経営に乗り出したことの方に注目している。

『白い牙』への批判の中で割合多いものの一つが、白い牙は結末において退行し完全に犬化・文明化しているので迫力がない、というものだ。批判的な意見の例は次のようである。トニー・タナーは「彼（＝白い牙）は、今や〈神聖な狼〉と呼ばれており、我々は最後に、彼が、体中に子犬たちがのっかっている状態でまどろんでいるのを――あらゆる野性が消え去った、まさに家庭生活そのもののイメージを目にする」(Tanner1995：77)と言い、ジェイムズ・R・ジャイルズは「今や彼（＝白い牙）は、狼であることをやめ、犬となった」(Giles：49)と断定する。ワトソンは、

『野性の呼び声』ではじめて描かれたこの悪魔のようなヒロイズムは、二年後に、『白い牙』において別の表現を与えられ、『海の狼』の場合と同じように、最後には文明化の力に屈してしまう(Watson1983：78)

と述べ、ウォーカーも、

いったんこの犬（＝白い牙）がカリフォルニアに到着すると、ただのもう一匹の犬になってしまい、ミラー判事の邸宅で侵入者をやっつけるという点では効果的に描かれながらも、心の成長という点においては、文明の快適さによって悲しくも弱められている
(Walker1996, 1994：228)

と批評している。一方で、ロンドン自身は、1904年12月5日付のチャーミアンへの手紙で、これから書く予定の『白い牙』のタイトルについては『飼い慣らしの呼び声』とはしないと述べているし(Labor et al.(Eds.)1988：455)、アンドリュー・シンクレアは「この本（＝『白い牙』）の最後で、白い牙は依然として狼のままであり、…しかし彼（＝白い牙）は、依然として生来の狼のままであり、人間社会には加わろうとしない個人主義者であった」(Sinclair1977：125-126)と見ているほか、ウォルカットも、

要するにこれは狼の本だ。そしてたとえ結末でこの狼が愛で飼い慣らされたとしても、

彼は依然として狼だ。....彼の（＝ジャック・ロンドンの）著作における平穏は、偉大なる個人主義者の華やかな平穏である...これは、白い牙の平穏でもある...(Walcutt1966：23)

と同様の考えを示している。

さて、ではどちらが正しいのだろう。筆者の立場は後者に近い。なぜなら、ロンドンは、カリフォルニアに舞台が移った第5部においても、白い牙が依然として原始的な生命力を失わず、内面的には狼であり続けるということを、迫力と説得力を持って描いていると思うからである。そのうちの二つの代表的な場面が、いわゆる〈三重殺しエピソード〉と〈ジム・ホール　エピソード〉である。ある日白い牙は、自分を侮辱した３匹の犬を、

白い牙は、狼らしいやり方で地面の上を滑り、狼らしいスピードですばやく音もなく走って、野原の真ん中でその犬を引き倒し、殺害した(London1906, 1970：229-230)

というふうに殺害して、「けんか狼」 と呼ばれるようになった。ここには〈狼〉と言う言葉が何度も使われている。また、ジム・ホールがスコット邸に侵入したときも、白い牙はまことに野性的な戦い方で、連発銃を持った侵入者と激しく迫力のある戦いを展開して、これをかみ殺してしまった。しかもこの戦いで白い牙は、医者が千に一つのチャンスしかないと言って匙を投げたほどの重傷を負いながらも、「野性の生命力」や「古くからすべての生き物に備わっている不屈さ」(London1906, 1970：245)で見事に元気を回復するのであった。もし白い牙が本当に文明の犬であったなら、この時点で彼は間違いなく死亡しているはずで、そうなっていたら、確かにこの作品は、締まらなくて情けない犬の話になっていたであろう。ほかにも、第5部・第4章に、

にもかかわらず彼（＝白い牙）は、他の犬たちとはいく分違ったままであった。...しかしまだ彼については、内面で野性が去りがたくて、彼の中の狼がただ眠っているだけであるかのように、潜んでいる凶暴さを暗示するものがあった(London1906, 1970：231)

という記述があって、「眠っている」という言葉が問題にされることのある第5章の「眠れる狼」というタイトルも、〈身内の狼がただ眠っているだけの狼〉という意味であることがわかるし、白い牙がウィードン・スコット以外には自分とふざけ戯れることを許さなかったということや、彼がそういう誰とでもふざける類いの〈普通の犬〉ではないことが書かれている部分(London1906, 1970：234)も見逃してはならない。

大したことはないが若干見られるのが、〈ジム・ホール　エピソード〉に関する批判である。たとえばワトソンは、このエピソードにおける、冷淡な社会や不公平な刑罰のシステムについてのロンドンの説明はよけいな説教であるとし、この件は時事的すぎるし教訓的すぎると評しているし(Watson1983：91)、ほかにも、このエピソードを白い牙が文明世界の一員になったことの儀式だとした上で、罪のない人間を殺したので白い牙は正義の味方ではないとする批評もある(大浦（監）1989：51)。これらに対してはまず次の二つの批

評を提示しよう。すなわち、ジャイルズは、「『白い牙』におけるジム・ホール　エピソードの主題に関わる重要性」の中で、

　確かに、ホールの「怪物性」や「野生動物」的行為に対するロンドンの強調は、「社会」あるいは環境が犯罪者を獣的なレベルにまで至らせたことを立証している。実際、彼の入獄経験が、『野性の呼び声』の結末における、狼の群れへのバックの合流に相等しい結果を生んだのだ。このように、ホールのエピソードは、『白い牙』に取ってだけでなく、同様にバックの物語にとっても、主題的にきわめて重要である。人間も動物と同じように、環境の影響に対して無防備であるという考えを強調することによって、この事件は、この二つの小説を、単なる犬の物語の地位から社会批評の作品にまで引き上げるのに役に立つのだ(Giles：50)

と言って、このエピソードが、作品の決定論のテーマを支えている柱の一つであることを明確にしているし、ウォルカットは、

　この本の結末近くで、白い牙は、主人の父親を殺そうと心に決めている自暴自棄の殺人者を殺し、そうすることで、自己に内在する偉大なる力、彼が愛と安心感の中に和らげ溶かしながらも、危険な世の中にあっていざ必要なときのために依然として準備している力を示したのだ(Walcutt1966：23-24)

と述べて、筆者も前述したように、このエピソードを白い牙の持ちこたえている野性を示すものと解釈しているのである。

ジム・ホールの身の上と白い牙の〈殺人〉を、いかにも人間的に同じ次元で取り上げようとすることは危険なことであるし、この作品の構造や意図を無視することにもなる。つまり、動物の世界にも人間の世界にも決定論は通じるということの説明や、犬や狼の目を通すことによって新鮮に獲得される文明批評の視点、そして、白い牙が依然として狼であり続けることによって得られる共生の視点が見えなくなってしまうのである。そもそも、白い牙が気の毒な人間を殺したのが不公正であると解釈するのは、この作品の前提を否定することで、白い牙という狼の視点でこの作品が書かれていることを無視するものである。白い牙にとってはジム・ホールが気の毒な男であるかどうかはわかるはずもなく、また、どうでもよいことであるし、そんなことをいえば、バックだって、侵略者たる身勝手な白人たちをいわば正当防衛的に殺したイーハット族を殺しており、当然厳しく責任を追及されなければならなくなるはずだが、そんなことを言う評者はまずいないだろう。しかし、もちろん、ロンドンのこういう場面の執筆意図は別にあるのであって、犬や狼の視点こそがもっとも大切なのである。ジム・ホールの一件も、純粋に人間の視点からだけ見ればそれはそれで大変よくできているのであり、彼はとても気の毒で運の悪い男だということになり、まさに運が悪いが故になおさら、彼がいかに社会の犠牲者であるかということが浮かび上がってくるのではなかろうか。

ロンドンがいかに狼の生態にこだわっていたかは、1905年5月8日付の、親しい図書館司

書のフレデリック・I・バムフォード宛の手紙の中で、狼の生態について三点にわたって調査を依頼していること(Labor et al.(Eds.)1988：480)や、ワトソンの指摘(Watson1983：80)を待つまでもないことで、したがって、『野性の呼び声』にしても『白い牙』にしても、まずは作品全体を動物の物語として読んで解釈して、意図や主題を明らかにした後に、それが人間にとってどんな意味をもち、ロンドンはどんなことを人間社会に訴えようとしたのかを考えるべきなのである。

そういう見方をしたときに、文明批評としての『白い牙』の存在感が俄然膨らんでくるのである。スティールは、

ロンドンの犬のヒーローたちに起こることの多くは、人間が犬たちを使って金儲けをしようとすることから起こっている。バックは盗まれ、犬ぞりのチームを組もうとする男たちに売られた…お金のために。そしてこれらすべての背後には、富の究極の象徴である金(きん)という誘惑物があるのだ(Steelye1991：xv)

と言っているが、この点がまず痛烈な皮肉である。そして白い牙の人間観察はバックのそれよりも鋭くなっており、特に、彼の目で見たサンフランシスコの町の様子の描写は、出色の出来映えで大変興味深い。ビルが林立し、いろいろな乗り物が右往左往する中で、白い牙は、特に、北国のオオヤマネコのように威嚇するような金切り声を挙げるケーブルカーや電車に引きつけられ、こうしたものに人間の力を感じ取り、恐怖感におそわれて自分がちっぽけな者に感じられた(London1906, 1970：210)。これはまさに野性の側から見た文明批評であるが、その中身は、一方では科学文明がいかに進んだかという驚異の念の現れであると共に、他方では、「なにがそんなに偉いものか」という文明に対する皮肉でもあり、人間批判でもあるのだ。

このような視点を重視するとき、必然的に、ロンドンの文明観や志向を知りたくなるだろう。元々アメリカの文化は文明と荒野の緊張の中に身を置いてきたが、とりわけ急速な機械化・工業化が進み、その結果として管理強化による社会の非人間化が進むと、1980年代以降それに対する疑問が提出されるようになると共に、一方では、苦しい生活の中で突破口を求めて、いいタイミングで起こったゴールドラッシュの波に乗ってアラスカをめざしたり、他方では、物質万能の世の中を批判し、対抗する力として人間本来の野性的な生命力を主張したりする人々が出てきたのだった。そんな空気の中ロンドンは、一方でどんな作品が大衆受けするかをしたたかに見て計算していたと思われるが、さらに一歩進んで未来を見つめ予言すると共に、文明の限界を予感して、このことに警告を発するような先見の明のある作品群を書き続けた。そして、すでに述べたように、現代とは極度に発達した文明に対して疑問が提出されているときで、コンピューターや携帯電話は多くの人間が追いつけないほどの早さで進歩し、自然と人間の距離が離れ、自然破壊がどんどん進んでいくことに様々な警告が発せられつつあるわけだから、ロンドンの文明論や共生の視点が今こそ再評価されなくてはならないと思うのである。

『白い牙』は、特にその第5部は、動物と人間が飼い主と飼い犬という関係で固い絆を持つという、やや甘い愛の意味を強調しようとしているのではなく、より高いレベル、すな

わち、〈文明〉に〈白い牙という野性または荒野〉を持ち込むという実験的なテーマ――言い換えると、〈白い牙という自然〉が〈スコットやカリフォルニアという文明〉とどう共生するかというテーマ――を追求しようとしたのではないだろうか。これはもちろん、文明が自然とどうつきあい共生するかという問題にやがてはつながってくるわけで、実際にロンドンの場合にも、実践的な農場経営や科学的農業の試みにつながっていったのである。まとめると、白い牙のカリフォルニアへの旅は、文明の発展を身をもってたどり、その問題点を指摘しつつ共生をめざす、大いなる実験の旅だったのである。そう考えると、第5章は何人かが批判しているほど出来は悪くなく、子供に囲まれてまどろむというやや甘いタッチのラストシーンも、文明と自然の共生の図なのであって、白い牙はまさに〈文明にすむ荒野〉なのである。

ロンドンにとって、そういう意識とテーマは、のちの『赤死病』や農業小説（あるいはレイバーの言う、四番目のバージョンの小説）の中に脈々と受け継がれ、「オレゴンへの四頭立て馬車の旅」の中での〈土に帰れ〉の主張[3)]や、実際の農場経営の中で、実践に移されることになるのである。こうしたのちの志向と『白い牙』を結びつける批評がいくつかある。たとえば、ローレント・ドーフィンは、

> この小説（＝『白い牙』）は、輝く日光を浴びて、ソノマの谷ならぬサンタ・クララの谷で終わる。そこで白い牙は、再び平和と愛を見つけるが、そこは、危険な犯罪者であるジム・ホールの侵入によって示されるように、未だ征服されざる新しい空間なのである(Dauphin1995：195)

と言っているし、ウォルカットは、「こうして（グレン・エレンへ）引きこもった初期に、彼（＝ジャック・ロンドン）は、孤独な狼を、彼（＝ロンドン）自身が特別に選んだ愛と安全の世界に、象徴的に投げ込むという『白い牙』を書いた」(Walcutt1966：24)と結びつけているが、レイバーはさらに明確で、

> 北国、メラネシア、そしてポリネシアに加えて、さらにロンドンのフィクションには象徴的な荒野という四番目のバージョン、つまり、月の谷がある。『白い牙』や...は、　このバージョンを扱っている(Ownbey(Ed.)1978：36)

とか、「この最後のバージョン（＝月の谷）においてのみ、ロンドンは人を、自然環境に、満足のいく長期の適応を果たす者として構想するのだ」(Ownbey(Ed.)1978：37)とか、「ここ（＝サンタ・クララ）には、アメリカの夢が、無限の肥沃さと幸せをもつエデンの園のような荒野がある」Ownbey(Ed.)1978：37)、あるいは「これら二つの表面上対抗している力――科学と自然――をロンドンが結合させることは、『白い牙』において初めて果たされた」(Labor and Reesman1994：97)などと分析して、『白い牙』が、月の谷に、つまりロンドン自身の農業の実践につながってくることを示唆している。

『白い牙』は、たとえ完全にロンドンの中に意識化されていなかったとしても、文明と自然の対立の問題から共生へ、という方向性を示した記念碑的な作品であるといえよう。

環境文学の先駆者としてのロンドン評価はまだこれからの話だが、日本でかなり早い時期に共生の文学を書き始めた椋鳩十がロンドンに大きな影響を受けて作品を書き、しかも、もっとも好きなロンドン作品が『白い牙』だったことは、とても偶然とは思えない。椋は、見事にロンドンの共生への志向を見抜いていたのである。『野性の呼び声』でも見られた文明批評の傾向が、『白い牙』ではいっそう強まり、ロンドンはその延長線上に共生の論理を展望していた。彼がまさか文明そのものをすべて否定していたわけではなかろう。欧米の人間中心の文明に疑問を持ち、縄文文化や稲作農耕文明がそうであったような自然との共生への志向を次第に強めていったということだろう。そしてその第一歩は『白い牙』の中にあったのである。

注

1) 1996年4月19日付朝日新聞を参照のこと。
2) 坂田義教、穴田義孝、田中豊治他編著『共生社会の社会学』(文化書房博文社、1996)、梅原猛著『共生と循環の哲学』(小学館、1996)、安田喜憲著『森のこころと文明』(NHK出版、1996)、松永勝彦著『森が消えれば海も死ぬ』(講談社ブルーバックス、1993、1995)、などを参考にした。
3) 拙論『ジャック・ロンドンの'Four-Horse Trip to Oregon'を追って』を参照のこと。

5. ジャック・ロンドンと椋鳩十
——椋はロンドンの「戦争」も読んだ

5.1. ジャック・ロンドンと日本

ここで今一度カリフォルニア作家ジャック・ロンドン(1876-1916)と日本の関係をまとめてみたい。両者の関係は意外に深いのである。

ロンドンは彼の大農園〈ビューティー・ランチ〉で中田由松、関根時之助を初めとして、多くの日本人を使用人として雇い、かつ重用した。関根はロンドンの最晩年にそばにいて、死亡時の第一発見者である。また、ロンドンは2度にわたって来日しており、3度目の来日計画もあったと言われている。一度目は1893年のことで、まだ無名で17歳のロンドンがアザラシ漁船ソフィア・サザランド号に乗り組み、日本近海までやってきて小笠原諸島や横浜に上陸した。この時のことを思い出して書いた「日本沖合での台風」(1893)という文章が同年11月にサンフランシスコの新聞の懸賞文で1等を獲得したが、これがロンドンの作家修行の出発点であった。

2度目の来日は1904年で、人気作家となったロンドンは新聞の特派員として日露戦争の取材のために日本を再訪した。横浜に上陸したのち神戸、長崎を経て門司に至った。逮捕されて一時的に小倉の拘置所に入れられるというおまけが付いたが、さらに最前線まで出か

けて取材を敢行した。この時の経験もあって帰国後〈黄禍論〉を唱えたのも日本との関係の一端である。こうした経験から日本への関心を強めたロンドンは、生涯にいくつものいわゆる〈日本もの〉と呼ばれる作品を書いている。日本人が登場する小説はいくつもあるが、短編「おはる」や長編『チェリー』など日本を舞台にしたり日本人を主人公に据えた作品もある。この二つの作品だけでもロンドンの日本的なものへの強い関心をうかがわせて興味深い。ロンドンの著作の出発点は「日本沖合での台風」だったとすでに述べたが、『チェリー』は彼の未完の遺作である。

ロンドン文学に影響を与えたと思われる日本人もいる。日露戦争(1904年)時の陸軍大将黒木為楨(ためもと)(1844-1923)と薩摩藩英国留学生の一人長沢鼎(1852-1934)である。黒木は長沢より32歳年上だが、たまたまロンドンが記者として従軍した第一軍の司令官であった。黒木の戦いぶりはロンドンに薩摩武士道や自顕流を強く印象付けるのに十分であった。そのため黒木の名は、実際に『チェリー』の中に出てくるのだ。かたや、日本人初のアメリカ永住移民とも考えられる長沢はロンドンより24歳年上で、藩命により、13歳でイギリスに渡った。その後彼はさらにアメリカに渡り、1875年にカリフォルニア州サンタローザにやってきた。ロンドンの生まれる前年のことで、サンタローザは、後にロンドンが永住することになるグレン・エレンのとなり町である。

長沢は世紀が変わるとワイナリー経営で成功し、〈カリフォルニアのぶどう王〉と呼ばれるまでになった。カリフォルニア農業の開拓者であり、日米交流の始祖とも言われている。その長沢と1904年に移り住んだロンドンを直接つなぐ糸は、当時の新聞報道をはじめとしていくつも存在する。来日経験のあるロンドンだが、本物の侍に会ったことはないわけで、生涯日本国籍を捨てず日本刀の居合いを忘れなかった長沢もまた、黒木同様、典型的な日本のサムライ像をロンドンに強く印象づけたと考えられる。先程述べた『チェリー』には、まさに黒木や長沢を思わせる人物〈ノムラ・ナオジロウ〉が主人公チェリー（さくら）の重要な相手役として登場している。

一方でロンドンは、日本の社会運動や文学に大きな影響を与えている。最初は主に社会主義者としての影響であった。代表作『野性の呼び声』の出た1903年（明治36）にすでに社会主義者片山潜によって〈社会主義の小説家ジャック・ロンドン〉として日本に紹介されたロンドンは、大正初期までの間幸徳秋水や堺利彦によって高く評価され、社会運動に少なからず影響を与えた。しかしロンドンの死去する1916年前後になるとロンドンの作家としての人物像やその文学に対する関心が次第に深まることとなったのである。そしてこの後昭和初期にかけて、堺が『野性の呼び声』の初の完訳を1919年（大正8）に出して以来、二大作品（『野性の呼び声』『白い牙』）の著者（動物作家）としてのロンドン評価が定着するとともに、労働文学やプロレタリア文学の作家達にも大きな影響を与え、幅広い作家としてのロンドン像も次第に広がっていった。

敗戦後には、アメリカ（文学）に対する関心の増大に伴ってロンドン文学研究も急速に発展し、1970年代頃までにはロンドンの古典作家（動物作家、少年文学作家）としての評価が定まっていった。この時期に影響を受けた作家としては、新田次郎、堀口大学、司馬遼太郎などがいるが、特に強く影響されたのは戸川幸夫と椋鳩十である。戸川はロンドン文学の原点とも言えるカナダの極北に位置するクロンダイク地方を訪れたほどの惹かれよ

うであった。

しかし、ロンドンの椋鳩十に対する影響もこれに優るとも劣らず、しかもそれが日本の環境文学の扉を開くことになったと考えるとき、ロンドンの椋への影響は特筆されねばならない。また、鹿児島出身の長沢鼎が幾分かロンドンに影響を与え、そのロンドンが鹿児島の作家椋鳩十に大きな影響を与えたことは偶然にすぎないかもしれないが、〈異文化の導入〉という観点から見ると案外重要な意味を持つようにも思われる。

ロンドン生誕百周年の1976年以降は、本国アメリカで再評価の波が起こり、これに呼応して日本でも再評価が始まった。それは現在も確実に進行していて、ロンドンの様々な側面が明らかにされつつあり、翻訳が続けられ、研究が進んでいる。また、今をときめく人気作家村上春樹もロンドンに惹かれる作家のひとりである。

5.2.　ジャック・ロンドンと椋鳩十

これ以降の論述をより明確にするために、ロンドンと椋の深い関係も今一度簡単に振り返ってみたい。

ロンドンより29歳年下の椋鳩十(1905-1987)は、ロンドンに強く惹かれ、その強い影響下で作品を書いた作家である。長野に生まれた椋は、1924年（大正13）に飯田中学校に入学するが、この中学校時代にロンドン作品に触れたのである。それはもちろん『野性の呼び声』であり『白い牙』であったが、彼は特に『白い牙』に惹かれた。そしてその関心は法政大学に進んで文学を志すようになっても燃え続け、ロンドンのルポルタージュ『奈落の人々』やロンドン研究者以外は知らないマイナーな南海もの短篇集『南海物語』などを読み続けた。

椋の作品を読んでいくとロンドンの影響がふんぷんとしていることに気付く。どれほどロンドンに憧れていたかを感じ取るのはたやすいが、さらに読み進み分析を続けていくと、日本の現代文学へのロンドンの、そしてアメリカのリアリズム文学の影響が読みとれるように思われるのだ。教科書にも載っていて椋の特徴とも思われている動物文学は、そのストーリーや個々の場面は言うまでもなく、〈野性〉や〈本能〉、そこから生まれる〈生命力〉への強い関心といったテーマの点でも模倣し、ロンドンの〈生き残りの論理〉を受け継いでいる。つまり椋はロンドン同様、自然の中で野性を活かし生命力を得て生き抜き、愛情をも獲得して王者となるという考え方を自分の創作上のメインテーマとしたのである。

しかしここからが椋の面目躍如なのだが、彼はロンドンのテーマを受け継ぎつつ一方で自分らしい個性を打ち出してロンドンとは違う新しいテーマを生み出したのである。すなわち、椋独特の反骨精神や動物との平等意識、楽天主義、日本的な〈和〉の精神などを融合して〈自然との共生〉という現代的なテーマを完成したのだ。これは椋流の社会意識として、人と動物の交流を描く「金色の足跡」や権力への批判を込めた『マヤの一生』などの主要な作品にも現れているが、開発の波に追われる猿を描いた「野性の叫び声」やゴミ問題にいち早く取り組んだ「におい山脈」、身勝手な人間達に翻弄されるカッパを描いた「ガラッパ大王」などは、みな1970年代頃に書かれていて、アメリカで1960年代後半以降新しいジャンルとして成立した〈環境文学〉をいち早く取り入れたものとなっている。ロンドンの文学もこの視点で読み解くことが出来るが、椋はロンドン以上に直接環境問題を

扱ったし、自然との共生についてもロンドンよりたくさんかつ具体的に描いた。

二人の違いは、椋がロンドンとは違って楽天主義者であったことやロンドンより動物に近い位置にいたことなどだが、〈自然との共生〉のテーマの点ではロンドンがついに描きえなかったところまで到達することとなった。それは椋唯一の大長編小説『野性の谷間』においてである。これは里の猟師が野生の動物達と交流するうちしまいには彼らとともに森の奥に消えていき、死ぬまで仲良くともに暮らすという話だ。つまり、文明の中にあった猟師が先祖帰りして野性の人間となったということである。ロンドンは『野性の呼び声』に典型的に見られるように動物が先祖帰りする様子は巧みに描いたが、人間を先祖帰りさせる描写についてはあまり上手に描けていないように思われる。したがってこの『野性の谷間』はロンドンからの文学的発展を最も明確に示すだけでなく、文明の発展に反省を促す上質の〈環境文学小説〉となっているとも言えよう。

椋が作家人生の比較的早い時期に書いた〈山窩小説群〉は彼の作品の中でもあまり知られていないが、ロンドンとの関係ではかなり重要である。一つにはこれらも動物文学同様にロンドン流のテーマを意識して書かれているということであり、もう一つは、これらがロンドンの『南海物語』の強い影響で書かれたということである。南海もの短篇集『南海物語』(1911)はすでに述べたようにロンドン作品としては比較的マイナーなものであって、翻訳もあまり出たことはない。南洋の先住民達とこれを支配しようとする白人達との関わりや戦いを描いた短篇8編から成っていて、巧みなストーリーの中に生命力が躍動しロマンが溢れている。

椋はこの作品を法政大学在学中に初めて訳出された翻訳書で読んで魅せられ、山地の育ちであったが南洋に思いを馳せ、ついには卒業後も故郷の長野に帰ることなく南をめざすことになり、鹿児島にたどり着くことになる。椋は「ロンドンの『南海物語』を読んで鹿児島にきた」という言葉を講演や対談や文章の中でたびたび使っているが、それだけではなく山窩小説群自体がこの作品のダイナミズムやスリルをまねて書かれていることは間違いない。さらに椋はロンドンにはない〈感動的なロマン〉や〈人間の野性〉も描き込んでいて、やはりただ者でないことがわかる。

椋が『南海物語』を読んでいたことは、彼がよほどロンドンを好きだったということを証明するだけではなく、椋が古典的な動物作家としてしか一般には知られていなかったときに、ロンドンの動物作家以外の顔までも知っていたということを示している。しかし椋がロンドンのさらにマイナーな作品まで読んでいたこともすでにわかっているのである。

5.3.　ジャック・ロンドンの「戦争」

椋と短編「戦争」（“War”）の関係を見る前にロンドンのこの短篇について整理しておこう。「戦争」は1911年10月発行の雑誌『現代文学』（*Current Literature*）の第51号に掲載され、のちにセンチュリー社刊行の短篇集『夜に生まれたもの』（*The Night-Born*）(1913)に収められた。この短篇集には表題作と「戦争」の他８編が収められている。「戦争」が書かれたのはおそらく1900年代後半のことと思われ、ロンドンが日露戦争の取材で来日し最前線に出かけたのが1904年であったことを考え併せると、この時の経験がこの作品執筆に影響していると考えても不思議ではない。

「戦争」のあらすじは次の通りである。
［第1部］真っ昼間の戦場で一人の若い兵士が偵察のため森の中を進んでいた。丘をおり森を抜けると空き地へ出た。道は川を越えて続いていたが、敵がいるのではと怖かったので空き地の縁を回っていったところ農家が見えた。人の気配がないので彼は馬をつないで水を飲みに小川へと歩いていった。対岸を警戒して見ているとふいに茂みから褐色の無精ひげを生やした男が現れた。撃ちそこなうような距離ではなかったが、あえて彼は撃たなかった。男は水をくんで茂みの中に消え、若者ものどを潤してから馬に戻り空き地を横切って森に入って行った。
［第2部］別の日、若き兵士は馬で空き地に建つ農家へとやってきた。そこには戦闘のあとが見られた。彼は馬を厩につなぎ果樹園に入っていった。実ったリンゴをいくつももいで袋に入れ馬に乗ろうとしたとき、ひずめの音が聞こえた。12人ほどの騎馬兵がこちらへ向かってきたので若者は馬に乗って待機した。靴音が聞こえると彼は一気に飛び出し、銃弾をかいくぐって森へと一目散に逃走した。銃声が止んだのでしてやったりと振り向くと、追っ手がかかっており、一方であの無精ひげの男がひざまづいて銃を構え自分にねらいを付けているのが見えた。若者はなおも森へと急いだが、あと180mというところで撃たれて即死した。リンゴが飛び散り、それを見た敵兵たちは予想外の展開を笑い、射撃のうまさを喝采して拍手した。
「戦争」はロンドンの研究者のあいだでも決してメジャーな作品ではない。研究者のこの作品への言及も少ない。しかし、ラス・キングマンは『写真版ジャック・ロンドン伝』の中で、ロンドンの短篇の「最上作のうちの二篇」として「戦争」と「メキシコ人」を挙げているし(Kingman1979：244)、ジャックリーン・タヴァーニエ‐クーバンは「ジャック・ロンドンのユーモア」の中で、ロンドンが運命の皮肉を扱った作品の例として2つ挙げるに際して「焚き火」と並んで「戦争」を紹介している。彼女は、「戦争」は決して陽気で愉快な話ではないがと断った上で、その〈皮肉〉は圧倒的だと言い、若き兵士が自分自身の人間性の犠牲になり命を助けてやったまさにその男によって殺されたことにこの作品の辛らつな皮肉がある、と述べている(Tavernier-Courbin1995：256-257)。
日本における数少ない「戦争」の読者の一人でロンドン研究の草分けである中田幸子は、『父祖たちの神々』の中で、

> 「戦争」は和気律次郎が前に訳したが、ロンドン自身気に入っていたという小品で、二十代の無名　の青年が戦場で体験する生と死――死も彼自身の死である――を描いている。絵画を思わせるような　情景描写の行間にこめられている作者の反戦の主張が、和気や前田河の目にとまったのであろう(中田1991:153)

と述べているが、和気と前田河とは、あとで詳しく触れるが、きわめて早い時期のロンドンの紹介者として知られる人物である。たしかに、小品ながらよくできている作品で、ペーソスと余韻があって、「シナーゴウ」や「ただの肉」や『試合』などに共通するロンドンお得意のテーマの一つ〈運命の皮肉〉が、感情を抑えた冷静な筆致で淡々と描かれている。キングマンが一般に評価の高い「メキシコ人」と同列に扱っているのは最大級の賛

辞で、そこまでかどうかは別として、人生や人間の本質を考えさせるには十分な質の高さを持っていると言えよう。

5.4.　椋鳩十の「戦争」をめぐる講演

椋がロンドンの「戦争」について触れていたのは講演においてであった。このことがわかったことで椋のロンドンへの思い入れの強さはもちろんのこと、新たな事実までが明らかになった。この講演は「実践学園主催　芸術選奨文部大臣賞受賞記念講演会」で、彼が亡くなる４年前の1983年（昭和58）7月2日に鹿児島市の鹿児島市民文化ホールで行われた。演題は「私と文学」であった。当時78歳の椋はこの年の3月に同賞を受賞しており、この講演はのちに『芸術選奨文部大臣賞受賞記念　特別講演　私と文学　椋鳩十』（全28頁）としてまとめられた。「昭和58年10佳日発行」となっており、椋鳩十文学碑建立委員会が刊行している。〈非売品〉とあり、一部の関係者だけに配られたらしい。事実この冊子を筆者に提供したのは、椋の教え子でありかつ親戚にも当たる畠中信子である。

この講演は、1978年（昭和53）まで椋が勤務していた鹿児島女子短期大学を経営する学園が主催し、一般向けに開催されたもので、約千人の市民が聴き入ったと当時の新聞が報じている。[1]ところで、椋のこの日の講演の何と三分の一弱がロンドン関連の話であった。しかも話のトップがロンドンで、自分が鹿児島にきた理由がロンドンに関係していることをほのめかすことから始めて延々とロンドンについて語っているのである。「私と文学――ジャック・ロンドンを中心に――」と銘打ってもよさそうな講演だ。

そのロンドンについての言及部分を見てみよう。椋はまず、ジャック・ロンドンがどういう作家であるか簡単に説明する。（椋（講）1983：3）それからいよいよ「戦争」の話に入っていく。（椋（講）1983：4）法政大学を卒業する二、三ヶ月前にロンドンの短篇集（翻訳）の形で読んだと言うから、それは1929年（昭和4）末～1930年（昭和5）初め頃になるであろう。それはちょうど彼が『南海物語』を読んだ頃でもあるが、時期の点から、椋の読んだ「戦争」訳がどの版であったかが判明する。さらに彼は「ジャック・ロンドンという人は日露戦争のころ、アメリカの従軍記者として満州に渡って、戦争のようすを書いていたのでございます」（椋（講）1983：4）と続けて、一方でロンドンの伝記にも詳しいことを御披露し、他方で「戦争」が日露戦争に題材を取っているという見解を示している。後者の意見については、すでに述べたように筆者も同感である。

このあと椋はいよいよ「戦争」のあらすじを紹介する。（椋（講）1983：4-8）短篇にも関わらず、講演録のページで3ページ強に及ぶほどの念の入れようである。しかも50年以上前に読んだとは思えないほど正確にストーリーを生き生きと語った。実は、彼はこの講演の中で一度も「戦争」というタイトルを口にしていない。忘れたのかもしれないが、とすればなおのこと、この作品がいかに印象に残っているかを示していると言えよう。また、彼の語るあらすじを読むとこれがロンドンの「戦争」であることにすぐに気がつくほど、それは正確だ。

あらすじに続き椋は、この作品の感想について「なんともいえない運命的な話、心にジーンと残る話だ。この本を読んだときに、この人は不思議な人だなぁ、動物作家だけではなかった」（椋（講）1983：8）と述べている。彼はこの作品を評価し、あらためてロンド

ンの動物作家以外の側面に思い至ったのだろう。このあとロンドンについて調べてみたそうで、どうりで伝記的事実にも詳しいはずである。椋はさらに詳しく、すなわちロンドンが貧しい生まれであることや船員になったりゴールドラッシュに参加したりしたこと、さらにイギリスのロンドンの貧民街に潜入したことや離婚したことなど、ロンドンの履歴について語った（椋（講）1983：8-9）。

椋は最後に、ロンドンは海洋物語もかなり書いているという話の流れから『南海物語』に触れ、この作品を読んで南洋に惹かれ、ついには1930年（昭和5）に鹿児島の種子島にたどり着いたという経緯を説明して、彼のロンドンへの言及を終える。（椋（講）1983：10-11）このあとはハイジやトルストイやポーやホイットマン、さらには法政大学の恩師の話などが続くが、いずれもロンドンへの言及よりも少ない。椋のロンドンへの憧憬の強さを感じずにはいられない。

5.5.　椋の読んだ翻訳の版と新たな事実

では、椋は一体誰の訳で、そしてどの版でロンドンの「戦争」を読んだのだろうか。ロンドンの「戦争」の翻訳はは現在までに3度出たことがある。初めて訳されたのは1920年（大正9）7月のことで、雑誌『新社会評論』7巻5号に掲載された和気律次郎訳の「戦争」である。和気律次郎（わけりつじろう）(1888-1975)とは、当時翻訳者や新聞記者として活躍した人で、きわめて早い時期(1914年6～7月)にロンドンの翻訳を日本に紹介した人でもある。

2度目は翌1921年(大正10)9月で、同じく和気律次郎訳であった。したがって前年のものとほぼ同じ訳であったと思われるが、こちらの「戦争」は和気個人訳のロンドン翻訳短篇集の中の一篇として収められていた。天祐社刊『強者の力』がこの翻訳短篇集で、総ページ数は231ページに及ぶ。収録短篇は、「強者の力」「全世界の敵」「無比の侵略」「甲板天幕の下にて」「ジオン・ハアネッドの狂気」「リット・リットの結婚」「デブスの夢」「戦争」「狭溝の南側」「生命の法律」（タイトル名は当時のまま）の全10篇である。

3度目に世に出た「戦争」訳は、前田河廣一郎の「戦争」である。これは、1928年(昭和3)1月に雑誌『文芸戦線』の5巻1号に海外社会文芸作品二篇のうちのひとつとして掲載されたものだ。前田河廣一郎（まえだこうひろいちろう）(1888-1957)は当時のプロレタリア作家の一人で、創作や評論で活躍した人だ。ジャック・ロンドンやアプトン・シンクレアの日本への紹介者としても知られている。

さて、では椋鳩十が読んだのはこのうちのどの版であったのか。すでに述べたように、彼は「戦争」を、法政大学を卒業する二、三ヶ月前(1929年末～1930年初め頃)に東京神田の古本屋で見つけて読んだと講演の中で証言している。（椋（講）1983：4）そうすると上記の三つのどの訳も可能性があることになるが、実は、椋は同じ証言の中で「ジャック・ロンドンの短篇集というのが目につきました」（椋（講）1983：4）と言っているのである。彼が読んだ「戦争」は2度目に世間に姿を現した版で、天祐社刊の翻訳短篇集『強者の力』に収められた「戦争」だったということは疑いない。

こうして椋の読んだ「戦争」がどこに載っていたかが判明したが、それ自体が彼のロンドンへの傾倒ぶりを示して興味深いだけではなく、このことが別な新たな事実をも掘り起こすこととなった。それは、椋の読んだ『強者の力』とロンドンの『強者の力』が同じも

のではないということだ。天祐社版和気訳『強者の力』は上記したとおりロンドンの短篇を10篇収めているが、これらはロンドンの出版した短篇集『強者の力』に収められている7編とは、重なりはあるものの違っているのである。

ジャック・ロンドンの短編集『強者の力』(*The Strength of the Strong*)は1914年にマクミラン社より出版された。収録作品は、「強者の力」「スロットの南側」「比類なき侵略」「全世界の敵」「デブスの夢」「海の農夫」「サミュエル」の7篇である。ちなみに、「戦争」は『強者の力』ではなく『夜に生まれしもの』(*The Night-Born*)(1913)に含まれていて、後者の短篇集の収録作品は、「夜に生まれしもの」「ジョン・ハーンドの狂気」「世界が若かったとき」「疑念の利益」「羽のはえた恐喝金」「げんこつのこぶ」「戦争」「甲板上の天幕の下で」「一人の男を殺すこと」「メキシコ人」の10篇である。

以上のことからわかることは、和気役『強者の力』収録の10篇のうちロンドンの『強者の力』から訳出されたものは「強者の力」「スロットの南側」「比類なき侵略」「全世界の敵」「デブスの夢」の5篇だけで、他の2篇(「海の農夫」「サミュエル」)ははずされているということだ。代わりに、和気訳『強者の力』に入っている残りの5篇として、『夜に生まれたもの』から「戦争」を含む3篇(他に「甲板上の天幕の下で」「ジョン・ハーンドの狂気」)と『氷点下の子ら』(*Children of the Frost*)(1902)から1篇(「生の掟」)、そして『男たちの信義、その他』(*The Faith of Men and other Stories*)(1904)からさらに1篇(「リット・リットの結婚」)が選抜されて訳出され、同書に収められた。和気の気に入った、あるいは高く評価した作品を選んで訳し一冊にまとめたのがこの翻訳短篇集であろう。和気もかなりのロンドン作品を原文で読んでいたことになる。そしてタイトルだけ、おそらくそこから最も多くの作品を選んだという理由で、『強者の力』とつけたのだ。

中田幸子は『父祖たちの神々』の中で、椋がロンドンの『強者の力』を読んでいると述べているが(中田1991:351)、それは正確ではない。このことは上で説明したことで明らかであるが、中田は、次のような椋の彼女宛の手紙の文面からそう信じたのであろう。

> 特に『強者の力』は、鋭い批判とともに、捨て難い詩をただよわし、短編作家としての素晴らしい才能を持っているのに目を見張った記憶がありありと心に残っています(中田1991:356)

椋のこの批評自体は間違ってはいないが、彼が『強者の力』だと思っていたものとロンドンの『強者の力』は、ずれていたわけだ。

しかし、この「ずれ」がわかったことで、椋がロンドンのどんな短篇を読んでいたかが具体的に特定できるのである。すなわち、椋鳩十は、少なくともロンドンの短篇のうち、短篇集『強者の力』から「強者の力」「スロットの南側」「比類なき侵略」「全世界の敵」「デブスの夢」を読み、『夜に生まれたもの』から「戦争」「甲板上のの天幕の下で」「ジョン・ハーンドの狂気」を読み、『氷点下の子ら』から「生の掟」を読み、『男たちの信義、その他』から「リット・リットの結婚」を読んだのだ。

これらの作品の中にはSFあり、社会小説あり、戦争ものあり、極北(クロンダイク)ものあり、原始小説あり、女性物語あり、南米を舞台にしたものまである。和気もよく選ん

だものだが、ここにはロンドンの小説のエッセンスのようなものが詰まっている。椋はこれほど多くのロンドン作品に触れていたわけで、すでに述べた『野性の呼び声』『白い牙』（これらは極北が舞台の動物小説）、『南海物語』（これは南海もの）、『奈落の人々』（これはイギリスのロンドンが舞台のルポルタージュ）や彼のロンドンについての伝記的知識を併せて考えると、ジャック・ロンドン、あるいはロンドン文学の全体像をほぼ把握していたということになろう。

5.6.　ロンドン文学と椋文学

日本の動物文学を代表する椋文学は環境文学の観点からも高く評価すべきと思われ、それが相当部分ロンドンの影響であることは日米の文学的交流史の点からも興味深いであろう。さらに椋文学の側からロンドンを見直すことは、ロンドン文学の（古典の枠を越える）環境文学としての、あるいは現代文明論としての再評価を促すことになるのではないか。

椋は講演や対談の中で幾度もロンドンに触れ、その影響が大であることを好んで告白したが、自分のライバルであるとさえ述べたことがある。また、彼は自分の小説作品「森の王者」の中でロンドンの名を出し、『白い牙』を道具立てのひとつに使っている。この小品にはウルフと名づけられた狼の子も登場し、これが人間の子供と愛情を通わせしまいには子供の命を救うというストーリーになっていて、そのうえ舞台もアラスカ、登場人物もアメリカ人と思われ、『白い牙』を強く意識して書かれていることが明白である（椋1983(本)：43-58）。

これほどロンドンに惹かれた椋の文学を見ていくとき、ロンドンの文学的影響に関わるさらなる課題がまだ残っている。それはロンドンの『南海物語』による椋の「山窩小説群」への強い影響についての分析である。遠くは、日本の有名な社会主義者にして日本へのロンドン紹介の初期の最大の功労者堺利彦が、1928年(昭和3)刊行の現代ユウモア全集第2巻堺利彦集『櫻の國・地震の國』に収められたエッセイ「山窩の夢」の中で、〈山窩〉に関わってロンドンの『野性の呼び声』を思い出すと言ったことがある。（堺1928：148）初めて読んだロンドン作品が堺訳『野性の呼び声』であったと言われる椋（中田1991：351）も、山窩の話を聞き興味を持ったときにロンドンのことをすぐに頭に思い浮かべたに違いない。

椋の山窩の世界とロンドンの南洋の世界には共通点が多く、山と海の違いはあるものの、詳細に比較することによって椋文学へのロンドンの影響がさらに明らかになって行くものと思われる。これほどまでにロンドンの影響を受けた日本人作家は他にはいないだろう。

謝辞

この論文を書くにあたって貴重な情報をいただいた椋鳩十ご長男の久保田喬彦氏と椋の教え子で椋の親戚でもある畠中信子氏にこの場を借りて感謝の意を表するものである。

注

1)1983年7月発行の南日本新聞を参照のこと。

6.　ジャック・ロンドンと椋鳩十――「戦争」と『マヤの一生』

6.1.　ロンドンに影響を受けた椋鳩十

すでに述べたことに重なる部分もあるが、動物作家あるいは児童文学作家として知られる椋鳩十（1905-1987）は、故郷の長野の中学でジャック・ロンドン（1876-1916）の作品に出会い、以来ロンドンに惚れ込み、生涯あこがれ続けた。ロンドンやその作品世界へのあこがれから、『南海物語』の世界を求めて南国鹿児島にたどりつき、結果として鹿児島に永住し、大半の作品をこの地で創作することとなった。

椋とロンドンは、『野性の呼び声』に象徴的に表れる〈生き残りの論理〉を描く点と、容赦ない自然の中で生き抜くための原始的生命力と適応力を問題とする姿勢が共通している。一方、椋はロンドンと比べると動物の擬人化を抑えているし、ペシミズムや社会主義的な部分はほとんど見られない。そういった相違点は見られるものの、むしろ両者は似ている作家だと言った方がよいだろう。椋がロンドンを手本としながら、一方でロンドンを自らのライバルとも呼んだことはその意味で興味深い。

ロンドンから〈生き残りの論理〉を受け継いだ椋は、〈自然との共生〉という独自のテーマを創り出した。そもそも厳しい軍国主義の時代の中で規制から逃れて好きなことを書くために動物を扱うことにした椋であったが、そのことが逆に大いなる自然と愚かな人間の関係を見直し、文明の問題に目を開かせることになった。この点もロンドンとの重要な共通点の一つで、まさに椋は、先見性の高いロンドンの文明への懐疑を彼以上に深め、作品の中でロンドン以上に広く扱ったのである。

21 世紀の現在、環境や自然の問題を視野に収めることは多かれ少なかれ全ての作家に必要なことではないだろうか。アメリカでは 1960 年代後半から〈環境文学〉のジャンルが生まれてきたが、椋はそのころすでに「大造じいさんとガン」など自然と人間の共生を問題にする作品を書き始めていたのである。まさに椋は日本の環境文学の先駆者であり、このジャンルを日本で切り開くことに大きく貢献したのである。

6.2.　ロンドンの「戦争」とこの作品をめぐる椋の講演

さて、しかしロンドンと椋の間にはほかにも共通点があったのである。それは二人のストーリーテリングの巧みさや表現力の豊かさに関わるもので、〈戦争〉という二人が共通してリアルタイムで目撃し経験した衝撃的なテーマをどう描いたかという問題に関わるものだ。そしてこの問題は、椋が 1983 年に鹿児島市で行った前述の芸術選奨文部大臣賞受賞記念講演会で語ったことを見るとき、初めて明らかになったと言っても過言ではないだろう。

ロンドンの短編「戦争」（“War” 1911）は、研究者の間ではよく知られている作品ながらその評価は今まで決して高くはなかったし、この作品に触れた批評は数えるほどしかない。かなり完成度の高い作品でロンドンらしい運命論や人生の皮肉が描かれていて、もっと注目すべきものであると思われるのに、不思議なことである。

さらに、「戦争」はロンドンが生涯にわたっていくつも書いてきたいわゆる〈日本もの〉の作品の一つでもあり、ロンドンの日本への関心や日本的、すなわち武士道的思想への関心をも考えさせる一編である。しかも、「戦争」が日露戦争を背景に書かれていることを示唆したのは、おそらく世界で椋が最初なのである。彼は「私と文学」と題する講演の中で「戦争」をあらすじまで語って紹介し、ロンドンが日露戦争の取材で日本や朝鮮を訪れていたことも明らかにする。

椋はこの講演の中で「戦争」を作品として高く評価し、「ロンドンは動物作家だけではなかったのだ」と述べている。ある意味でロンドンらしくないこの作品を半世紀上前の大学生時代に読んだ感激を、生き生きとかなりの時間を費やして語った椋にとって、「戦争」はよほど印象深い作品だったのだろう。「なんともいえない運命的な話、心にジーンと残る話だ」（講演録より）と言っていることからもそれは明らかだが、実はこの作品がもっと強い影響を椋に与えたのではないかというのが、この章の課題なのである。

ところで、椋がどの版でこの作品（の翻訳）を読んだかが分かっている。そしてそのことにより、椋が今まで知られていた以上にロンドン作品を読んでいたことも判明しているのだ。彼がロンドンの「戦争」を読んだことや自分の講演でこの作品に大きく触れたことが、さらに 2 人の共通点や影響関係を明らかにし、ロンドンの新たな〈日本もの〉を発掘することになり、2 人の新たな共通点の発見や力量評価につながったことは実に豊かなことであったと言えよう。

ところで、これまでの章では触れてこなかったが、「戦争」を〈日本もの〉と断定した根拠は何なのか、ということに触れておきたい。確かにロンドンは作品の中でも手紙の中でも、この作品が日露戦争に取材したものだとは言ってはいない。しかし椋は上記の講演の中で、ロンドンの「戦争」の内容を説明した直後に、ロンドンが日露戦争時に従軍記者として来日し戦争の様子を文章にしていたことを紹介している。つまり椋は、ロンドンの「戦争」が日露戦争に題材を取っているとの見解を示しているのだ。確かに、ロンドンが 1911 年以前に直接戦争を体験したのは日露戦争以外にないし、1904 年に体験した日露戦争を題材にして――「黄禍論」などを発表して日本へのヒステリックとも言える批判を浴びせた時期からかなり経過してから――客観的な目でこの作品を書いたと考えるのは自然で、他の戦争が元になっているとは考えにくい。

さて、作品の内容に目を移してみよう。主人公はいわゆる斥候兵である。彼の眼についてロンドンは、話の初めから、しかも 2 度にわたって black eyes（London1911：1726,1729）と表現している。また、彼を撃ち殺すことになる敵兵の重要人物は、ginger beard（London1911：1728,1730,1731）をたっぷりたくわえた男で、そのことにも全編で 3 度にわたって触れている。彼ら敵兵は騎兵であることも示されているほか、主人公と敵兵がかなり関係の遠い外国人同士であることもほのめかされている。（London1911：1729）当時のロシア兵の写真などを見ても、敵兵はコサック騎兵であることは容易に推察される。したがって、前述した時系列の点を合わせて考えると、この戦争は日露戦争であることが極めて有力で、黒い眼の斥候は日本兵であることもほぼ確信される。

主人公の関心は主に北の方向にあり、また彼の耳には、西方で味方の大きな部隊が戦闘をしている鼓動が聞こえるとも書かれており(London1911：1727)、これは、朝鮮半島を北上した第一軍にロンドンが従軍した日露戦争の構図に符合している。このような点からすると、椋も考えたように、「戦争」が日露戦争を題材に取った作品であることはまず間違いない。とすれば、日本人の主人公の行動と数奇な運命を扱ったこの作品は、その内容と併せてまさに〈日本もの〉作品と呼ぶにふさわしいのである。

6.3. 「戦争」と『マヤの一生』の比較から見えるもの

『マヤの一生』(1970) は傑作であり、椋鳩十の代表作のひとつである。家族の一員として深い愛情の中で育ててきた愛犬のマヤが、激しくなる戦争の中で官憲に差し出すよう命じられ、家族の抵抗むなしく憲兵によって撲殺されてしまうという物語だ。この作品は〈動物と人間の間の深い愛〉と〈動物の生命力〉がテーマである。感動的なストーリーと効果的なエピソードによって技巧的にも円熟味を感じさせる作品で、いくつもの版があり、アニメ化もされた。とりわけ、瀕死のマヤが這いつくばりながら飼い主の家まで戻ってきて一番可愛がっていた二男の下駄の上で息絶えるシーンは、実に感動的であり、それだけでなくロンドンばりの〈原始的生命力〉をも見事に説得力をもって描き切った。

一方、ロンドンの「戦争」は、ロンドンらしく〈人生の皮肉〉がテーマである。2部構成で同じ場所で起こった別々の日の出来事を描くことで、同じ人物同士が第1部では命を救う関係にありながら第2部では命を奪う関係に逆転するという皮肉を、効果的に描き出すことに成功した。ここには、人生はいつもどう転ぶかわからないもので不条理なものだというロンドンの思想が流れていて、無常の情感が漂う。また、テーマとは別に日本人の主人公にはなにやら武士道の気配が見て取れる。そこもまた〈日本もの〉と考える所以である。彼はまさに〈武士の情け〉をもって老兵を見逃すのであって、殺し合うのが仕事で殺さなければ殺されるのが掟の戦争において日本人以外の人間がそんなことをするとは考えにくい。武士出身の兵士、それも戊辰戦争を戦った薩摩藩などの出身の兵士が多かった日露戦争だったからこそとも言えるかもしれない。

さて、このようにテーマの違う「戦争」と『マヤの一生』の比較から何が見えるのだろう。それは両作品の共通点であり、そのことからわかる影響関係であり、ロンドンと椋の共通点である。

では、両作品の共通点とは何か。それは、どちらもむごい本格的な戦闘場面をあえて描かないで、むしろ比較的静かに〈皮肉〉という技巧を使って効果的に絶対悪としての戦争の不条理を訴え得た、ということである。ロンドンの「戦争」には確かに銃火が出てくるが、よく読んでみると実は主人公が敵の騎兵たちに一方的に射撃されるだけである。〈交戦場面〉とか〈戦闘場面〉をどう定義づけるかによっても違ってくるが、筆者は、これは戦闘場面とさえ呼びがたいと考える。また、たとえそう呼ぶとしてもそれは〈一方的射撃に限られる、ごく短時間で軽度の戦闘〉と言えよう。まさに、「戦争」は戦闘場面の直接的な残酷さではなく、助けてやった敵兵によって自分が殺されるという〈皮肉〉によって戦争の不条理を描き切ったのである。

一方『マヤの一生』には戦闘場面は皆無である。ただ、戦争を肌で感じさせるエピソードがあるにはある。それは、特攻機が畑に突っ込むという場面（椋 1981：89-93）である。乗っていた若い兵士は、駆けつけた軍人の鞭打つ言葉をうけて、炎に包まれつつ果てていくというものだが、これはどんな戦闘場面よりも効果的に戦争の非情さを突き付けるものである。

『マヤの一生』にはほかにも印象的で効果的なエピソードがある。それはオキヌ婆さんと彼女の飼い犬である老犬との別れの場面（椋 1981：80-84）である。2 人の子供を戦争で亡くしオキヌ婆さんは独り暮らしで老犬だけが家族であったが、容赦のない官憲はこれをも奪う。婆さんと老犬の別れは、彼女の優しさと悲しみを抒情的に描き、戦争の無情さを十二分に訴えかける。しかしなんといっても最も効果的なのは、最後の場面（椋 1981：102-104）である。すでに述べたように、棒で官憲にしたたかに殴られて死んだと思われたマヤが、息絶え絶えで這いつくばりながらかなりの距離を飼い主の家まで戻ってきて玄関で息を引き取るわけで、そこには飼い主を思うマヤの強い愛情と動物の持つ原始的生命力が表れている。

では、ロンドンばりの原始的生命力を感動的かつ効果的に描いたことで何が示され訴えかけられたのだろう。それは、官憲が死んだと思っていたマヤがどっこい生きていて、極めて強い生命力を示した、という〈皮肉〉である。それと同時に、飼い主との愛もそう簡単に奪えるものではないことをも示して、『マヤの一生』は十分に戦争の不条理と絶対悪を告発しえたのである。出版年に約 60 年の開きがある両作品には意外に大きな共通点があったのだ。

それでは、両作品にこういう共通点があると分かったことで何が見えてくるだろう。それは一つの仮説である。椋が『マヤの一生』を書く際にロンドンの「戦争」から強い影響を受けたのではないかということだ。椋がロンドンから強い影響を受けたことはすでに明らかだが、『マヤの一生』が直接的に「戦争」の影響を受けたとすればそれはさらに興味深い。すでに見たように椋はロンドンの「戦争」を高く評価しているし、上記のようにテーマや技法やストーリー展開の方法に強い共通点が見られる。年月は隔たっているが、椋が「戦争」のことを講演で語ったのは 1983 年のことであって、その記憶も極めて鮮明であったことを考え合わせるとその影響関係は疑いないと思われる。

ただ、戦争そのものの描き方としては椋の方が巧みで情感も深いだろう。ロンドンの関心は主に運命論であって、戦争そのものではなく、結果として戦争の不条理が描き出されたと言える。これに対し、椋はこのロンドンの描き方を自らの作品の基本構造として、さらに胸に迫る形で戦争を描き出すことに成功した。これは、やはり同様に全く戦闘場面を描かずに戦争の絶対悪を余すことなく描き出し、これを現代社会の抱え込む病弊でもあると指摘したウィリアム・スタイロンの『ソフィーの選択』（1979）にも通じるもので、戦争を描く〈現代的手法〉を示したものと言えよう。

では、こうしてみてきてわかるジャック・ロンドンと椋鳩十の作家としての共通点とは何か。これはまず、両者の作家としての高い力量である。ストーリーテリングの秀逸さと技法の卓越さと言い換えてもよいだろう。ロンドンと椋に限ったことではないにせよ、二人が疑いなく作家的力量の極めて高い作家であることが「戦争」と『マヤの一生』

の比較からだけでもわかることは興味深い。また、これらの作品は〈文学の可能性〉や〈文学本来の力〉を感じさせるにも十分な作品でもあると考えられる。

7.　ジャック・ロンドンと薩摩文人――宮原晃一郎と山本実彦（さねひこ）の場合

7.1.　ジャック・ロンドンと薩摩

ジャック・ロンドン（Jack London, 1876-1916）と薩摩(鹿児島)の関係について、筆者はすでにいくつもの論を展開してきた。それは、大きく分けると、薩摩の武人たちのロンドンに対する思想的な（結果的には文学的な）影響に関するものとロンドンの薩摩の文人たちに対する思想的・文学的影響に関するものである。前者については、幕末の薩摩藩英国留学生でのちにカリフォルニアに永住し〈カリフォルニアのブドウ王〉と呼ばれるまでになった薩摩藩士長沢鼎（1852-1934）と、武士の生まれでのちに日露戦争の第一軍の司令官として大活躍した陸軍大将黒木為楨（ためもと）（1844-1923）の薩摩武士道の影響を、後者については、今までは、動物作家、児童文学作家として知られる鹿児島の作家椋鳩十（1905-1987）に対する影響を主に解明してきた。しかし、こうしたロンドンと鹿児島の関わりを調べるなかで、新たな文学的関係に行き当たることになった。

そもそもジャック・ロンドンは日本に縁のある作家で、当時としてはかなりの知日家であったと言えよう。すでに述べたが、彼には実際に来日経験が 2 回あり、実現はしなかったが、3 度目の来日計画もあった。処女作が〈日本もの〉作品なら未完の遺作長編も〈日本もの〉で、生涯にわたって〈日本もの〉を書き続けた。その数は 10 作を越え、日本（人）が出てこなくても、日本的なあるいは武士道的な価値観の感じられる作品もいくつかある。彼の日本への偏見の存在も否定できないものの、その関心の深さは注目されなければならない。ロンドンの日本的な純血意識や（薩摩）武士道的倫理・行動への関心は旺盛で、それは桜、切腹、武士の情け、忠臣蔵などから薩摩剣法自顕流を思わせる速さとパワーまで幅広いものとなっている。これはついては、図らずも彼が実際に出会った長沢と黒木の影響が大きいことは間違いない。

そういう影響を薩摩の武士から受けたジャック・ロンドンが、奇妙なことに、薩摩（鹿児島）の文人に影響を与えているという事実はまさに奇縁である。そして、その影響を受けた薩摩文人の代表が椋鳩十である。ロンドンから、多かれ少なかれ、影響を受けた日本の文人は、堺利彦、新田次郎、堀口大学、村上春樹など数多いが、その中でも最も影響を受けたのが、図らずも、共に動物作家として知られる戸川幸夫（1912-2004）と椋鳩十なのである。薩摩(鹿児島)がロンドンに影響を与え、そのロンドンが今度は薩摩(鹿児島)に影響を与える、言いかえれば〈影響を戻す〉というのは、幕末から明治の初めにかけての薩摩の影響力を考慮しても、なお非常に興味深いことである。

明治時代後半から昭和初期にかけては、ロンドンが日本で広く紹介され、多くの翻訳によって盛んに読まれることになったが、そのような流れの中にあって、じつは薩摩の文人

たちがかなり活躍していたのである。それは主にロンドン作品の翻訳出版という形で行われたのだが、このこともロンドンの彼らへの文学的影響と言えなくもないだろう。なぜなら、彼らは、ロンドン作品を多くの人々に読んでもらう価値のあるものと評価したからこそ、手間も金もかけて、翻訳・出版したのであるし、自らの作品や文章を書くさいに影響を受けた可能性もあるからである。今まで宮原の名は、わずかに『白い牙』の訳者の一人として、まさに名前が出たことがあるだけであり、山本の場合は、名前すら出たことはない。ここでは、ロンドン研究の世界ではこれまでほとんど名前の出たことのない二人の薩摩文人を紹介し、その果たした役割について検討したい。

7.2.　ロンドンと薩摩文人の新たな出会い――宮原晃一郎の場合

宮原晃一郎（1882-1945）は、1882（明治 15）年に、鹿児島市加治屋町に県庁職員の長男として生まれた。彼は幼少のころから父親の転勤で青森や北海道で暮らしたが、7 歳のときに鹿児島に戻って一時（3 年間）、祖母と生活を共にした。しかし 10 歳になると再び北海道に渡り、札幌で尋常小学校に入学する。1895（明治 28）年、13 歳の時に飛び級で 1 年早く高等小学校を卒業した宮原は、体が弱かったため、その後は正規の学校には行かなかった。14 歳で鉄道関係の事務見習生となり、翌年には札幌駅の電信技士として勤め、そのかたわら、夜学に通って勉強した。

ところが 18 歳でまた肺を病んで、自宅療養を余儀なくされて職を辞すことになる。しかし、これを機に、宮原は宣教師のもとで英語と聖書の勉強を始めることになるわけで、この時に英語を勉強したことが、のちに外国文学に触れることにつながるのであるから、何が人生を変えるかわからないものだ。2 年ほど療養して健康を回復した彼は、キリスト教系の新聞の記者となり、さらに 1905（明治 38）年、23 歳の時に小樽新聞社の記者となったが、実はここからが外国の文学や文学者と出会う時代へと入って行くことになるのである。つまり、記者をするかたわらで、宮原は外国文学を読みあさったのだが、翻訳ではなく原文で読みたいと思うようになり、英語を基礎にしてドイツ語、フランス語、ロシア語、イタリア語などをつぎつぎと学んだのである。したがって、このあたりで複数のジャック・ロンドン作品に出会ったものと推察される。

ところで、1908（明治 41）年、26 歳の時に、現在から見ると宮原にとって最も大きな出来事が起きる。文部省の詩の懸賞募集で、彼が応募した「海の子」が佳作に当選するのだ。これは有名な「われは海の子」の歌詞であり、世間的には主にこの歌の歌詞を作ったことで彼は評価されているのである。だが、彼が多くの外国作品を翻訳で日本に紹介し、そのうえいくつもの小説や評論を書いている多作な文人であることはほとんど知られていないと言ってもよい。

さらに、1910（明治 43）年、宮原 28 歳の時に、ジャック・ロンドンにかかわる重要な出会いが生まれているのだ。つまり東北帝国大学農科大学（札幌農学校の後身で、北海道大学の前身）教授であった有島武郎と親しくなるのである。有島は、札幌で『野性の呼び声』（*The Call of the Wild*, 1903）をテキストとして使用し、この作品が堺利彦によって日本で初めて翻訳出版されるさいに少なからず関わりを持ち、その堺の『野性の呼び声』（1919 年）にはかなり長めの「あとがき」を寄せているのである。札幌ではロンドンがかなり読

まれていた可能性もあり、このこととあわせて考えると、有島からの影響で宮原がのちにロンドン作品を翻訳出版することになるのではないかという推察の信憑性は極めて高い。なお、有島武郎との親交は、宮原が『小樽新聞』に有島の連載を依頼するなど、1923（大正 12）年に有島が自殺するまで続いたようである。

もうひとつ、見落としてはならない出会いがこの年（1910 年）に起きている。それは足助素一（1878-1930）との出会いである。足助はのちに叢文閣という出版社を興す人物で、この叢文閣こそが上述した『野性の呼び声』の堺による初訳を出版した会社で、同じく堺訳の『ホワイト・ファング（白牙）』（1925 年）も出版している。やはり当時の札幌にはロンドンに関わる環境が存在していたのであろう。そしてじつは、宮原がロンドン作品の翻訳を出版するのも叢文閣からなのである。当然足助との交流があったからこそ可能になったことであろう。なお、往々にして『白い牙』（*White Fang*, 1906）の初訳も堺の手になるものと思われているようだが、それは間違っている。

1916（大正 5）年、34 歳になると、宮原は小樽新聞社を辞職し、上京して貿易商のロシア部に就職してロシアとの貿易の通訳や翻訳に携わるが、この頃から作品を執筆する生活に入ったようである。1918（大正７）年 10 月、36 歳の時に、小説の処女作「薤露に代へて」を『中央公論』に発表した彼は、この後は続けて多種多様な作品を発表し続けるのである。そしてそれは 1944（昭和 19）年、62 歳の時に体を壊し、翌 1945（昭和 20）年 6 月に、戦争の激化に伴って北海道に疎開するために、上野駅を出発後、列車の中で 63 歳で死去するまで続いたのである。宮原の作品は、小説、翻訳、童話、随筆、評論、紀行と多彩で、長短あわせるとざっと 80 作を越える。[1)]

さて、宮原のそんな多作・多彩な作家生活のごく初期に、彼の初出版作として叢文閣から出版されたのが、ジャック・ロンドンの『白い牙』の翻訳である。彼がまだ 3 作しか書いていなかった 1920（大正 9）年、38 歳の時に、それは『野性より愛へ』というタイトルで、ハウプトマンの『織匠』の翻訳と共に、世に出た。このタイトルも、『野性の呼び声』の〈野性〉という言葉にこだわり、かつ作品のストーリーにも合致していて、なかなか凝っているが、重要なのはこの宮下の『野性より愛へ』がロンドンの『白い牙』の日本での翻訳第 1 号だということである。何と鹿児島出身の作家宮原晃一郎が『白い牙』を日本で初めて訳したのである。すでに触れたように、堺利彦が『野性の呼び声』を 1919 年に翻訳してから 1925 年の『ホワイト・ファング（白牙）』の翻訳出版まで 5 年半もかかっているわけで、堺が『白い牙』訳をもっと早く翻訳出版していてもよさそうなものなのだが、宮原がまんまと出し抜いたのだろうか。そのあたりの経過については今のところ不明だが、むしろ〈堺―有島―足助―宮原〉の交友関係が生んだエピソードと考えるほうがよさそうだ。[2)]

ちなみに、堺は、自分の訳した『ホワイト・ファング（白牙）』の「はしがき」の追記に次のように書いている。

> この書には、大正九年に出版された、宮原晃一郎氏の譯本がある。然しそれは既に絶版にもなってゐるし、私の新譯を出す妨げにはならないと信ずる。只私は宮原氏の譯本の中から、多少の便宜を得た箇所のあることを断っておく（堺 1925：2）

ロンドンの日本における紹介者として功績の高い堺が鹿児島生まれの宮原の訳から学んで『白い牙』の翻訳をしたということも面白い。また、中田幸子によれば、ロンドンから強い影響を受けた二大作家のひとりである戸川幸夫が少年時代に初めて読んだ『白い牙』は宮原の訳だったそうである（中田 1991：103)。このこともロンドンの日本文学に対する影響を考えるときに決して無視できない事実である。

しかし奇縁はこれだけではなかった。椋鳩十より7歳下で同世代の戸川幸夫が宮原晃一郎の訳で『白い牙』を読んだとすれば、椋の読んだ訳もまた宮原訳ではなかったか、ということである。もしそうなら、かなり不思議な縁である。では、椋はいつ、どこで、初めて『白い牙』を翻訳で読んだのだろう。このことについて椋はつぎのように語っている。

> それに『白い牙　White Fang』(1906)なんていうのは素晴らしい作品ですからね。それらを学生時代に読んで、非常に打たれました。何てすばらしい動物の世界があるんだろう、何て動物と人間のすばらしい世界があるんだろう。あれは、動物というより人間の世界そのものなんだね（椋 1982：217）

『白い牙』を称賛する椋の文章は他にもいくつかあるが、どうもやはりこの作品がロンドンにあこがれ始める原点になったようだ。では、椋はこれをいつ読んだのかといえば、「学生時代に」なのである。

椋の学生時代とは、飯田中学に入学した1918（大正7）年から法政大学文学部を卒業する 1930（昭和 5）年までということになるのだが、学生時代のどの段階で『白い牙』を読んだのだろう。この点にいついても、椋は、

> 中学二年の時、正木ひろし先生……が英語を教えていた。……
> 先生はホイットマン、ソロ、カーペンターの原書から抜粋してガリ版にして、授業をした。……
> 私は中でもエマーソンの『自然論』に魅せられた。……ともかく自然を背景としたものを読破していった。ジャック・ロンドンの『白い牙』に非常に感激して、ロンドンのものを片っぱしから読破していったのもこのころのことであった（椋 1989：205-206）

と書いており、『白い牙』を初めて読んで感動したのは飯田中学の2年生の時であることがわかる。正木ひろし(1896-1975) はのちに有名な弁護士になった人物で、当時、新人教師であった。正木がロンドンを椋たち学生に紹介したことはほぼ間違いないから、『白い牙』も彼が紹介したにちがいない。

ともあれ、椋が『白い牙』を初めて読んだ時期が中学2年の時期だと判明した。彼が2年生であった1919（大正8）年頃に出されていた『白い牙』の翻訳書はどんなものがあったかといえば、堺利彦訳の『白い牙』がまだ出版されるどころか『改造』にさえ掲載されていない時期だから、手に入る訳としては、なんと宮原の訳した『野性より愛へ』(叢文閣

刊）以外にはなかったのである。宮原はロンドン作品をたった 1 作しか訳していないにもかかわらず、薩摩（鹿児島）を代表する作家である椋が、薩摩（鹿児島）出身の宮原が訳した『白い牙』を読んでロンドンが好きになり、生涯のファンになり、ロンドンの姿を追いかけて鹿児島に来て、ロンドンのような作品を書こうとして、日本の児童文学を代表するような作家にまで上りつめたのだ。不思議な縁である。

7.3.　ロンドンと薩摩武人の新たな出会い―山本実彦（さねひこ）の場合

山本実彦は、1885 年（明治 18）年に、現在の鹿児島県薩摩川内（せんだい）市に生まれた。士族の家柄であった。このことが、すでに、薩摩の武士道に強く惹かれたロンドンとの因縁を感じさせなくもないが、幕末の川内領内では英学が奨励されていたことも山本の家庭環境に反映していたに違いない。こちらも彼がのちに外国文学、英米文学、そしてジャック・ロンドンに近づく一因になっているだろう。しかし、士族でありながら、山本家はかなり困窮していたようで、実彦は中学 3 年で退学している。

その後、1900（明治 33）年、15 歳の時に山本は代用教員として沖縄に赴任し、4 年間を過ごした。が、1904（明治 37）年にその職を辞して鹿児島に帰った。この時 19 歳だった彼は、知人の大臣のつてを頼って上京し、1908（明治 41）年に日本大学を卒業すると、ジャーナリストを志して『門司新聞』に入社するが、その年のうちに『やまと新聞』に移った。

その 2 年後、山本はロンドン特派員に抜擢され、1 年余りをこの地で過ごしたが、この経験が彼に与えたものは大きく、特に国際感覚を身につけたことは貴重であった。外国文学、特に英米文学に関心を持ち、これを理解していくきっかけにもなったと思われる。1911（明治 44）年に帰国した彼は、翌 1912（大正元）年には東京市議会議員に当選する。政治家に転身したわけである。ちなみに鳩山一郎は同期であった。さらに翌 1913（大正 2）年には 28 歳の若さで『東京毎日新聞』の社主となり、勢いに乗って 1917（大正 6）年の第 13 回衆議院総選挙に故郷鹿児島から立候補した。

そこまではよかったのだが、選挙のさなかに収賄容疑で逮捕・投獄され、選挙も落選する。失意の山本は同（大正 6）年中に上京するが、ちょうどロシア革命が起こり、それを受けて、ある政府筋からシベリア視察の特別任務を託され、1918（大正 7）年、33 歳の時にシベリアに出かけた。いろいろなことを経験してきた彼だったが、年内に帰国して、翌 1919（大正 8）年、34 歳の時に、ついに改造社を立ち上げ、同年 4 月に雑誌『改造』を発刊する。大正末から昭和にかけて『中央公論』（1899（明治 32）年、『反省会雑誌』を改題して発刊）と肩を並べることになる総合雑誌である。ここにおいて山本は、ジャーナリストと出版人という自分のあるべき姿を見つけたのだ。最初は売り上げが伸びなかった『改造』だが、堺利彦らの寄稿を得て第 4 号は 2 日で売り切れて危機を脱し、その後も、発禁になるなど危ないことはあったが、なんとか継続することができた。

続いて『改造』の連載小説であった賀川豊彦（1888-1960）の『死線を越えて』（1920（大正 9）年）を単行本として出版したところ、これがベストセラーとなり改造社の経済的基盤を固めることになった。また、志賀直哉の『暗夜行路』が 1921（大正 10）年 1 月号から連載されると、文芸界における『改造』の地位も定まった。順風満帆である。この勢いに乗って山本は、世界的に著名な哲学者や思想家に寄稿してもらったり、彼らを実際に日本に

招いて講演をしてもらったりした。すなわち同年7月にバートランド・ラッセル(1872-1970)に講演してもらったのを皮切りに、ジョン・デューイ（1859-1952）やマーガレット・サンガー（1883-1966)、そして 1922（大正 11）年 11 月にアルベルト・アインシュタイン（1879-1955）を招聘することに成功する。

ここでまた邪魔が入る。1923（大正 12）年 9 月の関東大震災である。『改造』の発行は続けられたが、社屋も破壊され、改造社の経済事情は悪化した。しかしこの危機を救ったのが日本初の『現代日本文学全集』、いわゆる〈円本（えんぼん）〉の登場であった。1926（大正 15）年 12 月、山本が 41 歳の時に第 1 回配本になった改造社版『現代日本文学全集』（定価 1 冊 1 円）は、当時の他の単行本に比べてかなり割安であったため大人気となり、会社の経済的な基盤を安定させた。この革命的な〈円本〉はいわゆる〈円本時代〉を招来し、日本の出版文化そのものを変革するに至ったのだ。1927（昭和 2）年以降、彼は、経営が安定するなかで、新しい出版文化を切り開くために前進した。

山本は、1930（昭和 5）年、46 歳の時には念願の代議士になった。また、同年に出版した『放浪記』（林芙美子作）がベストセラーになった。世相が戦争へと動き始めた頃の 1933（昭和 8）年に、社会主義者として知られたジョージ・バーナード・ショウ（1856-1950）を招聘したりもした。1937（昭和 12）年、1938（昭和 13）年と続けて刊行された『若い人』（石坂洋次郎作）や『麦と兵隊』（火野葦平作）はベストセラーになって、厳しくなる時代のなかで会社の経営危機を救った。しかし、戦火が激しくなるなか、当局の圧力には抗しがたく、雑誌『改造』は 1944（昭和 19）年 7 月に 6 月号をもって廃刊を余儀なくされ、改造社も解散した。終戦後 1946（昭和 21）年 1 月号から『改造』は再び復刊されるが、これはあまり続かず、1955（昭和 30）年の 2 月号をもって終刊している。この間、山本は、終戦後初の総選挙で再び当選したり、公職追放の憂き目にあったりと、なおも波乱万丈であったが、1952（昭和 27）年 7 月に胃ガンで死去した。67 歳であった。[3)]

では、山本とロンドンの具体的なつながりを見ていこう。改造社のロンドン作品出版は、1919（大正 8）年 7 月から 1941（昭和 16）年 10 月まで 22 年の長きにわたって行われた。ロンドン作品の日本における普及に果たした功績はかなり大きいと言えよう。一方、すでに述べたように、雑誌『改造』が創刊され改造社が発足したのが 1919 年 4 月で、『改造』が廃刊され、会社も解散するのが 1944 年 7 月のことであるから、いわば山本の改造社のほぼ全歴史を通じて、ロンドンは出版され続けたことになるのである。他にもロンドン以外の数多くの作品が改造社から出版されたとはいえ、このことは、山本がいかにロンドンに関心を持っていたかを物語るものである。

改造社のロンドン作品出版の経緯はつぎのようである。改造社が最初に手掛けたのは『どん底の人々』（*The People of the Abyss*, 1903）であった。これはロンドンのルポルタージュで、彼の代表的な数作品の一つである。イギリスのロンドンの貧民街イーストエンドにロンドンが実際に潜入して実態を暴いたものである。ロンドンを紹介するのにこの作品から始めたところに山本の社会意識の高さや政治性が感じられる。この改造社の出した翻訳がこの作品の日本初訳ということになるが、ただしこの出版は単行本の形でではなく、1919（大正 8）年 7 月にこの作品の第 3 章までの翻訳（辻潤訳）を雑誌『改造』に掲載しただけのものであった。

つぎに山本が扱ったロンドン作品は『白い牙』(*White Fang*, 1906) であった。これもまた『改造』への連載だったが、すでに触れた宮原晃一郎訳『野性より愛へ』が叢文閣から単行本で出版された〔1920 (大正 9) 年 4 月〕のに遅れること 1 年、1921 (大正 10) 年 3 月から 9 月まで 6 回にわたって堺利彦が訳出したものである。 容易に想像できることながら、社会意識の高い山本は堺と交流があったようで、〈山本―堺―有島―足助―宮原〉という関係があった可能性は十分にある。したがって、同郷の山本と宮原もどこかで会っていて、知人同士であったかもしれない。今のところそれを示す資料はないが、今後出てくる可能性もあり、事実だとすると大変興味深い。

改造社のつぎのロンドン関連出版は、やや間 (7 年半) が空いた後の、1929 (昭和 4) 年 2 月のことであった。そしてそれは、満を持しての堺利彦訳『ホワイト・ファング (白牙)』の改造文庫版の 1 冊としての刊行であった。なぜ時間がかかったかは不明だが、改造文庫を開始した時に山本がぜひロンドンを入れたいと考えた可能性はある。事実、この後、続けて同年 12 月に和気律次郎訳『奈落の人々』(*The People of the Abyss,* 1903) を改造文庫から出している。この作品の翻訳を 10 年の間に 2 回も出しているところに、山本のこの作品へのこだわりを見ることができよう。改造文庫が最後にロンドンを取り上げたのは、花園兼定訳『野性の呼び声』だった。真打ち登場である。1936 (昭和 11) 年 6 月のことだった。

ところで、改造社の最後のロンドン作品出版がまた興味深い。なぜなら最後に翻訳出版されたのが『南海物語』(*South Sea Tales*, 1911) だったからだ。今まで改造社が翻訳出版してきた『奈落 (どん底) の人々』『白い牙』『野性の呼び声』というのはどれもロンドンを代表する作品なのだが、今度の『南海物語』はロンドン作品の中ではマイナーな短編集である。この作品は、第 2 次世界大戦前では 2 回しか訳されておらず、戦後でも全訳は最近やっと出版されただけで、いわば〈忘れられた作品〉であった。なお、筆者がこの全訳が出る前に拙著で紹介したのが、この作品の戦前戦後を通じて初めての解説だったと思われる。

とにもかくにも改造社版の村上啓夫訳『南海物語』は、1941 (昭和 16) 年 10 月に単行本として出版された。手許にある初版を見てみると、ペーパーバックながらしっかりした作りになっていて、絵もきれいである。日本で初めてこの作品が『南の海』として翻訳出版された時〔1925 (大正 14) 年 5 月〕には、実は原著の中の 1 篇が訳されていなかったので、この改造社版が日本初の『南海物語』全訳版ということになるのである。ちなみに、偶然とはいえ、面白い事実がある。じつは、椋鳩十は大学生時代に『南海物語』を翻訳で読んで南太平洋をめざすことを決心したのであり、そうした流れの中で鹿児島に移り住むことになるのである。残念ながら椋の読んだ版は『南の海』の方であって改造社版ではなかったが、椋も山本と同様にこの作品を高く評価していたということは非常に興味深く、妙な因縁を感じざるを得ない。

7.4. 宮原と山本の存在意義について

山本実彦が日本におけるロンドン紹介に果たした役割は、宮原晃一郎のそれよりもはるかに大きい。まさに、日本におけるロンドン受容の初期の立役者の一人といっていい。し

かし、宮原が、ロンドンの二大作品である『野性の呼び声』と『白い牙』のうちの一つ（『白い牙』）を、日本で最初に翻訳出版したことも十分価値あることであろう。それだけでも評価に値するが、前述したように、宮原訳『白い牙』が日本を代表する児童文学作家・動物作家の椋鳩十をロンドンファンにさせたとも言えるのであり、しかも、好きなロンドン作品を読み続けるなかで椋が鹿児島に興味を持つようになるのであるから、この出版は意義深いものだったと言える。

しかし宮原が『白い牙』を翻訳したことの功績はそれだけではない。たしかに彼の訳したロンドン作品は結局1作だけだったが、堺が『野性の呼び声』の翻訳を出版してから『白い牙』を翻訳出版するまでには多少なりとも時間がかかったこと（5年半近く）を考えると、このロンドンの二大作品が両方とも、宮原のおかげで、1919（大正8）年5月、1920（大正9）年4月と1年間を置かずして単行本の形で世に出ることができたということは、日本における初期のロンドン文学の普及に大きく貢献したと言えるであろう。

本章の内容を含むこれまでの筆者の一連の研究は、ジャック・ロンドンと鹿児島（薩摩）が奇妙な縁で結ばれていることを証明しようとするものであり、その理由も順次示してきたつもりだ。一連の研究がひと段落しようとしている今、本章で紹介した宮原と山本の存在は、研究全体にとっても締めくくりにふさわしい意義深さを有していると言えるだろう。

鹿児島（薩摩）とロンドンが相互に深い影響関係でつながっていることは、ただ鹿児島にとって意味があるだけではない。それは、ロンドンがいかに日本的な思想や生き方に関心を持ち、これに影響されていたかを示している。言いかえれば、それはもちろん強い文学的影響でもあって、ロンドンを研究する者にとってのみならず、日本人全体にとっても現代（文化）史上の注目すべき事象であったと言えるかもしれないのだ。つまり、日本人が欧米から大きな影響を受けて、次々と様々な文化や技術を摂取・導入していた明治期に、逆に、産業主義の高まりのなかで金銭など物質に重きを置く価値観に振り回され、素朴な倫理観を失いつつあったアメリカ人の中には、日本的な思想・倫理観から影響を受けていた者が、しかもインテリの著名人がいたのである。

薩摩を筆頭とする日本からジャック・ロンドンが受けた影響は、カリフォルニア以外にも広がっている可能性があり、その有形無形の影響は今なお生きている可能性さえある。また、ロンドンに影響を受けた作家は、薩摩や日本国内だけではなく、アメリカや諸外国にもたくさんいるはずだから、その影響は想像以上に広がっている可能性もあるのだ。そう考えると、薩摩（鹿児島）とジャック・ロンドンの奇縁はさらに大きな関係へとつながっていく可能性を秘めている、と言えよう。

注

1）宮原晃一郎の伝記的な情報については、かごしま近代文学館で2010年2月から3月まで開催された収蔵品展「宮原晃一郎の軌跡」の際に同館にて作成された「宮原晃一郎　略年譜」を参照した。宮原のまとまった伝記は今のところ書かれていない。

2）本論文におけるロンドン作品翻訳の歴史的情報については、その多くを中田幸子『父祖たちの神々――ジャック・ロンドン、アプトン・シンクレアと日本人』（国書刊行会、1991年）より得たことを断っておく。

3）山本実彦の伝記的な情報については、松原一枝『改造社と山本実彦』（南方新社、2000年）と鹿児島純心女子大学国際文化研究センター編『雑誌『改造』とその周辺』新薩摩学シリーズ5（南方新社、2007年）を参照した。

文献

Auerbach, Jonathan (1996). ""Congested Mails":Buck and Jack's"Call"," *Rereading Jack London.* ed. by Leonard Cassuto and Jeanne Campbell Reesman. Stanford: Stanford U. P..

別冊歴史読本14(2008).『天璋院篤姫ガイドブック』東京：新人物往来社.

中央英米文学会（編）(2007).『問い直す異文化理解』東京：松柏社.

_____（編）(2013).『新たな異文化解釈』東京：松柏社.

Dauphin, Laurent (1995). "*The Valley of the Moon*: A Reassessment," *The Critical Response to Jack London.* Westport: Greenwood Press.

フォーナー，エリック(2008). 横山良ほか(訳). 『アメリカ　自由の物語（上)』東京：岩波書店.

Foner, Philip S (1947). *Jack London American Rebel.* New York : The Citadel Press.

深沢広助（2001）．『ジャック・ロンドン――人・文学・冒険』東京：北星堂書店.

学研（編）　(2006)．『幕末戊辰西南戦争』東京：学研.

Giles, James R.. "Thematic Significance of the Jim Hall Episode in *White Fang*," *Jack London Newsletter* Vol.2, No.2.

原口泉（2008).『篤姫　わたくしこと一命にかけ』東京：グラフ社.

_____(監修)(2008).『薩摩の群像』東京：学研.

橋口満(2009). 『よみがえれ！！鹿児島の品格』鹿児島：高城書房.

橋本順光(2005). 「ジャック・ロンドンと日露戦争――従軍記者から「比類なき侵略」(1910)へ」日露戦争研究会編『日露戦争研究の新視点』横浜：成文社.

林望（2007, 2010）．『薩摩スチューデント、西へ』東京：光文社.

Hendricks, King and Irving Shepard, (Eds.) (1970). "War Correspondence"*Jack London Reports.* New York : Doubleday.

平間洋一（編著）（2010）．『日露戦争を世界はどう報じたか』東京：芙蓉書房出版.

平塚柾緒(1999).『日露戦争』東京：河出書房新社.

久井稔子(1995). 「1995年10月9日付筆者あての手紙」鹿児島.

星亮一(2008). 『会津藩VS薩摩藩　なぜ袂を分かったか』東京：KKベストセラーズ.

Hueffer, Oliver Madox(1983). "Jack London : A Personal Sketch," Tavernier-Coubin , Jacqueline (Ed.) *Critical Essays on Jack London.* Boston : G. K. Hall & Co.

生駒忠一郎(1995). 『椋鳩十の生涯　風のごとく』名古屋：KTC中央出版.

今吉弘、徳永和喜（編著）(2012). 『鹿児島県謎解き散歩』東京：新人物往来社.

犬塚孝明(1974) .『薩摩藩英国留学生』東京：中公新書.

The Japanese American Curriculum Project, Inc. (1985). *Japanese American Journey: The Story of a People* : JACP, Inc..
ジャック・ロンドン研究会（編）、大浦暁生（監修）（1989）．『ジャック・ロンドン』東京：三友社出版.
門田明(1991)．『若き薩摩の群像』鹿児島：春苑堂かごしま文庫１.
門田明、テリー・ジョーンズ(1983)．『カリフォルニアの士魂――薩摩留学生・長沢鼎小伝』東京：本邦書籍.
Kadota, Paul Akira and Terry Earl Jones (1990). *Kanae Nagasawa—A Biography ofa Satsuma Student*— Kagoshima : Kagoshima Prefectural Junior College.
鹿児島純心女子大学国際文化研究センター（編）(2007). 『雑誌『改造』とその周辺』(新薩摩学シリーズ5) 鹿児島：南方新社.
鹿児島県(1943). 『鹿児島県史　別巻』鹿児島：鹿児島県.
かごしま近代文学館(2010). 「宮原晃一郎　略年譜」(「宮原晃一郎の軌跡」展資料）鹿児島：かごしま近代文学館.
加来耕三（1997). 『西郷隆盛と薩摩士道』鹿児島：高城書房.
加藤祐三（2012）.『幕末外交と開国』東京：講談社.
木村毅（1978）.『明治アメリカ物語』東京：東京書籍・東書選書17.
Kingman, Russ (1979). *A Pictorial Life of Jack London.* New York: Crown Publishers, Inc.
_____(1992). *Jack London A Definitive Chronology*. Middletown: REJL.
講談社（編）（2010）．『日本の歴史　幕末の志士　龍馬とその時代　第6巻　“攘夷思想の終焉”　薩英戦争』東京：講談社.
古閑章（編）（2009）．『新薩摩学シリーズ７　鹿児島の近代文学・散文編』鹿児島：南方新社.
国分郷土誌編さん委員会（編）(1973)．『国分郷土誌』国分市: 国分市.
小宮山量平(1982).「野性の谷間　前編」『椋鳩十の本　第四巻』東京：理論社.
_____(2005). 「わが胸の燃ゆる思い―日本《青春の文学》と椋鳩十の座標」『感動と運命　椋鳩十生誕100年記念誌』長野：椋鳩十生誕100年祭実行委員会、教育委員会・椋鳩十記念館.
久保田喬彦(1997). 『父・椋鳩十物語』東京：理論社.
来原慶助(2012). 『日露戦争における黒木為楨大将』鹿児島：南方新社.
串木野市（編）(1996)．『1996串木野市勢要覧』串木野市：串木野市役所.
Labor, Earle, Leitz, Ⅲ, Robert C., and Shepard, I. Milo (Eds.) (1988). *The Letters of Jack London.* Volume One. Stanford: Stanford University Press.
Labor, Earle and Reesman, Jeanne Campbell (1994). *Jack London.* Revised Edition. New York : Twayne Publishers.
Leathers, Noel L. (1978). *The Japanese in America (New Edition).* Tokyo: Hokuseido.
London, Jack (1902). *Children of the Frost.* New York : Macmillan.

_____(1902).“The Law of Life” *Children of the Frost*. New York : Macmillan.
_____(1903). *The Call of the Wild*. New York : Macmillan.
_____(1903). *The People of the Abyss*. New York : Macmillan.
_____(1904). *The Sea-Wolf.* New York : Macmillan.
_____(1904). “Batard” *The Faith of Men and Other Stories*. New York : Macmillan.
_____(1904). *The Faith of Men and Other Stories*. New York : Macmillan.
_____(1905). *The Game*. New York : Macmillan.
_____(1906, 1970). *White Fang.* New York: Macmillan.
_____(1907). *Before Adam*. New York : Macmillan.
_____(1907). “Love of life” *Love of Life and Other Stories*. New York :
_____(1909). *Martin Eden*. New York : Macmillan.
_____(1910, 1993). ““Lost Face” *Short Stories* Volume Two.
_____(1911). *South Sea Tales*. New York : Macmillan.
_____(1911, 1993). “War” *Short Stories* Volume Three.
_____(1911). “The Chinago” *When God Laughs and Other Stories*. New York : Macmillan.
_____(1911). “Just Meat” *When God Laughs and Other Stories*. New York : Macmillan.
_____(1913,1916). *The Valley of the Moon.* New York: Grosset & Dunlap Publishers.
_____(1913). *The Night -Born*. New York : Century.
_____(1913). “The Mexican” *The Night -Born*. New York : Century.
_____(1914). *The Strength of the Strong*. New York : Macmillan.
Macmillan.
_____(1915). *The Scarlet Plague.* New York : Macmillan.
_____(1917). “Four Horses and a Sailor” *The Human Drift.* New York : Macmillan.
_____(1970). “The Yellow Peril” *Jack London Reports*. New York: Doubleday & Company, Inc.
_____(1970). “If Japan Wakens China” *Jack London Reports*.
_____(1993). “O Haru” *The Complete Short Stories of Jack London* Volume One. Stanford: Stanford U. P.
_____(1993). “Story of a Typhoon off the Coast of Japan” *The Complete Short Stories of Jack London* Volume One. Stanford : Stanford U P.
_____(1993).“The Unparalleled Invasion” *Short Stories* Volume Two.
_____(1999). *Cherry. Jack London Journal Number 6*. Chicago: Jack London Journal.
ロンドン, ジャック (1995). 辻井栄滋 (訳).『赤死病』東京 : 新樹社.
_____ (1996). 辻井栄滋・大矢健 (訳).『極北の地にて』東京 : 新樹社.
_____ (1999). 辻井栄滋・森孝晴 (訳).『アメリカ残酷物語』東京 : 新樹社.
_____ (2006). 深沢広助 (訳).『南海物語』横浜 : 春風社.
_____ (2008). 柴田元幸 (訳).『火を熾す』東京 : スイッチ・パブリッシング.

_____（2008）．有馬容子（訳）.『ジャック・ロンドン幻想短編傑作集』東京：彩流社.
_____（2011）．辻井栄滋・芳川敏博（訳）.『ジャック・ロンドン多人種もの傑作短篇選』東京：明文書房.
_____（2013）．辻井栄滋・芳川敏博（訳）.『ジャック・ロンドン奇想天外傑作選』東京：明文書房.
松原一枝(2000）．『改造社と山本実彦』鹿児島：南方新社.
松永勝彦(1993, 1995)．『森が消えれば海も死ぬ』東京：講談社ブルーバックス.
松永守道(1976).『薩摩の秘剣　薬丸自顕流』鹿児島：自費出版.
松田裕之(1995).『「共生」とは何か』東京：現代書館.
南日本新聞社（編）(1967）.『鹿児島百年＜中＞明治編』鹿児島：春苑堂書店.
_____（編）(1975).『三代軍人列伝　薩摩の武人たち』鹿児島：南日本新聞社.
_____（編）(1981）．『郷土紙にみるかごしま世相百年』鹿児島：南日本新聞開発センター.
_____（編）(2005）．『鹿児島近代化遺産』鹿児島：南日本新聞開発センター.
宮下和男(2004)．『椋鳩十の生涯　野性のうた』長野：一草舎出版.
宮下亮善(編)(2009)．『西郷(せご)どんと薩摩士風』鹿児島：西郷隆盛公奉賛会.
宮澤眞一（1987).『薩摩とイギリスの出会い』鹿児島：高城書房.
_____（編著）(1988).『英国人が見た幕末薩摩』鹿児島：高城書房.
森孝晴(1992)．「ジャック・ロンドンの'Four-Horse Trip to Oregon'を追って」『鹿児島短期大学研究紀要』第50号　鹿児島：鹿児島短期大学.
_____(1998)．『椋鳩十とジャック・ロンドン』鹿児島：高城書房.
_____(2008)．「『ソフィーの選択』――組織と絶対悪」『ウィリアム・スタイロンの世界』（大浦暁生監修、中央大学スタイロン研究会編）東京：中央大学出版部.
本村寿一郎(1998)．『〔動物のものがたり〕をつくった椋鳩十――聞き書き・椋鳩十のすべて――』（〔児童文学〕をつくった人たち9）東京：ゆまに書房.
椋鳩十(1980)．「ガラッパ大王」東京：岩崎書店.
_____(1981)．『マヤの一生』『椋鳩十全集　第十五巻』 東京：ポプラ社.
_____(1982).「鉄砲みず」「山犬」「敵」「朽木」「山の鮫」「黄金(きん)の秋」「火」「炎飆(えんぴょう)（なつあらし）」「驟雨」「四十雀(しじゅうから)」「無精な男」「山　のトンビ」「霜の花」「膝の上」「若い月」「夕立」「呪(のろい)婆(ばば)」『椋鳩十の本　第二巻』東京：理論社.
_____(1982).「雲の唄」「山の猛者(えらもの)」「山の人びと」「沼地の山窩」「山の娘」『椋鳩十の本　第三巻』東京：理論社.
_____(1982)．「野性の谷間　前編」『椋鳩十の本　第五巻　』東京：理論社.
_____(1982)．「野性の谷間　後編」『椋鳩十の本　第五巻』東京：理論社.
_____(1982).「作者の意図と読者と」『椋鳩十の本　第十八巻』東京：理論社.
_____(1982)．「自伝的対談(1)――わが青春の詩と真実」『野性の谷間　後編』（椋鳩十の本　第五巻）東京：理論社.
_____(1982)．「大造爺さんと雁」（「椋鳩十の本　第十巻」）東京：理論社.
_____(1983)．「特別講演　私と文学」（実践学園主催　芸術選奨文部大臣賞受賞記念講演会　講演録、非売品）鹿児島：椋鳩十文学碑建立委員会.

_____(1983). 「山窩の思い出」『椋鳩十の本　第二十巻』東京：理論社.
_____(1983). 「山窩物の題材」『椋鳩十の本　第二十巻』東京：理論社.
_____(1983).「野性のにおいを」『椋鳩十の本　第二十四巻』東京：理論社.
_____(1983). 「王者の座」『椋鳩十の本　第十一巻』東京：理論社.
_____(1985). 「なつかしい先生」. 『椋鳩十の本　第二十七巻』東京：理論社.
_____(1989). 「白く光る雪の夢」『椋鳩十の本　第二十七巻』東京：理論社.
_____(1989). 「V 私の青年時代」『語り部行脚　人と出会う感動』(椋鳩十の本　第三十三巻) 東京：理論社.
_____(1993). 「自序　その二」『椋鳩十の本　第二巻』東京：理論社.
_____(1993). 「猛禽類」『椋鳩十の本　第二巻』東京：理論社.
_____(1993).「盲目の春」　『椋鳩十の本　第二巻』東京：理論社.
_____(1993).「撃たれた鷲」『椋鳩十の本　第二巻』東京：理論社.
_____(1993).「掟の下の恋」『椋鳩十の本　第三巻』東京：理論社.
_____(1994) . 『母と子の20分間読書』東京：あすなろ書房.
_____(2007). 『ヤクザル大王』鹿児島：南方新社.
_____.　　「片脚の母雀」「猫ものがたり」「鶏通信」「片耳の大鹿」「野性の叫び声」「王者の座」「消えた野犬」「丘の野犬」『孤島の野犬』「モモちゃんとあかね」「はらっぱのおはなし」「大造爺さんと雁」「栗野岳の主」「カガミジシ」「南島のシシ白耳」『山の大将』「アルプスの猛犬」「犬塚」「名犬」「山に帰る」「佐々木さんの話」「月の輪熊」「黒ものがたり」「山の太郎熊」「金色の足跡」「野獣の島」「三郎と白い鵞鳥」「二人の兄弟と五位鷺」「まことの強さ」「ヤマネコと水牛の島」「におい山脈」
これらの作品は「椋鳩十全集」全26巻（1969-1981、東京：ポプラ社）や「椋鳩十の本」全36巻(1982-1990、東京：理論社）に収録されている。
_____(1997). 本村寿年（編）. 『村々に読書の灯を　椋鳩十の図書館論』東京：理論社.
椋鳩十文学記念館（編）(1990). 『椋鳩十の生涯』加治木：椋鳩十文学記念館.
_____（編）(1990). 『椋鳩十の略歴』加治木：椋鳩十文学記念館.
_____（編）(1993). 『ひびきあう椋鳩十のこころ』加治木：椋鳩十文学記念館.
_____（編）(1997). 『椋鳩十文学記念館紀要　椋鳩十・人と文学　創刊号』加治木：椋鳩十文学記念館.
_____（編）(1998). 『椋鳩十文学記念館紀要　椋鳩十・人と文学　第二号』加治木：椋鳩十文学記念館.
_____（編）(1999). 『椋鳩十文学記念館紀要　椋鳩十・人と文学　第三号』加治木：椋鳩十文学記念館.
椋鳩十・小宮山量平(1982) . 「自伝的対談(1)」『椋鳩十の本　第五巻』東京：理論社.
_____(1982).　「自伝的対談(2)」『椋鳩十の本　第十八巻』東京：理論社.
_____(1983).　「自伝的対談(3)」『椋鳩十の本　第二十五巻』東京：理論社.

椋鳩十・鳥越信(1980). 「対談／自然に生きる」『日本児童文学』（1980年6月号）東京：日本児童文学者協会.
村上春樹（2011）. 『村上春樹　雑文集』東京：新潮社.
長沢鼎(1871). 『長沢鼎日記』串木野：串木野市役所保管.
_____(1980, 1994, 1997, 1998). 『長沢鼎日記』の翻刻『鹿児島県立短期大学地域研究所「研究年報」』第9号（1980年)、第23号（1994年)、第26号（1997年)、第27号（1998年）.
中田幸子(1981）.『ジャック・ロンドンとその周辺』東京：北星堂.
_____(1991）.『父祖たちの神々――ジャック・ロンドン、アプトン・シンクレアと日本人――』東京：国書刊行会.
Nakata, Sachiko(1986). *Jack London and The Japanese　An Interplay between the West and the East.* Tokyo: The Central Institute.
日本子どもの本研究会（編）(1989). 『子どもの本棚　臨時増刊第51号　全特集　椋鳩十』東京：ほるぷ出版.
西田実・岩淵悦太郎・水谷静雄（編）(1980). 『岩波国語辞典　第三版』東京：岩波書店.
西山正徳（1999）. 『薩英戦争』鹿児島：高城書房.
西山嘉子(2009).『ジャック・ロンドンの異文化理解について』(鹿児島国際大学大学院国際文化研究科修士論文）鹿児島：鹿児島国際大学.
新渡戸稲造(1993)、奈良本辰也(訳). 『武士道』東京：三笠書房知的生きかた文庫.
_____(2009).奈良本辰也(訳).『英語と日本語で読む「武士道」』東京：三笠書房知的生きかた文庫. 原著は1900年に出版.
Nitobe, Inazo(2007). *Bushido　The Soul of Japan.* Tokyo: IBC Publishing, Inc.
大浦暁生(監修)、ジャック・ロンドン研究会(編)(1989）.『ジャック・ロンドン』東京：三友社出版.
Ownbey, Ray Wilson (Ed.) (1978). *Jack London Essays in Criticism.* Santa Barbara: Peregrine Smith, Inc.
Perry, John(1981). *Jack London An American Myth.* Chicago : Nelson-Hall.
Raskin, Jonah(2008). *The Radical Jack London.* Berkeley : U. of California Press.
Reesman, Jeanne Campbell(2009). *Jack London's Racial Lives　A Critical Biography.* Athens: U. of Georgia Press.
歴史群像編集部（編）(2005).『日本の剣術』東京：学研パブリッシング.
堺利彦(1925）. 「はしがき」『ホワイト・ファング（白牙）』（ジャック・ロンドン著、堺利彦訳）東京：叢文閣.
_____ (1928). 「山窩の夢」『櫻の國・地震の國』東京：現代ユウモア全集刊行會.
坂田義教・穴田義孝・田中豊治(他編著)(1996). 『共生社会の社会学』東京：文化書房博文社.
成美堂出版編集部（編）. 東京都歴史教育研究会（監修）. 『一冊でわかる　イラス

トでわかる　図解幕末・維新』東京：成美堂出版.
司馬遼太郎(1999).『坂の上の雲』(四) 東京：文芸春秋文春文庫.
_____　(1996) .『坂の上の雲』(八) 東京：文芸春秋文春文庫.
島津斉彬 (1944, 2008).『島津斉彬言行録』東京：岩波文庫.
島津義秀(2005).『薩摩の秘剣　野太刀自顕流』東京：新潮新書、新潮社.
下竹原弘志(1990).『郷土と日本を築いた熱き薩摩の群像700名』鹿児島：指宿白水館.
Sinclair, Andrew (1977).　*Jack: A Biography of Jack London.* New York: Pocket Books.
新人物往来社（編）(2007).『別冊歴史読本64号　世界を見た幕末維新の英雄たち』東京：新人物往来社.
新星出版社編集部（編）（2008）.『幕末・維新』東京：新星出版社.
尚古集成館（編）（2003, 2006）.『――図録　薩摩のモノづくり――島津斉彬の集成館事業』鹿児島：尚古集成館.
Slattery, Peter(2004). *Reporting the Russo-Japanese War 1904-5.* Folkestone : Global Oriental.
Steelye, John (1991). "Introduction," *White Fang and The Call of the Wild.* New York: A Signet Classic.
Styron, William(1979). *Sophie's Choice.* New York : Random House.
菅沼利光 (1994) .『椋鳩十読書運動の研究』長野：秀文社.
高橋久志(2008).「薩摩の武士道をさぐる　野太刀自顕流の起源と精神」酒井直行(編)『天璋院篤姫ガイドブック』東京：新人物往来社.
高橋幸春 (1997) .『日系人　その移民の歴史』東京：三一書房.
たかしよいち(1983).『椋鳩十の本　補巻　椋鳩十の世界』東京：理論社.
柘植久慶(2010).『黒木為楨　日露戦争の勝利に最も貢献した名将』東京：PHP研究所.
Tanner, Tony (1995). "Books: *The Call of the Wild,"The Critical Response to Jack London.* Westport: Greenwood Press.
巽孝之(2003).『アメリカ文学史』東京：慶応義塾大学出版会.
Tavernier-Courbin, Jacqueline(1995)."The Humor of Jack London"Susan M. Nuernberg (Ed.) *The Critical Response to Jack London.* Westport : Greenwood Press.
寺尾美保 (2008) .『みんなの篤姫』鹿児島：南方新社.
徳永和喜 (2007) .『天璋院篤姫　徳川家を護った将軍御台所』東京：新人物往来社.
富増章成(2013).「新渡戸稲造の「武士道」」『男の隠れ家』2013年五月号. 東京：プラネットライツ.
辻井栄滋(2001).『地球的作家ジャック・ロンドンを読み解く』東京：丹精社.
_____ (2005) .『二十世紀最大のロングセラー作家――ジャック・ロンドンって何者？』東京：丹精社.
植木照代、ゲイル・K・佐藤ほか(1997) .『日系アメリカ文学　三世代の軌跡を読む』大阪：創元社.

氏家幹人(2012). 『武士マニュアル』東京：メディアファクトリー.
梅原猛(1996). 『共生と循環の哲学』東京：小学館.
若槻泰雄(1972) . 『排日の歴史　アメリカにおける日本人移民』東京：中公新書.
Walcutt, Charles Child (1996). *Jack London.* Minneapolis: U. of Minnesota Press.
Walker, Franklin (1966, 1994). *Jack London and the Klondike.* San Marino: The Huntington Library.
Watson jr., Charles N. (1983). *The Novels of Jack London.* Madison: The U. of Wisconsin Press.
Williams, Tony(1999).“*Cherry*'s Conclusion?,”*Jack London Journal* Number 6. Chicago :
山本通隆(1990) . 『加利府の古伝　カリフォルニアと日本』:ユリーカ・ライブラリー.
柳田國男(1989, 1997) . 「山の人生」『柳田國男全集4』東京：ちくま文庫.
安田喜憲(1996). 『森のこころと文明』東京：NHK出版.

結　語

たしかに、鹿児島は幕末や明治初めにおいて中央政府に多くの人材を送り出し、多くの鹿児島人が戦争や留学のために海外にも進出して行ったであろう。しかし、本論文で明らかにしてきたジャック・ロンドンと鹿児島の強い結びつきを目の当たりにすると、それだけでは説明できない部分があることに気づく。それは多分、100 年以上前の鹿児島が持っていたある種の吸引力、求心力ではないだろうか。徹底した武士道精神や多彩な自然環境が生み出す〈魅力〉と言ってもいいだろう。

筆者は、長沢や黒木といった薩摩武士を通して、ロンドンがそういう鹿児島の不思議な力に吸い寄せられ、それが彼の人生観に大きな影響をあたえ、そればかりか、作家として最も重要な思想・文学観にさえ大きな影響を与えていることを実証してきたが、一方で、たとえばロンドンの「戦争」に椋が惹かれるというエピソードに象徴的に表れることだが、意識するとしないに関わらず、鹿児島のロンドンへの影響が廻りまわって鹿児島の文人たちに戻ってくるという循環、あるいは運動性を示し得たと思う。

今後の課題に関しては、積み残しているものとして、椋が読んだロンドン作品の中でまだ分析できていないものがいくつかある。まずこれを分析してさらにロンドンの椋への影響力の追究を進めたい。また、たとえば、黒木大将の側がロンドンをどう見ていたかについては、地元にいながらなかなか情報をつかめない実情があり、これを何とか実現したいとも思っている。さらに、ロンドンは極めて多作な作家であるので、本論で触れた作品以外にも武士道精神の影響下で書かれた作品がいくつもあるのではないかと思われるので、それを発掘していきたい。

参考資料（年表、ほか）

椋・ロンドン・長沢　関係年表

椋	ジャック・ロンド	長沢 鼎	日本史	アメリカ
1835(天保六)				
			音吉らオレゴン	
1837(天保八)			に流れ着く	
1841(天保十二)			大塩平八郎の乱	
1843(天保十四)			万次郎漂流、アメリカ到達。天保の改革	
1845(弘化二)				「明白な天命」
1849(弘化六)			万次郎学校入学	熱高まる
			万次郎卒業、大工修行へ	カリフォルニアでゴールドラッシュ。ルーサー・バーバンク生まれる。
1850(嘉永三)				
1851(嘉永四)				
1852(嘉永五)				
		二月二十日、鹿児島城下に生まれる	彦造漂流、アメリカ到達	
1853(嘉永六)				
			万次郎帰国	
1854(安政元)				エドウィン・マーカム生まれる
1856(安政三)			七月、ペリー黒船で浦賀来航	

1858(安政五)				
1860(万延元)			日米修好通商条結。島津斉彬急死	
1861(文久元)			条約批准のため、咸臨丸江戸を立ち、三月サンフランシスコ着。六月帰国（ジョン万次郎が通弁）。	南北戦争（～1865)
1862(文久二)				
1863(文久三)			彦造帰国。桜田門外の変	
1865(慶応元)		四月十七日、薩摩藩英国留学生羽島出発。六月二十一日、サウサンプトン入港。八月、アバディーンのグラバー邸に寄宿し、中学校に入学	生麦事件	奴隷解放宣言
1867(慶応三)			薩英戦争	
1868(明治元)		八月頃、他の五人と共に渡米、ハリスの新生兄弟社に入る。十二月、ブロクトンの新農園に移る	彦造、「海外新聞」刊行	アラスカ購入
1869(明治二)		五月、薩摩学生間に	高橋是清少年、サンフランシスコに渡航	

		分裂が	明治維新	最初の大陸横断
1870(明治三)		十月、コーネル大学入学	加州コロマに入若松コロニーを建設するが、失敗して崩壊	七月一日の国勢調査で五十五人の日本人が登録された
1871(明治四)				
1873(明治六)		年初め、病気でコーネル大を退学。春、森にアメリカ永住を宣言	岩倉具視の遣米使節団（津田梅子ら女子学生五人を含む）	バーバンク、サンタローザの住人となる
1875(明治八)				サンフランシスコに日本領事館開設、日本人居住者八十人の記録あり
1876(明治九)	一月十二日、サンフランシスコに生まれる	二月、ハリスと共に加州ソノマ郡サンタローザに移り	文部省派遣留学生一団、アメリカへ	
1877(明治十)		ファウンテングローブを購入。このころルーサー・バーバンクと親しくなる。マーカム、ファウンテングローブの一員となる		
1878(明治十一)				
1881(明治十四)				
1882(明治十五)			西南戦争	

1883(明治十六)			大久保利通暗殺	
1884(明治十七)			ハワイ移民再開	
1885(明治十八)		森有礼、初代文部大臣となる	初の「官約移民」９４４人、ハワイに送り出される。以後、北米大陸にも進出	ロスの日本人２４～２５人 政府、契約労働者の入国を禁止。ロスの日本人７０人以上。
1886(明治十九)				
1887(明治二十)				東欧やイタリアからの新移住民流入始まる
1889(明治二十二)				
1890(明治二十三)				アメリカ労働総同盟（AFL）結成
1891(明治二十四)			大日本帝国憲法発布 教育勅語発布	このころ、日本人排斥運動始まる
1892(明治二十五)			日本郵船社長吉川泰次郎ら、移民会社を作る。この後、移民本格化	フロンティア消滅。アメリカ本土の日本人２０３９人（半分以上がカリフォルニア）
1893(明治二十六)	一月、アザラシ漁船	ハリスがニューヨークに移ったので、土地と醸		

		造所の		
1894(明治二十七)	み、小笠原諸島父島、に着く（七月、十七歳）			
			移民送り出し業務、	不況。
1895(明治二十八)	四月、失業者たちの「ワシントン行進」に参加（十八歳）		官営から民営へ。日清戦争勃発	
1896(明治二十九)				
1897(明治三十)	オークランド高校入学（十九歳）、本を読みあさる	第一回帰国	日清戦争休戦、日清講和条約調印	最高裁の「隔離すれども平等」判決
	社会主義に接近（二十歳）			クロンダイクでゴールドラッシュ起こる。
1898(明治三十一)	作家修行をするが失敗、クリーニング屋に勤める。七月、クロンダイクへ出発			ハワイとの間で併合条約調印。ロス市内の日本人５００人以上
1899(明治三十二)				
				ハワイ、アメリカ領土となる。ハワイ移民六万人。米西戦争。
1900(明治三十三)	八月、クロンダイクより帰郷	ハリスに農場と醸造会社を譲渡され、経営の全責任を負うことになる		
1901(明治三十四)				このころ、日本人移民は増大の一途
				南加鹿児島県人会創立。中国に関す

				る門
1902(明治三十五)				
	イギリス、ロンドンの貧民		第一回日英同盟締結	「アジア人排斥同盟
	街イーストエンドに潜入			」設立（カリフォ
1903(明治三十六)	（二十六歳）			ルニア）
	七月『野性の呼び声』、十			南加鹿児島県人会、
	一月『奈落の人々』（二十			サンフランシスコ鹿
1904(明治三十七)	七歳）			児島県人会支部から
			日露戦争勃発	独立。ライト兄弟、
	一月、日露戦争取材のため、			飛行機発明
	日本へ向け汽船でサンフラ			
	ンシスコを出航、一月二十			
	二日横浜着（二十八歳）。			
	神戸、長崎を経て、			
1905(明治三十八)	二月一			
長野県下伊那郡喬木村	日に門司で逮捕され			
に生まれる	小倉で		ポーツマス条約調印	
	拘置所に入る。出所後汽船		（日露戦争終結）	
	でプサンへ行き、さらに最			
	前線に進み、ピョンヤン、			AFLの路線に反対し
1906(明治三十九)	ソウルを経て六月に	ハリス死去		て世界産業労働者同
	帰国。			盟（IWW)発足
	ベスと別居し、加州ソノマ			
	郡グレン・エレンの			
	山荘に			

	移り住む。十月『海			サンフランシス教委、日本人生徒の隔離を決議
1907(明治四十)	二月『アダム以前』			
1908(明治四十一)	（三十一歳）。四月、スナーク号でハワイへ出航			年間移民、史上最高を記録
1909(明治四十二)	二月『鉄の踵』（三十二歳）。一時帰国後、再びタヒチへ向かい、マラリアでシドニーの病院に入院			アメリカ本土への日本人移民、十万三千人を越える。「日米紳士協定」発効（アメリカ移民、大幅に限定される）
1910(明治四十三)			大逆事件。このころから多くの写真花嫁が渡米するようになる。韓国併合	
1911(明治四十四)	七月、帰国（三十三歳）。九月『マーティン・イーデン』	全ファウンテングローブが事実上長沢の所有となる		
1912(明治四十五，大正元)	農場経営に力を入れ始める（三十四歳）			1920年までの十年間に史上最多の七万人が移民
1913(大正二)				
1914(大正三)	『南海物語』『スナーク号航海記』（三十五歳）	第二回帰国		
1915(大正四)				
1916(大正五)	三ヶ月の航海に出る（三十		ドイツに宣戦布告	

	六歳） ハワイへ。グレン・ に戻って、十一月二 十二日、			「外国人土地
1917(大正六)	死去			
		第三回帰国		対独宣戦布告
1918(大正七)				
飯田中学校入学（十三歳）			米騒動	第一次世界大戦終結
1919(大正八)			米騒動	
このころロンドン作品と出会う				一月、禁酒法制定。 排日協会組織される
			国際連盟に加入	。南カリフォルニ アの日本人三万人
1920(大正九)				
		第四回帰国	関東大震災	
1923(大正十二)				
飯田中学校卒業（十八歳）				カリフォルニア州議 会、排日土地法可決
1924(大正十三)				
法政大学文学部入学、詩作に励む（十九歳）			治安維持法成立	
1925(大正十四)				
1926(大正十五、昭和元)				
1927(昭和二)			日本最初の普通選挙	
1928(昭和三)				バーバンク死去
1929(昭和四)				リンドバーグ、大西 洋横断飛行
このころロンドンの『南海物語』を読む				
1930(昭和五)				
法政大学文学部卒				世界大恐慌

業。『南海				
1932(昭和七)			満州事変	
			満州国建国宣言。五・十五事件。上海事変	
1933(昭和八)				
1934(昭和九)				
1936(昭和十一)		三月一日、死去（八十二歳）	国際連盟脱退	一月、禁酒法廃止
1937(昭和十二)				
1939(昭和十四)			二・二六事件	
			日中戦争始まる	
1940(昭和十五)				第二次世界大戦始まる
1941(昭和十六)				
1945(昭和二十)			日独伊三国軍事同盟	マーカム死去
			太平洋戦争始まる	
1946(昭和二十一)				第二次世界大戦終結
1947(昭和二十二) 十一月、県立図書館長となる （四十二歳）			広島、長崎に原爆投下。ポツダム宣言受諾。	
1950(昭和二十五)				
			日本国憲法発布	
1951(昭和二十六)			日本国憲法施行	朝鮮戦争。マッカーシー旋風始まる
1952(昭和二十七)			朝鮮戦争	

1953(昭和二十八) 1954(昭和二十九) 1955(昭和三十) 第六回南日本文化賞受賞（五十歳） 1956(昭和三十一) 1960(昭和三十五) 「母と子の２０分間読書」を提唱（五十五歳） 1962(昭和三十七) 1963(昭和三十八) 1964(昭和三十九) サンケイ児童出版文化賞、国際アンデルセン賞（国内賞）受賞（五十九歳） 1966(昭和四十一) 県立図書館長を定年退職（六十一歳） 1967(昭和四十二) 鹿児島女子短大教授となる（六十二歳） 1968(昭和四十三) モービル児童文化賞受賞（六十三歳） 1969(昭和四十四) 「椋鳩十全集」全２６巻			国際連合に加盟 東京オリンピック大会 大阪万国博	最高裁の公立学校での隔離違憲判決 モントゴメリーのバス・ボイコット事件 キューバ危機。ベトナム戦争始まる ワシントン大行進。ケネディ大統領暗殺 公民権法制定 キング牧師暗殺 宇宙船アポロ１１号

刊行開始 文部大臣賞受賞（六				月面着陸
1973(昭和四十八)			沖縄復帰	
			石油危機、狂乱	ベトナム戦争和
1974(昭和四十九)			物価	平協 定成立。石油危機
1976(昭和五十一) 勲四等旭日小綬賞、第七回博 報堂賞受賞（七十一歳）				ウォーターゲート事 件
1977(昭和五十二)			ロッキード事件初公 判	
1978(昭和五十三) 三月、鹿児島女子短大を退職 （七十三歳）				
1979(昭和五十四)				ロス圏内に日系人十 九万人
1981(昭和五十六) 三月、全集完結（七十六歳）				
1982(昭和五十七) 日本児童文芸家協会より表彰 を受ける。「椋鳩十の本」第 一期（全２５巻＋補巻１）刊 行（七十七歳）		レーガン大統領来 日、国会 演説で、長沢の功績を称え る		
1983(昭和五十八) 三月、芸術選奨文部大臣 賞受賞（七十八歳）				
1987(昭和六十二)				

十二月二十七日、死去 1994(平成六)				
1998(平成十)	日本ジャック・ロンドン協 会設立		南加鹿児島県人 会会 員四百三十五	

長沢鼎略年表

1852 年（嘉永 5）　長沢誕生。本名磯長彦輔
1862 年（文久 2）　生麦事件発生
1863 年（文久 3）　薩英戦争勃発
1864 年（元治元）　開成所洋学校設立。長沢入学
1865 年（慶応元）　薩摩藩英国留学生一行 19 名、羽島港出発。長沢 13 歳。
　3 ヶ月後ロンドン着。その後長沢だけアバディーンへ移動。
　グラバー邸に寄宿して、地元の中学校に通う
1867 年（慶応 3）　一行のうち長沢を含む 6 人がさらに渡米。
　N.Y.州アミニアに入り、ハリスのもとで過ごす。
　さらに同州ブロクトンに移住。長沢 15 歳
1868 年（明治元）　明治維新。長沢以外の学生が帰国。長沢 16 歳
1871 年（明治 4）　長沢（19 歳）、アメリカ永住を宣言。
1875 年（明治 8）　ハリスとともにカリフォルニア州サンタローザに移住。
　同所のファウンテングローブを購入。長沢 23 歳
1882 年（明治 15）　ブドウ酒醸造所完成。長沢 30 歳
1892 年（明治 25）　ハリスがニューヨークに移動。
　長沢、土地と醸造所の管理を任される（40 歳）
1897 年（明治 30）　第 1 回帰国（45 歳）
1900 年（明治 33）　長沢、農場と醸造会社の経営の全権を得る（48 歳）
1910 年（明治 43）　長沢、下荒田町に新戸籍を創設（58 歳）
1911 年（明治 44）　ハリスの死去（1906 年）に伴い、長沢が、事実上、
　全ファウンテングローブを所有する（59 歳）
1913 年（大正 2）　第 2 回帰国（61 歳）
1917 年（大正 6）　第 3 回帰国（65 歳）
1919 年（大正 8）　禁酒法（～1934）で打撃を受ける。長沢 67 歳
1920 年（大正 9）　排日土地法可決。長沢 68 歳
1923 年（大正 12）　第 4 回帰国（71 歳）
1924 年（大正 13）　勲五等雙光旭日章を授与される（72 歳）
1934 年（昭和 9）　長沢死去（82 歳）
1983 年（昭和 58）　鹿児島サンタローザ友好協会発足
1987 年（昭和 62）　学生交換(SRKSEP)開始
2000 年（平成 12）　鹿児島国際大学に学生支部発足
2007 年（平成 19）　サンタローザにナガサワ・コミュニティー・パーク開園

椋鳩十とジャック・ロンドンの主要作品

☆椋　鳩十

・『山窩調』（1933）
・『鷲の歌』（1933）
・『動物物語・片耳の大鹿』（1951）
・『動物小説・山の大将』（1956）
・『大空に生きる』（1960）
・『母と子の20分間読書』（1961）
・『孤島の野犬』（1963）
・『日高山伏物語』（1964）
・『なきむしたろう』（1965）
・『どうぞかんべん』（1966）
・『あかいあしあと』（1966）
・『山の太郎熊』（1966）
・『あるぷすのきじ』（1966）
・『三ぼんあしのいたち』（1966）
・『みさきのこうま』（1966）
・『ちょこまかぎつね　なきぎつね』（1966）
・『ひとりぼっちのつる』（1967）
・『創作幼年童話・みかづきとたぬき』（1968）
・『大造じいさんとガン』（1968）
・『チビザル兄弟』（1969）
・『カガミジシ』（1969）
・『つるのよめじょ』（1969）
・『椋鳩十全集　全26巻』（ポプラ社、1969～1981）
・『きんいろのあしあと』（1969）
・『マヤの一生』（1970）
・『モモちゃんとあかね』（1971）
・『ハブとたたかう島』（1971）
・『やせ馬物語』（1971）
・『母グマ子グマ』（1971）
・『しょうたとこぎつね』（1972）
・『白い鳥』（1972）
・『におい山脈』（1972）
・『月の輪グマ』（1972）
・『お日さまのうた』（1972）
・『日がくれる』（1973）
・『アルプスのくま』（1973）

・『山の子ども』（1973）
・『しもばしら』（1973）
・『みかづきとたぬき』（1973）
・『森のおばけ』（1973）
・『ぎんいろの巣』（1973）
・『もりのなかのシカ』（1973）
・『さいごのワシ』（1973）
・『きつねものがたり』（1973）
・『ネズミ島物語』（1973）
・『白いなみ白いなみイルカが行く』（1973）
・『イタチのまち』（1973）
・『けむり仙人』（1974）
・『イノシシの谷』（1974）
・『山のぬし』（1974）
・『馬おどりの町』（1974）
・『山の民とイノシシ』（1974）
・『ふしぎな二階』（1974）
・『白いオウム』（1974）
・『じねずみのおやこ』（1975）
・『るり寺ものがたり』（1975）
・『ほうまんの池のカッパ』（1975）
・『ピョンのうた』（1975）
・『カワウソの海』（1975）
・『黄金の島』（1975）
・『海上アルプス』（1975）
・『クマほえる』（1975）
・『犬のくんしょう』（1976）
・『キリンの詩』（1976）
・『クロのひみつ』（1976）
・『ふしぎな石と魚の島』（1976）
・『ヤマネコと水牛の島』（1977）
・『アルプスの猛犬』（1977）
・『すっとびこぞうとふしぎなくに』（1977）
・『たたかうカモシカ』（1977）
・『町をよこぎるリス』（1977）
・『ひとりぼっちのツル』（1977）
・『やまのともだち』（1977）
・『にせものの英雄』（1977）
・『自然の中で』（1978）
・『のら犬300びき』（1978）

・『はらっぱのおはなし』（1978）
・『日向薩摩路』（1979）
・『おおいのししとうりんぼう』（1979）
・『おしどりものがたりーひなをまもるたたかいー』（1979）
・『日当山侏儒どん』（1980）
・『ふしぎな玉』（1980）
・『石になってしまったあ』（1980）
・『ガラッパとススキの矢』（1980）
・『りかとねこのアン』（1981）
・『とかげのしっぽ』（1981）
・『森の少女』（1982）
・『椋鳩十の本　全34巻＋補巻２』（理論社、1983～1990、『野性の谷間』を含む）
・『カラスのクロと花子』（1983）
・『子グマのくろすけ』（1984）
・『いたずら子リス』（1984）
・『子ギツネのおかあさん』（1985）
・『ヤクザル大王』（1986）
・『ゆかいなばけくらべ』（1986）
・『子だぬきと子ねこ』（1986）
・『ひかり子ちゃんの夕やけ』（1987)
・『命ということ　心ということ』（1987）
・『のうさぎのおかあさん』（1987）
・『人間はすばらしい』（1988）
・『感動は心の扉を開くーしらくも君の運命を変えたものは？』（1988）
・『夕やけ色のさようなら』（1989）
・『不思議なビン』（1989）

※なお、現在も、『椋鳩十まるごと動物ものがたり　全１２巻』（理論社）と『椋鳩十学年別童話　全１４巻』（理論社）などが出ている。
※椋鳩十やその文学を知るには、『椋鳩十の本』の補巻１『椋鳩十の世界』、補巻２『椋鳩十の軌跡』（共に、たかしよいち著）、『椋鳩十の生涯　風のごとく』（生駒忠一郎著、　KTC中央出版）、『父椋鳩十物語』（久保田喬彦著、理論社）などがある。

☆ジャック・ロンドン
・『狼の息子』*The Son of the Wolf (*短編集、1900）
・『氷点下の子ら』*Chiklren of the Frost（短編集、1902）*
・『雪の娘』*The Daughter of the Snows（小説、1902）*
・『野性の呼び声』*The Call of the Wild（小説、1903）*
【翻訳】『野性の呼び声』（大石真訳、新潮文庫）、『荒野の呼び声』（海保眞夫訳、岩波文庫）、他

・『奈落の人々』*The People of the Abyss*（*ルポルタージュ*、*1903)*
【翻訳】『どん底の人々』（辻井栄滋訳、社会思想社・現代教養文庫）、『奈落の人々』（新庄哲夫訳、潮文庫）
・『海の狼』*The Sea-Wolf*（*小説*、*1904)*
【翻訳】『海の狼』（関弘訳、トパーズプレス　シリーズ百年の物語３）
・『階級戦争』*War of the Classes*（*評論*、*1905)*
・『試合』*The Game*（*小説*、*1905)*
【翻訳】『試合ーボクシング小説集』（辻井栄滋訳、社会思想社、現代教養文庫）所収
・『ムーン・フェイス、他』*Moon-Face and Other Stories*（短編集、1906）
・『白い牙』*White Fang*（小説、1906)
【翻訳】『白い牙』（白石佑光訳、新潮文庫）、『白いきば』（阿部知二訳、河出書房新社　世界文学の玉手箱21)、他
・『アダム以前』*Before Adam*（小説、1907)
【翻訳】『太古の呼び声』（辻井栄滋訳、平凡社）
・『生命への愛、他』*Love of Life and Other Stories*（短編集、1907)
・『道』*The Road*（放浪記、1907）
【翻訳】『アメリカ浮浪記』（辻井栄滋訳、新樹社）、『ジャック・ロンドン浮浪記』（川本三郎訳、小学館）
・『鉄の踵』*The Iron Heel*（小説、1908）
【翻訳】『鉄の踵』（小柴一訳、新樹社）
・『マーティン・イーデン』*Martin Eden*（小説、1909）
【翻訳】『ジャック・ロンドン自伝的物語』（辻井栄滋訳、晶文社）
・『面汚し』*Lost Face*（短編集、1910）
・『革命、他評論』*Revolution and Other Essays*（評論、1910）
・『燃える陽光』*Burning Daylight*（小説、1910）
・『神が笑うとき、他』*When God Laughs and Other Stories*（短編集、1911）
・『冒険』*Adventure*（小説、1911）
・『スナーク号航海記』*The Cruise of the Snark*（旅行記、1911）
・『南海物語』*South Sea Tales*（短編集、1911）
【翻訳】『南海物語』（深沢広助訳、春風社）
・『奈落の獣』*The Abysmal Brute*（小説、1913）
【翻訳】『試合ーボクシング小説集』（辻井栄滋訳、社会思想社、現代教養文庫）所収
・『ジョン・バーリーコーン』*John Barleycorn*（自伝的小説、1913）
【翻訳】『ジョン・バーリコーン』（辻井栄滋訳、社会思想社、現代教養文庫）
・『月の谷』*The Valley of the Moon*（小説、1913）
・『強者の力』*The Strength of The Strong*（短編集、1914）
・『赤死病』*The Scarlet Plague*（小説、1915）
【翻訳】『赤死病』（辻井栄滋訳、新樹社）

・『星を駆ける者』*The Star Rover* （小説、1915）

※短編の翻訳の主なもの

『ジャック・ロンドン大予言』（ＳＦ短編集、辻井栄滋訳、晶文社）
『小麦相場・たき火』（ノリスとロンドンの短編訳、小野協一・滝川元男訳、英宝社）
『極北の地にて』（アラスカもの短編集、辻井栄滋・大矢健訳、新樹社）
『試合ーボクシング小説集』（辻井栄滋訳、社会思想社、現代教養文庫）
『南海物語』（南海もの短編集、深沢広助訳、春風社）
『アメリカ残酷物語』（辻井栄滋・森孝晴訳、新樹社）
『火を熾(おこ)す』（柴田元幸訳、スイッチ・パブリッシング）
『ジャック・ロンドン幻想短編傑作集』（有馬容子訳、彩流社）
『ジャック・ロンドン多人種もの傑作短篇選』（辻井栄滋・芳川敏博訳、明文書房）
『ジャック・ロンドン奇想天外傑作選』（辻井栄滋・芳川敏博訳、明文書房）

※なお、ジャック・ロンドンやその文学を知るには、次のような本が出ている。

『ジャック・ロンドン』（大浦暁生監修、ジャック・ロンドン研究会編、三友社出版）、
『ジャック・ロンドンとその周辺』（中田幸子著、北星堂）、
『父祖たちの神々』（中田幸子著、国書刊行会）、
『地球を駆けぬけたカリフォルニア作家ー写真版ジャック・ロンドンの生涯』（伝記、ラス・キングマン著、辻井栄滋訳、本の友社）、
『馬に乗った水夫』（伝記的小説、アービング・ストーン著、橋本福夫訳、ハヤカワ文庫）、
『椋鳩十とジャック・ロンドン』（森孝晴著、高城書房）、
『地球的作家ジャック・ロンドンを読み解く』（辻井栄滋著、丹精社）、
『二十世紀最大のロングセラー作家――ジャック・ロンドンって何者？』（辻井栄滋著、丹精社）、
『ジャック・ロンドンとカナダ』（写真満載のロンドンアラスカもの解説書、英文、森孝晴著、カナダプロジェクト九州）
『ジャック・ロンドン――人・文学・冒険』（深沢広介著、北星堂書店）

※ジャック・ロンドンの作品を原書で読むには、『ジャック・ロンドン作品集』*The Works of Jack London* （初版を底本とした選集、大浦暁生・辻井栄滋編、本の友社刊）があるほか、大学テキスト版になっているものがいくつかある。また、『野性の呼び声』や『白い牙』はペーパーバックで簡単に手にはいる。

ジャック・ロンドンの「世界」を舞台にした作品群について

※ロンドンは、当時の作家としては珍しく（アメリカではヘンリー・ジェイムズがいるが、ロンドンの方が幅広い）、世界中の土地や人々を描いた。

イギリス・ロンドン
　　『奈落の人々』（ルポルタージュ）

オーストラリア
　　「一切れのビフテキ」

メキシコ
　　「メキシコ人」

カナダ・ユーコン、アラスカ
　　『野性の呼び声』、『白い牙』、「焚火」、「恥さらし」、「生の掟」、
　　「生命にしがみついて」など多数

南太平洋
　　『南海物語』（8 編、短編集）、「シナーゴウ」*

ハワイ
　　「さよなら、ジャック」*、「ハンセン病患者クーラウ」*、
　　「チュン・アー・チュン（椿阿春）」*、「アーキム（阿金）の涙のわけ」*、
　　「誇り高き家系」、『チェリー』ほか

朝鮮半島
　　「戦争」、『ジャック・ロンドン・リポーツ』（日露戦争従軍記）
　　「陛下御用の鼻」

中国（人）
　　「シナーゴウ」*、「チュン・アー・チュン」*、「アーキムの涙のわけ」*、
　　「比類なき侵略」*、「もし日本が中国を目覚めさせれば」（エッセイ）

日本（人）

「日本沖合での台風」（“Story of a Typhoon off the Coast of Japan”）
「江戸湾騒動」（“A Night's Swim in Yeddo Bay”）
「小笠原諸島にて―1893 年、アザラシ狩り船隊の一件」*
（“Bonin Islands”）
「人力車夫堺長と妻君と、二人の息子の話」*
（“Sakaicho, Hona Asi and Hakadaki”）
以上　1895 年発表（ロンドン 19 歳）
「お春」（“O Haru”）（1897）
『ジャック・ロンドン・リポーツ』（*Jack London Reports*）
（1904 年の日露戦争従軍記、1970 年刊行）
「黄禍論」（“The Yellow Peril”）（1904）（エッセイ）
「もし日本が中国を目覚めさせれば」
（“If Japan Wakens China”）（1909）（エッセイ）
「比類なき侵略」（“The Unparalleled Invasion”）（1910）*
「戦争」（“War”）（1911）
『月の谷』（*The Valley of the Moon*）（1913）
『チェリー』（Cherry）（1916、ロンドン死去により未完）

＊日本的な哲学が感じられる作品
『野性の呼び声』（1903）
『白い牙』（1906）
「恥さらし」（1908）

*印　『ジャック・ロンドン　多人種もの傑作短篇選』所収作品

地図

カナダ
アメリカ
サンタローザ
グレンエレン
コロマ
オークランド
サンフランシスコ
サンタクララ
サリーナス
カリフォルニア州
ロスアンジェルス
ロシア
アラスカ州
ドーソン
クロンダイク地方
アンカレッジ
スキャグウェイ
メキシコ

カナダ
ニューヨーク州
アミニア
ブロクトン
ニューヨーク
ワシントンD.C.
アメリカ
太西洋
メキシコ湾
マイアミ